中ッ原遺跡

――平成11・12・13年度基盤整備事業（土地総）中村地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書――

2003.3

茅野市教育委員会

NAKAPPARA－SITE

中ッ原遺跡

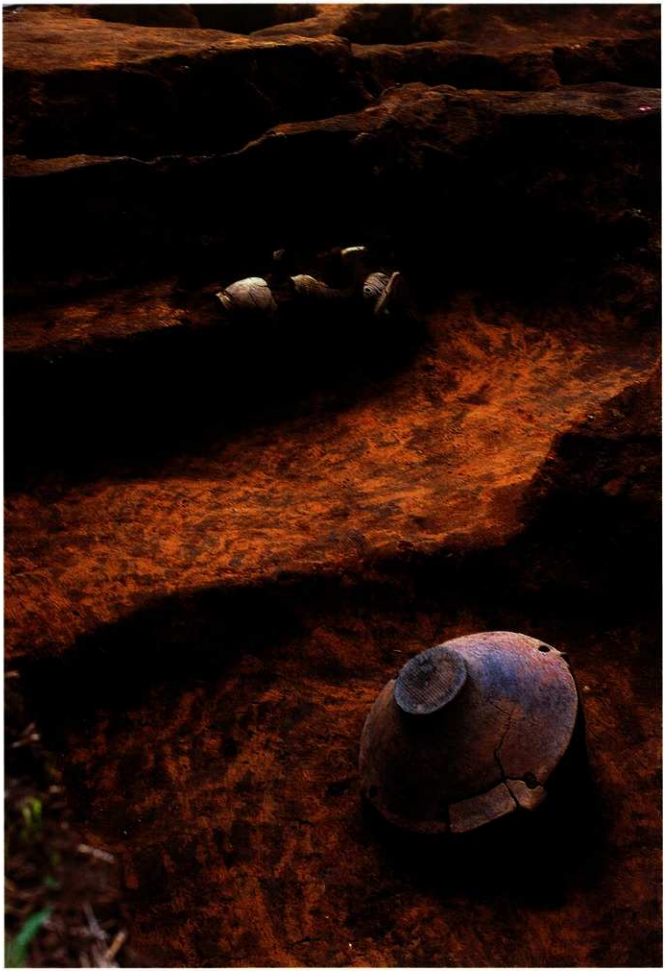
――平成11・12・13年度基盤整備事業（土地総）中村地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書――

2003.3

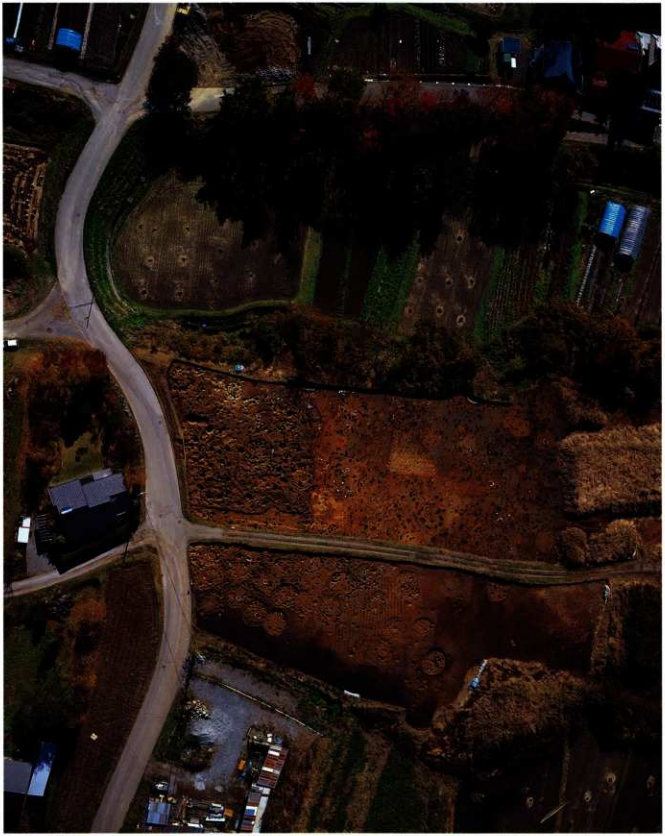
茅野市教育委員会

第Ⅲ次第70号土坑出土土偶

土偶の出土状態（第Ⅲ次第70号土坑）



第Ⅲ次第70号土坑と第94号土坑



東側台地中央の遺構群

(1)中ッ原遺跡と霧ヶ峰南麓

(2)第Ⅲ次第22号住居址出土の土器群

序　文

中ッ原遺跡は平成11・12・13年度土地区画整理事業中村地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

中ッ原遺跡は、平成４年度に県営ほ場整備事業に伴い東側約1/2が発掘調査され、縄文時代中期の大集落であることが判明していましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の全体像が明確になりました。

発掘調査の結果、縄文時代中期前半の竪穴住居址が27軒、中期後半の竪穴住居址86軒、後期前半竪穴住居址23軒と数多くの土坑が確認されました。特筆する遺構では縄文時代後期前半の土偶が埋置されていた土坑や、これに並列するように鉢を被せた葬制のなされた墓壙が発見され、土偶の性格と墓の関係について考える貴重な資料が得られました。また、出土した土偶の仮面を被ったような造形は、棚畑遺跡出土の縄文時代中期の国宝土偶（縄文のビーナス）とは異なった芸術性を秘めています。

本遺跡の立地する八ヶ岳西南麓には国特別史跡尖石遺跡を代表として、縄文時代中期の集落が数多く点在しています。中ッ原遺跡はこれらの中でも、規模の大きな拠点的集落で湖東地区の中核的な集落であったことが判明しました。

八ヶ岳西南麓の考古学的調査は、古くより地元研究者を中心になされています。湖東地区に於いては小平雪人氏等により踏査が行われ、中ッ原遺跡の資料は『諏訪史』第１巻の資料として活用されています。また、昭和４年には伏見宮殿下を迎え本格的な発掘調査がなされるなど、中ッ原遺跡は八ヶ岳西南麓の縄文時代遺跡内でも、中心的な遺跡として認識されていました。

今回の発掘調査により、縄文時代中期から後期前半までの中ッ原集落の様子が把握されたことは、八ヶ岳西南麓の縄文時代中期から後期への変化を考える重要な歴史的情報を得ることができました。今後、これらの情報を基に八ヶ岳西南麓における地域史が再編され、当地の縄文時代中期から後期のより具体的な生活の様子が解明されることでしょう。

また、土偶が出土した集落中央の広場部は、地権者・基盤整備委員会のご理解により、用地の公有地化、史跡公園化が進められ、土偶の出土状態を中心に据えた縄文時代後期の集落を体感できる場として整備がなされ、市民一般の方の憩いの場・生涯学習の場として利用されています。今後この場が八ヶ岳西南麓の縄文時代後期文化の体感の場として、利用されることを願っております。

発掘調査にあたり、文化庁、長野県教育委員会、地元地権者、基盤整備委員会、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課の皆様の深いご理解とご協力に感謝すると共に、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成15年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　源美

例　言

1．本書は、茅野市長矢崎和広と茅野市教育委員会教育長両角源美との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成11・12・13年度基盤整備事業（土地総）中村地区に伴う、長野県茅野市中ッ原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、茅野市役所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成11・12・13・14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成11・12・13・14年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節４調査の体制として記載してある。

3．発掘調査は第Ⅱ次の調査を平成11年６月４日から平成12年１月31日、第Ⅲ次調査を平成12年４月21日から平成13年１月30日まで、第Ⅳ次調査を平成13年５月１日から平成13年10月16日まで行い、出土品の整理は発掘調査終了後平成14年度に実施し、報告書の刊行は平成14年度に茅野市文化財課が行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅰ章第２節３に記してある。

5．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡　例

1．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

2．本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/30、土器拓本1/3、の縮尺を基本とした。

3．土層の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

4．挿図中におけるスクリーントーンは遺構部分では焼土、貼床等を示した。

目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会教育長　両角 源美
例 言・凡 例

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過……1
　　1．調査に至るまでの協議……1
　　2．本調査に至るまでの協議経過と諸事務……1
　第2節　発掘調査の方法と報告書刊行……3
　　1．発掘調査の方法とその経過……3
　　2．調査日誌（抄）……3
　　3．遺物整理と報告書作成作業……5
　　4．調査の体制……7
　第3節　発掘された遺構・遺物の概要……7
　　1．遺構の概要……7
　　2．遺物の概要……8
　第4節　発掘調査に伴う諸事業の記録……9
　　1．成果の公表……9
　　2．土偶復原・レプリカ作製と中ッ原遺跡の保存……10
第Ⅱ章　遺跡の概観……12
　第1節　遺跡の位置と環境……12
　　1．遺跡の立地と地理的環境……12
　第2節　遺跡周辺の歴史的環境……14
　　1．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置……14
　　2．遺跡の研究史……18
　　3．遺跡周辺の歴史的事象と史跡……18
第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要……23
　第1節　調査区の基本的層序……23
　　1．土層の基本的な堆積状況……23
　　2．土層の成因と性格について……23
第Ⅳ章　検出された遺構と遺物……24
　第1節　旧石器時代の遺物……24
　　1．検出された旧石器時代の遺物……24
　　2．旧石器時代の中ッ原遺跡……24
　第2節　検出された縄文時代の遺構と遺物の概要……25
　　1．検出された縄文時代の遺構……25

2．縄文時代前期の遺構・遺物の概要……25
3．縄文時代中期の遺構・遺物の概要……25
4．縄文時代中期の代表的な遺構……27
5．縄文時代後期の遺構・遺物の概要……31
6．縄文時代後期の代表的な遺構……32
7．縄文時代の主な遺物……39
第Ⅴ章　分析調査報告……66
第1節　茅野市中ツ原遺跡出土中空土偶の内容物について……66
はじめに……66
1．試　　料……66
2．方　　法……66
3．結　　果……67
4．考　　察……67
第2節　中ツ原遺跡第70号土坑の土壌化学分析……69
はじめに……69
1．試　　料……69
2．分析方法……69
3．結　　果……70
4．考　　察……72
第Ⅵ章　調査の成果と課題……75
第1節　第70号土坑出土の大形土偶の出土状態について……75
1．「仮面土偶」の出土した遺構の概要……75
2．「仮面土偶」の出土状況の概要……76
3．「仮面土偶」の破片接合関係からみた「仮面土偶」の壊され方と埋め方……76
4．「仮面土偶」の埋置方法の復原……78
5．中ツ原遺跡出土「仮面土偶」の提起するもの……78
第2節　第70号土坑出土大形土偶の製作法について……80
1．「仮面土偶」の製作法について……80
第3節　縄文時代後期前半の中ツ原遺跡の様相……83
1．中ツ原遺跡の縄文時代後期前半の住居址の概要……83
2．中ツ原遺跡の縄文時代後期前半の集落構成……84
3．八ヶ岳西南麓の縄文時代後期前半の遺跡……85
4．出土遺物からみた後期前半の遺跡……88
第4節　調査の成果と今後の課題……89
1．調査の成果……89
2．調査の課題……90
図　　版
抄　　録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

１．調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過　本遺跡は昭和48年の農道拡幅、平成４年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査によりその概要が把握されており、また、当該事業地区内の表面採集の結果、西側に延びる台地全域に遺跡が広がることが確認できた。そのため、調査対象区域は台地全てとなったが、表面採集による遺物の散布状況の濃淡や、微地形等の状況から台地上に於いて数地点のまとまりがあることが確認された。

本遺跡は従来より遺物の散布状況が濃密であり、以前実施された調査結果よりも遺構密度の高い遺跡であることが想像された。そのため、調査対象は事業の計画されている台地全域とし、試掘調査による範囲確認は実施されなかった。

２．本調査に至るまでの協議経過と諸事務

調査に至るまでの協議経過　平成11年１月14日、２月16日に平成11年度圃場計画地内の遺跡の保護協議が長野県教育委員会文化財保護課・茅野市土地改良課・茅野市教育委員会文化財課により行われ、結果記録保存の方向が決定された。この協議結果、基盤整備事業（土地総）中村地区着手に先立ち20,000㎡以上の発掘調査を実施し、発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分（9.5%）については文化財保護側が負担することを確認した。発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。

平成11年度調査費は当初20,000,000円（農政側負担18,100,000円、文化財保護側負担1,900,000円）で事業を計画したが、その後遺構の密度が当初予定より希薄であったため、調査費14,050,000円（農政側負担12,715,000円、文化財保護側負担1,335,000円）に変更を行った。

平成12年度調査費は当初30,000,000円（農政側負担27,150,000円、文化財保護側負担2,850,000円）で事業を計画したが、その後調査が次年度まで継続したため、調査費22,100,000円（農政側負担20,000,000円、文化財保護側負担2,100,000円）に変更を行った。

平成13年度調査費は当初12,500,000円（農政側負担11,312,000円、文化財保護側負担1,188,000円）で契約したが、その後調査費12,000,000円（農政側負担10,860,000円、文化財保護側負担1,140,000円）に変更を行った。

平成14年度報告書作成作業を行い6,000,000円（農政負担5,430,000円、文化財保護側負担570,000円）で事業を計画した。

なお、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘調査に至る文化財補助金申請等事務経過

平成11年度（Ⅱ次調査）

平成11年４月７日　11教文第１号　　平成11年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成11年４月７日　11教文第２号　　平成11年度文化財保護事業の内示について（通知）
平成11年６月８日　11教文第６－１号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成11年６月８日　11教文第６－２号　平成11年度文化財保護事業補助金申請書提出
平成11年11月24日　11教文第80－１号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
平成11年11月24日　11教文第80－１号　平成11年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出
平成12年２月16日　11教文第１－26号　国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定変更通知
平成12年２月17日　11教文第２－26号　文化財保護事業補助金交付決定変更通知
平成12年３月24日　11教文第109－4号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金等実績報告提出

平成12年度（Ⅲ次調査）

平成12年４月４日　12教文第１－33号　平成12年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成12年６月１日　12教文第２号　平成12年度文化財保護事業の交付決定について（通知）
平成12年４月13日　12教文第６－１号　平成12年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成12年４月13日　12教文第６－２号　平成12年度文化財保護事業補助金申請書提出
平成12年12月５日　12教文第83－２号　平成12年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
平成12年12月５日　12教文第83－３号　平成12年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出
平成13年２月26日　12教文第１－33号　国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定変更通知
平成13年２月27日　12教文第２－33号　文化財保護事業補助金交付決定変更通知
平成13年３月23日　12教文第106－9号　平成12年度国宝重要文化財等保存整備費補助金等実績報告提出

平成13年度（Ⅳ次調査）

平成13年４月12日　13教文第１－37号　平成13年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成12年６月１日　13教文第２－37号　平成13年度文化財保護事業の内示について（通知）
平成13年４月17日　13教文第４－１号　平成13年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成13年４月17日　13教文第４－２号　平成13年度文化財保護事業補助金申請書提出
平成14年１月10日　13教文第106－1号　平成13年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
平成14年１月10日　13教文第106－２号　平成13年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出
平成14年２月27日　13教文第１－37号　国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定変更通知
平成14年２月27日　13教文第２－37号　文化財保護事業補助金交付決定変更通知
平成14年３月22日　13教文第127－6号　平成13年度国宝重要文化財等保存整備費補助金等実績報告提出

平成14年度（遺物整理・報告書刊行作業）

平成14年４月８日　14教文第１－27号　平成14年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成14年４月９日　14教文第２－27号　平成14年度文化財保護事業の内示について（通知）
平成14年４月17日　14教文第４－１号　平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成14年４月17日　14教文第４－２号　平成14年度文化財保護事業補助金申請書提出
平成15年１月10日　14教文第91－１号　平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
平成15年１月10日　14教文第91－２号　平成14年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出

発掘諸法令事務の経過

平成11年４月15日　11教文第６－11号　中ッ原遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の提出
平成11年５月６日　11教文第13－５号　中ッ原遺跡発掘調査範囲について（申請）の提出
平成11年５月19日　11教文第18－２号　中ッ原遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条２第１項）の提出
平成12年12月26日　12教文第90－２号　中ッ原遺跡発掘終了報告の提出
平成13年10月17日　13教文第75－１号　中ッ原遺跡発掘終了報告の提出　（守矢昌文）

第２節　発掘調査の方法と報告書刊行

１．発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法　表面採集により遺跡の広がりは、台地全体広範囲に広がっていることが把握された。この結果をもとに調査範囲を決定し、最終調査面積は11,590㎡となった。調査区のグリッド設定は、公共座標Ｘ＝3070、Ｙ＝－25600、標高959.117ｍを基準とし、10ｍピッチのグリッドを設定した。

遺構測量　遺構の測量は写真測量を実施しこの図を基本としたが、遺物の平面分布、遺物の出土状態や土坑内の礫等については、遣り方測量や平板測量の成果を写真測量図に反映させ修正を加えた。基本土層の観察は、畑地内は耕作等の関係よりプライマリーな土層堆積を示している地点はなかったが、最も耕作の影響を受けず土層の遺存状態の良好であった調査区西壁において行った。なお、発掘現場における諸記録は百瀬一郎、守矢昌文、遠藤佳子、篠原リカ子、宮坂ひとみ、森 浩子が携わった。

２．調査日誌（抄）

平成11年度調査（II次調査）

６月28日　テント及びシート等の機材を搬入と並行して、台地先端部より重機を用い表土剥ぎを実施する。
７月１日　作業員増員により、本日より本格的な遺構確認に入る。
７月６日　重機を用いて表土剥ぎ作業の継続を、調査区東側地点に於いて行う。調査区西側台地先端部を中心に縄文時代柱穴状の遺構が多数検出される。本格的に土坑の半割作業と、土層断面図の作成作業に入る。
７月９日　夏を思わせる暑い日である。土坑の半割作業、廃土処理の継続。土層断面の観察と、土層断面図の作成、遺構写真の撮影を行う。
７月15日　土坑半割作業の継続。第207号土坑西側坑底よりヒスイ製垂飾りが、２点並んで出土する。
７月26日　梅雨明けとなる。第375号内覆土より軽石製品が出土する。
８月２日　土坑の半割作業の継続。配列を持つ土坑について写真撮影を行う。
８月11日　東側調査区の土坑の半割作業の継続。。第572号土坑西脇土坑内より、コハク製垂飾が出土。
８月12日　土坑の半割作業の継続。第614号土坑坑よりヒスイ製垂飾、滑石製垂飾出土。
８月23日　残暑厳しい日。土坑の半割作業の継続。午後国立歴史民俗博物館長佐原 眞氏、聖光寺住職松久保秀胤氏来跡。
８月31日　第７号・第８号・第９号住居址の調査に入る。掘り上げた土坑の写真撮影。
９月６日　第689号上坑内より炭化したクリが詰まったような状態で出土する。
９月27日　秋晴れの日。第10号住居址の写真撮影後、埋甕炉遺物出土状態の平面図。
９月29日　第９号住居址の遺物取り上げ作業。

10月５日　穏やかな秋の日。土坑の半截作業の継続。第７号・９号住居址の清掃作業。

10月12日　第７号住居址掘り上げ、13号住居址清掃作業。土坑土層確認。

10月20日　八ヶ岳に初冠雪。調査区全体清掃の実施。

11月４日　寒い日で調査区全体に霜柱が立って、航空写真測量に備えての清掃作業が大変である。午前11時30分より測量を実施する。

11月13日　昨日の雨も上がり見学会を実施する。午前中見学会の準備。午後１時より見学会を実施、参加者約100名を数える。

11月17日　朝方の冷え込みにより調査区全体が霜柱で覆われる。遺物出土状態の平面図作成と、遺物取り上げ作業。

11月19日　平面図の構成作業と、平面図の補足作業を行う。

12月３日　発掘道具の片付けに入る。図面の最終点検、基本層序の観察等を実施する。

平成12年度調査（Ⅲ次調査）

５月８日　調査前の道具点検、整備を行う。

５月10日　道具類を搬入。調査区の表土剥ぎ作業に先行して、表面採集を実施する。

５月11日　重機を用いた表土剥ぎ作業を台地北側より実施。住居址が密集して確認され縄文中期の遺物が混然とした形で検出される。

５月18日　住居址の掘り下げ、表土剥ぎの継続。第４号住居址覆土内より土偶胴部破片。

５月23日　夏を思わせるような暑い日。表土剥ぎ作業の継続。第６号住居址までの掘り下げ作業を行う。住居址の重複関係が著しい。

６月１日　重機による表土剥ぎ作業が南側範囲に及んだため、急遽南側のジョレン掛け作業を実施する。土坑を中心とした著しい遺構の重複が認められる。

６月22日　住居址の掘り下げ作業の継続。第25号住居址覆土内より土偶胴部破片。第22号住居址内には大量の中期土器が廃棄されている。

７月３日　第22号住居址遺物出土状態写真撮影。第25・27号住居址の掘り下げを継続。

７月22日　茅野市5000年祭関連イベント縄文の里ウォークが実施され、県内外から多くの参加者が集まり、現場の見学を行う。

８月２日　住居址の掘り下げ作業の継続。八ヶ岳総合博物館学芸員実習生に来跡。

８月９日　遺構掘り下げ作業の継続。第38号住居址写真撮影。尖石縄文考古館縄文教室30名発掘体験に来跡。

８月22日　猛暑が続く。重複する遺構群の写真撮影。本日より調査区南側範囲の調査。

８月23日　暑さが厳しい。土坑群の掘り下げ作業継続。午後２時土坑内よりほぼ完形の大形土偶が出土。

８月24日　昨日発見された土偶の状況確認のために、市長・教育長視察。

８月25日　土偶出土状態写真撮影に備え、清掃作業と詳細観察を実施。

８月26日　土偶出土の報道公開・一般公開の日程、今後の対応等打ち合わせ。

８月27日　土偶出土の測量を実施。

８月28日　土偶出土の報道公開。新聞・テレビ局等多数取材に来跡。明治大学教授戸沢充則先生、長野県遺跡調査指導員桐原健氏、樋口昇一氏、長野県教育委員会文化財・生涯学習課埋蔵文化財係来跡。

８月29日　明日の一般公開日に備えて、見学路等の準備。新聞報道等により見学者が訪れ対応に追われる。茅野市文化財審議委員、宮坂光昭氏、武藤雄六氏来跡。

8月30日　一般公開日。午前地元小中学校見学に訪れる。公開時間午後1時からを見学者多数のため時間を早め公開をする。見学会には県内外より約4,000人の見学者があり、駐車場・見学者対応に教育委員会職員が追われる。午後4時文化庁美術学芸課原田昌幸文化財調査官来跡。

8月31日　土偶掘り上げを戸沢充則先生、樋口昇一氏指導のもとに実施する。掘り上げの状況は報道各社に公開する。午後4時40分に完全に掘り上げる。

9月5日　土坑の掘り下げ作業の継続。第70号土坑の土壌サンプリングを行う。

10月12日　文化庁記念物課岡村道雄主任調査官来跡。今後の遺跡の取り扱い等について指導していただく。

10月18日　八ヶ丘に初冠雪。遺構掘り下げ作業の継続。

11月1日　航空写真測量に備えて調査区全域の清掃作業を実施するが、降雨のため延期とする。東京都立大学山田昌久氏来跡。

11月14日　遺構掘り下げ作業の継続。掘り上げた石囲い炉の精査。第32号住居址ベルト内より土偶が出土。

12月5日　第2回目の航空写真測量を実施する。

12月6日　集落中央部土坑群内鉢被せ用の浅鉢を取り上げる。　（守矢昌文）

平成13年度調査（Ⅳ次調査）

5月7日　表土剥ぎ作業開始。

5月20日　ジバングクラブ見学の準備を行う。

7月19日　第108号住居址掘り下げ作業継続。土坑群を掘り始める。

8月9日　ラジコンヘリによる空中撮影を実施する。

8月20日　昨日実施された縄文文化講座講師の桐原　健氏、渡辺　誠氏、吉田敦彦氏が来跡。

9月6日　航空測量に際して清掃作業と補備測量を実施する。

9月7日　ラジコンヘリによる第2回目の航空測量を実施する。

9月8日　遺跡見学会を実施し、約130名が参加する。

9月13日　ほ場の工事との調整を実施し、西側から切り渡しをすることとする。

9月20日　作業の継続。縄文文化賞選考委員小林達雄氏来跡。

9月26日　農道部の再調査を実施する。

10月11日　遺構全体のレベリング作業を実施する。

10月16日　本日で調査を終了して機材等の撤収を行う。　（百瀬一郎）

3．遺物整理と報告書作成作業

遺物の整理と遺物の復原　　遺物整理・報告書作成は他の事業の合間を縫い、調査終了後から実施した。遺構・遺物の内、縄文時代中期から後期の資料に重点を置き整理を実施した。住居址覆土内からの遺物については、その出土位置や出土層位、また、覆土内に含有されている礫との供伴関係等に注意しその出土位置を記録に留めた。表土から遺構確認面まで重機を用いて土砂を削除したことから、時期別の遺物包含層の状況について観察することができず、重複関係が著しい遺構については、遺構との供伴関係の曖昧な遺物も生じたが、基本的には遺構覆土内のものは一括りで取り扱った。

発掘調査は平成11・12・13年度の3回に亘り行われたために、縄文時代中期の土器片を中心にコンテナ約162箱と多量なものとなり、遺物洗浄に手間取った。遺物の注記の略号は遺跡番号の60を冠し、遺構名、地点・層位の順としたが、調査年次ごと平成4年度をⅠ次、平成11年度をⅡ次、平成12年度Ⅲ次、平成13年度

Ⅳ次とした。本来ならば余点注記をすべきであるが、時間的な制約等により石器・石製品・土製品・実測用土器・拓本用土器等について原則として行った。

土器の復原は遺物整理と同時に行い、遺構出土の器形の復原できるものについて実施した。復原には石膏を用い器形復原に重点を置いたが、時期決定資料等については、図上復原可能なようにした。土器復原はもっぱら牛山徳博・小松とよみ・原 敏江・矢崎つな子・篠原リカ子が行った。

第70号土坑出土土偶の復原については、X線CT写真やCR写真資料、胎内小形カメラによる撮影、胎内の土壌の分析等を含めて、できる限りの情報を探る形とし、株式会社東都文化財保存研究所に委託した。なお、復原と並行してレプリカの作成も行われた。

遺構平面図等・写真の整理　遺構平面図は、航空写真測量により得られた1/20の原図を、現場に於いて遺構と対照し校正を行い、また、石囲炉、集石、一括土器出土状態等については、平板測量、遣り方測量等により平面図を作成し、航空写真測量図と合成した。土層断面図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握を目的に行ったが、遺構の重複関係が著しかったりした土坑群等については、全てについて土層断面図を作成することができなかった。航空写真測量を導入し省力化を図ったが、補足測量の問題、図化表現の問題等今後の検討課題である。

現場に於ける記録は、測量図だけではなく、写真記録を採っているが、カラースライドポジ・モノクロネガ・カラーネガは相当な量となり、整理に手間取ったが、ネガについては現像後ベタ焼きしファイル保存とした。なお、原稿執筆用・報告書図版用にはキャビネ版プリントを利用した。また、記録用として、35㎜フィルム写真記録、4×5版写真記録、ビデオ撮影、土偶出土状態3D写真撮影を実施した。

遺物実測と報告書作成　遺構・遺物が膨大な量で、この資料中より時期決定資料を中心に選択し、資料化に努めた。特に縄文後期前半に焦点をあてて遺物の実測やそのトレースを写真実測により実施したが、資料の全てを図化するには至ってはいない。また、報告書に於いては、ページ数の関係からこれらの全てを図示することはできなかった。

現場に於いて作成した図については、報告書中に図示するように配慮したが、土坑の土層断面図等については一部を図示したに過ぎない。なお、報告書中において本来調査された遺構・遺物全体を掲載し論考すべきであるが、時間的・予算的制約があり、すべてを記載することができず、とりあえず今回は概要報告に止め、「仮面土偶」の縄文後期前半に焦点をあて概要をまとめた。今後本報告刊行に向けて整理を進めていきたい。執筆分担は文末に記し、図版編集については百瀬が担当した。

遺構写真測量・写真撮影・遺物復原・科学分析等の委託　事業を進めるに当たり、測量に関わる部分や写真撮影、重要遺物の復原、科学分析等については下記の業者に委託し事業を進めた。

基準杭測量：入原測量有限会社

遺構写真測量：技研システム株式会社（平成11年度）、株式会社シン技術コンサル（平成12年度）、三和航測株式会社（平成13年度）

写真撮影：考古造形研究所

遺物写真実測：株式会社東京航業研究所

遺物復原：㈱東都文化財保存研究所

科学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社

4．調査の体制

調査主体者　両角源美（茅野市教育委員会教育長　平成10年７月31日より）

事務局　宮坂泰文（茅野市教育委員会教育次長　平成13年３月31日まで）
伊藤修平（茅野市教育委員会教育部長　平成13年４月１日より）
矢嶋秀一（文化財課長　平成14年３月31日まで）小平廣泰（文化財課長　平成14年４月１日より）鵜飼幸雄（文化財課文化財係長　平成13年３月31日まで）守矢昌文（文化財課文化財係長　平成13年４月１日より・平成11・12年度現場担当）小池岳史　百瀬一郎（平成13年度現場担当）小林健治　柳川英司　大月三千代（平成13年３月31日まで・平成14年４月１日より）金井美代子（平成13年４月１日より平成14年３月31日まで）

調査担当者・報告書執筆　守矢昌文　百瀬一郎　**調査補助員**　牛山徳博　小松とよみ　原敏江　矢崎つな子　**発掘調査・整理作業協力者**　牛尾ふじ子　牛山才司　遠藤佳子　金子清春　北原きよゑ　小池泰幸　小平義市　小平長茂　小平美智子　塩原博子　篠原リカ子　篠原仁志　長石穎文　花岡照友　樋口豊　日達英子　宮坂勇　宮坂ひとみ　三輪辰秋　森浩子　柳平年子　吉田淑子　若林洋平

発掘調査期間中、遺物整理期間中、諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課並びに、中村地区土地区画整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課埋蔵文化財係長吉岡道明氏、主査宮崎篤氏、指導主事原明芳氏、平林彰氏、廣瀬昭弘氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

戸沢充則　佐原真　小林達雄　岡村道雄　原田昌幸　岡田康博　宮坂光昭　山田昌久　吉田敦彦　渡辺誠　桐原健　樋口昇一　神村透　武藤雄六　丸山敏一郎　会田進　赤羽義洋　青木正洋　石井寛　大竹憲昭　大竹幸恵　小坂英文　河西克造　櫛原功一　小林公明　小松隆史　小安和順　五味一郎　五味裕史　斎藤弘　斉藤糸子　佐野隆　高見俊樹　勅使河原彰　寺内隆夫　中沢道彦　中西眞也　長崎元廣　田中総　田中慎太郎　田中洋二郎　樋口誠司　平出一治　三上徹也　宮坂清　宮下健司　百瀬長秀　綿田弘実

第３節　発掘された遺構・遺物の概要

１．遺構の概要

検出された遺構の概要　本遺跡から検出された遺構は、縄文時代中期初頭、中期前半、中期後半、後期前半に帰属するもので、中期の遺構が主体を占める。詳細に見ると中期の遺構は数段階が欠落するものの、ほぼ中期初頭から後期前半までの変遷が窺え、集落の変遷等を考える上に重要な資料が得られている。

検出された遺構　検出された竪穴住居址の番号は、昭和48年、平成４年度のものと通番が整理の都合上望ましいが、平成４年度の調査成果が完全に整理されていないために、とりあえず平成11年度分（Ⅱ次）から新規に第１号住居址から番号を付し、平成12（Ⅲ次）・13年度（Ⅳ次）は、住居址番号が未整理であり、新たに付けると煩雑になることより通番とした。なお、土坑番号についても、Ⅱ次調査の整理が済んでいなかったためにⅢ次分は新規に番号を付しⅣ次分に続けた。そのために土坑番号について煩雑なものとなってしまった。

縄文時代の住居址はⅡ次で第１号から第14号まで・Ⅲ次からⅣ次では通しで第１号から第122号まで（第Ⅲ次第１号～81号まで調査着手、第Ⅳ次は82号～122号までの番号を付し、第Ⅲ次に完掘できなかった第52号・56号・57号・59号・69号・72号～81号までについて継続調査を実施している。）番号が付されており、この番

号に沿って、第Ⅳ章第２節１は記されている。調査後図面整理中に判明したものについては、番号が付されていないために整理段階で新たに付した。なお、住居址としたものの中で、壁体・炉・床の確認ができず柱穴だけが規則的に巡るものも住居址として取り扱った。また、昭和48年調査の住居址について照合が難しかったため新たにⅡ次・Ⅳ次調査時に番号を付してある。

方形柱穴列については、現場で確認できたものの他は、図面整理中に見出されたものがあり番号を付した。なお、現場で確認されたものは整理の段階で再検討されたりしており、現場写真と図とが異なっている場合もある。最終的には12基の存在が確認された。

土坑については、柱穴状、ピット状、小竪穴状等様々なものを含んでいるが、便宜上土坑と一括して番号を付した。土坑は重複等が著しい場合が多く、また、数も膨大であったことより、現場に於いて全てに番号を付すことは煩雑であったために、遺物出土のものに限り番号を付した。そのために、実際の土坑数と土坑番号は合致していない。一応番号を付したものは、Ⅱ次792基、Ⅲ～Ⅳ次1,060基の登録をしたが、実際には未登録の約1,000カ所を加えた2,852基が調査されたことになる。

これらの土坑の中で特筆すべき土坑は、ヒスイ製垂飾・コハク製垂飾出土のものや、鉢被せのなされたもの、Ⅲ次第70号土坑のように大形土偶が出土したものなどある。これらは、他の土坑と比較すると上面観が小判型を呈しており、その覆土の状態等から墓壙と考えられ、集落内での位置等に注目される。

集石遺構はⅡ次調査台地南側縁辺に検出され、複数のブロックの集合体のような構成を採るが、下部遺構との検討から竪穴住居址の外周礫等と関連を有するものであろう。

２．遺物の概要

旧石器時代の遺物　旧石器時代に確実に帰属すると思われる遺物が１点得られている。台地頂部グリッド周辺で、黒曜石製槍先型尖頭器先端約1/2が表面採集されている。

縄文時代の遺物　遺物の主体を占めるものは縄文時代の遺物である。特に中期のものが主体を占め、続いて後期のものとなる。断片的であるが前期のものが含まれるが、早期・晩期の遺物は見られない。

復原された土器はほぼ完形のもの、半完形品合わせて203点であるが、時間的な関係より復原は一部のものとなってしまった。

土製品では後期大形土偶１、中期土偶６が出土しており、量的には多いとは言えないものの、ある程度の量を保有していたことが判明した。なお、土偶は中期前半のものから後期前半までのものである。その他土製品として小形土器が出土している。

石器は総数852点が得られているが、全てを資料化することはできず、また、図示したものも限定されている。注目される石器としては、大形打製石斧や土坑内からの大形石匙なども注目される。

石器内で数量的に卓越する器種を見いだすことはできなかったが、縄文中期中葉の場合打製石斧が多出する傾向が認められた。

特筆する遺物として軽石を素材とする石製品を挙げることができる。八ヶ岳火砕流内に含まれる軽石を素材とした小形の器、凹石状等の形状に加工しており、まとまった量が出土している。また、石製品ではヒスイ製垂飾４点、コハク製垂飾１点、滑石製垂飾２点が出土している。これらのヒスイ製垂飾、コハク製垂飾、滑石製垂飾は土坑内に副葬されたような状態で検出されており、出土状態も含めて注目すべき遺物である。

黒曜石は製品・素材・原石の総重量は43.7ｇを量り、黒曜石の原産地を背景とした霧ヶ峰南麓に位置する遺跡を除けば、その重量は割合多いと言えよう。特にⅡ次第76号住居址出土の15cm大の黒曜石原石は、特筆

すべきものであろう。

平安時代・中世・近世の遺物　平安時代・中世に帰属する遺物の検出はないが、近世から近代にかけての陶磁器片が若干検出されているが、遺構に伴うものではなく出土状態から考えると、畑耕作に伴い堆肥等に混在したものと考えられる。なお、これらの陶磁器は19世紀末からのものが主体を占め、特に瀬戸窯染め付け磁器碗・皿類で、これに地方窯産の壺・鉢が加わっている。　（守矢昌文）

第４節　発掘調査に伴う諸事業の記録

１．成果の公表

遺跡見学会・速報の公表　広く調査状況を公表するために、遺跡見学会を平成11・12・13年度各年度ごとに行った。特に平成12年８月30日に実施された見学会は、８月23日に発見され、８月28日に報道発表された。後期大形土偶の出土と云ったホットな話題を、迅速に公開することを目的に実施され、特に大形土偶の出土状態を生のままでの現地公開は、遺構の保全や警備上の問題等があったが、八ヶ岳山麓の縄文文化を全国に発信する観点から市教育委員会全体の応援の元に大々的に行われ、全国より約4,000人に上る見学者が訪れた。また、大形土偶の掘り上げ状況ついても、メディアを通じて８月31日にその様子が中継された。

遺跡の速報についても、迅速に発掘成果を広く公表することを目的に平成11・12・13年度の発掘調査に関わる調査速報を下記のとおり実施し、広く一般に公開・普及に努めた。

調査速報は、平成11・12・13年度共にその成果について２月11日諏訪考古学研究会主催諏訪地区遺跡調査研究発表会において守矢・百瀬が行った。また、平成12年10月14日地元山口区民対象の調査概要報告を皮切りに、平成12年11月19日青森県・青森県教育委員会主催「三内丸山遺跡・縄文シンポジウム2000」「中ッ原遺跡」、平成13年６月３日長野県考古学会春季例会発掘調査成果発表「茅野市中ッ原遺跡発見の縄文時代後期「仮面土偶」の概要」、７月８日長野県立歴史館主催平成13年度長野県立歴史館地域セミナー（諏訪セミナー）「茅野市中ッ原遺跡の「仮面土偶」について」、８月４日信濃教育会主催平成13年度（第39回）臨地講習「地方史」において「茅野市中ッ原遺跡の「仮面土偶」出土からみた八ヶ岳西南麓の縄文時代後期」、９月５日諏訪市公民館主催平成13年度諏訪市公民館講座で「茅野市中ッ原遺跡「仮面土偶」出土からみた八ヶ岳西南麓の縄文時代後期―ここまでわかった「仮面土偶」―」、11月９日第30回明治大学考古学ゼミナール「中部高地の考古学―山の視点―」で「縄文のマツリと土偶」、11月11日上田市立信濃国分寺資料館主催市民講座に於いて「茅野市中ッ原遺跡の「仮面土偶」出土からみた八ヶ岳西南麓の縄文時代後期―ここまでわかった「仮面土偶」―」の講演を守矢が行った。

後期大形土偶については発見当初から順次公開していくことを原則として、調査時の一般公開（平成12年８月30日）、掘り上げ時の報道公開（平成12年８月31日）、復原途中の報道公開（平成13年３月９日）、完成時の報道公開（平成13年４月12日）を実施し、発見から復原完成までをメディアを通じて公開した。なお、この過程を地元ケーブルテレビが記録し、随時作業過程の放映を行った。

中ッ原遺跡の概要と大形土偶の出土状況についての速報として、戸沢充則「長野考古学　歴史遺産を新千年紀へ」『中日新聞』平成12年10月26日。守矢昌文「中ッ原遺跡の発掘調査―縄文時代後期大形仮面土偶の検出―」『日本考古学第11号』。「縄文後期大形仮面土偶の発見―茅野市中ッ原遺跡の概要―」『信濃考古』第163号。「中ッ原遺跡」『三内丸山縄文ファイル』№69に発表された。

また、多くの刊行物にも大形土偶の出土状態等の写真が掲載された。掲載物の概略は次のとおりである。「発掘・発見　日本の歴史」『知恵蔵2001』。「古代史発掘総まくり2000」『アサヒグラフ別冊』。「情報アラカ

ルト2001」『歴史読本』。「文化財信濃」27－4号。「発掘された日本列島展2001　図録」。「発掘された日本列島展2001　新発見考古速報展」「文化財発掘出土情報」。各種学校教材副読本。各種団体機関誌。

後期大形土偶の公開と企画展・特別展　　大形土偶の早期公開のために茅野市尖石縄文考古館では、土偶の復原終了後平成13年4月14日から5月20日まで平成13年度企画展「甦る仮面土偶」を行った。企画展では大形土偶を中心に、八ヶ岳西南麓等の後期の遺物を併せて展示し、この地域に於ける後期文化の様相を紹介し、特に後期の鉢被せ葬のなされた土坑墓に焦点をあて、墓と大形土偶の埋納について関連性について考えた。また、大形土偶の製作法へのアプローチや出土状態復原のためのジオラマ展示等により大形土偶への理解を深めた。なお、会期中招待者も含めて12,450人の入館者があった。

秋には9月15日から10月14日まで特別展「よみがえる土偶展」が茅野市尖石縄文考古館で開催され、大形土偶に類似する辰野町新町泉水遺跡、明科町北村遺跡、苗崎市後田遺跡が揃って展示された。期間中一般公募の大形土偶の愛称「仮面の女神」が決定した。なお、入館者は招待者も含めて6,422人を数えた。

全国に於ける平成12年度の発掘成果の速報展として文化庁が主催する「発掘された日本列島2001」に大形土偶が展示され、6月12日からの江戸東京博物館を皮切りに、小山市立博物館、田原町博物館、島根県立博物館、熊本県立装飾古墳館、大阪歴史博物館を実物又はレプリカが巡回し、全国で約85,000人の観覧者があった。

講演会・シンポジュウムの開催　　講演会・シンポジュウムについては、茅野市尖石縄文考古館企画展に併せて縄文ゼミナール「縄文の墓とまつり」が平成13年4月15日に行われ、「「仮面土偶」を生んだ縄文人」縄田弘実氏、「「仮面土偶」の仲間たち」宮下健司氏、「「仮面土偶」の発掘」守矢の三氏により、後期の集落あるいは地域文化の中で、土偶相対の中で、出土状況の詳細と解釈についての視点から、大形土偶を捉えて討論が行われた。

また、8月19日には藝科文庫・茅野市教育委員会主催の縄文文化講演会が茅野市青少年自然の森研修棟を会場に開催され、「中ッ原遺跡の仮面土偶と縄文社会」桐原 健氏、「仮面の精神史」岩井宏實氏、「土偶に見る縄文人の女神信仰」吉田教彦氏の講演の後、渡辺 誠氏をコーディネーターにパネルディスカッションが行われ、200人にも及ぶ聴講者があった。

2．土偶復原・レプリカ作製と中ッ原遺跡の保存

大形土偶の復原とレプリカの作成　　大形土偶の復元については、脆弱な部分がある点や遺物の重要性を考えて復元について専門業者に委託することとした。また、土偶が中空構造の点を考え、復元修理に合わせてレプリカ作製を行うこととした。また、土偶復元の際にできるだけ土偶製作に関する情報を得るために、様々な角度から分析を検討した。

大形土偶の復原・レプリカ作成にあたっては、㈱東都文化財保存研究所に委託した。委託内容は理化学分析用サンプル採取と分析（胎内土壌科学分析）、洗浄、X線写真撮影、CT写真撮影、胎内写真撮影等の諸記録を採った後、復原することとした。レプリカは完形の状態2体、右脚部が破損しこの破片の状態が重要であったために、破損した状態のレプリカも作成した。また、当市のレプリカ作成に併せて長野県立歴史館資料用のレプリカも製作され、都合完形レプリカ3体、右脚部破損レプリカ1体が製作された。また、土偶本体だけではなく、企画展用の展示品として出土状態の原寸大レプリカも製作され、茅野市尖石縄文考古館にて展示されている。

中ッ原遺跡の保存について　　平成12年度後期大形土偶が発見された時点に於いて、出土遺構の保存に

ついての方針について協議が行われた。その結果保存の方針として、土偶の出土状態を他の遺構との関連を持たせながら展示する。保存範囲の設定を集落の学術的な評価と共に地権者及びほ場整備事業との協議の中で考えることとした。平成12年10月12日今後の保存の方向等について、文化庁文化財保護部記念物課岡村道雄主任調査官に現地に於いて指導を受けた。その結果出土遺構を中心に保存することが方向付けられた。この結果を受け10月25日長野県教育委員会文化財・生涯学習課、茅野市土地改良課、文化財課により保護協議が開催され、土偶出土遺構とそれを取り巻く中ッ原遺跡の環状集落の広場域の一部と集落の一部の、1,276㎡を保存地区とすることを方向付けた。遺構の凍壊の危惧から地権者の同意次第保存地区の埋め戻しを実施することとした。そのために、保存地区範囲に該当した住居址炉址、第Ⅲ次第59号、第Ⅳ次第118号、第117号住居址の上面礫については検出作業に留め、断ち割り作業、取り上げ作業等は実施せず、検出現状のまま埋土保存を実施してある。

中ッ原縄文公園の建設について　　平成13年度に入り保存地区の公有地化を進めた。平成13年11月７日に土地買収契約を地権者と締結し、その後この土地の遺跡公園化のための基本計画策定に入った。

遺跡公園の基本的なコンセプトは、大形土偶の時代縄文後期前半を時間枠として設定し、発掘調査成果の具現化に焦点を当てるように設定した。特に大形土偶の出土状態が現せるような点を留意し、遺構を現況のまま露出させ、これに大形土偶の出土状態をレプリカにより加える手法を用いることとした。これにより大形土偶の出土状態をいつでも現地に於いて見ることができるように配慮した。土偶出土遺構だけではなく、この土坑を囲む範囲に検出された同時期の方形柱穴列についても発掘所見から、建柱による復元を試みた。

また、大形土偶出土土坑を中心とする土坑群をマツリゾーンと位置付け、このゾーンに取り込まれている方形柱穴列や他の鉢被葬のなされていた土坑の表示についても、マツリゾーンを構成する要素としてできる限りの復原に努めた。なお、この中心ゾーンを囲むように検出された同時期の住居址を表示することにより、環状集落としての様子を表現し、中ッ原の縄文後期前半のムラが概観できるようにした。

この基本計画に基づき平成14年度早々に実施設計を実施し、大形土偶出土土坑保存上屋を中心に、同時期の８本柱方形柱穴列のモニュメント化、環状に巡る住居址群のカラー舗装表示と周辺植栽の具体的な設計を示し、７月工事着工が行われ10月20日の竣工を目指した。なお、公園を地元地域の人々に親しんでもらう一環として、公園オープンに合わせて方形柱穴列の復原用材の曳行と柱建てを‘縄文おんばしら’として地域の人々との共働で開催し、公園のオープンを祝い、当日は約500人に上る参加者があった。　（守矢昌文）

第Ⅱ章　遺跡の概観

第１節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置　　中ッ原遺跡は長野県茅野市湖東6407－１番地他（山口）に所在する。遺跡の位置する山口地区は市域の北東に位置し、中ッ原遺跡はＪＲ中央本線茅野駅から北方向に直線距離にして約6.7kmのちょうど八ヶ岳の北西麓に位置し、遺跡の位置する台地南側に湖東山口の集落が位置する。

遺跡の地理的環境　　中ッ原遺跡は八ヶ岳の火山活動により形成された台地上に位置している。台地は畑地として利用されているが、大きくは改変されておらず、従来の尾根状台地の様相を色濃く残している。また、南側・北側に隣接する台地と細長い谷を挟んで典型的な長峰状の姿を遺存している。

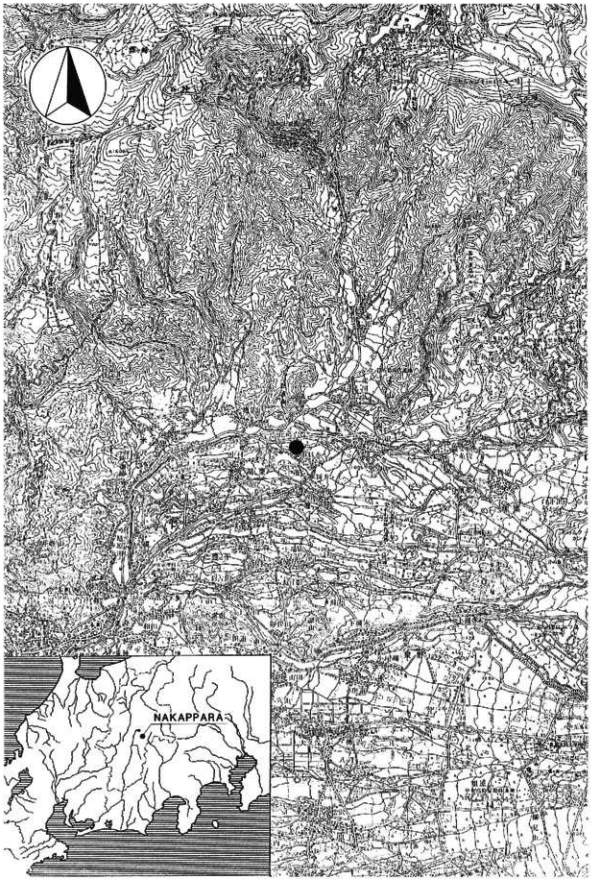
本遺跡の立地する台地を巨視的に見ると、北八ヶ岳の火山活動を起源とする、新八ヶ岳期の火砕流堆積物により形成された、第Ⅱ段丘面の北西側端が流れ下った断丘末端に位置している。台地北側に流れる渋川を隔ててそれ以北は霧ヶ峰南麓の霧ヶ峰火山岩塊と対峙し、渋川の流れる部分は深い谷となり、台地北側と河川の間は切り立った崖状となる。本遺跡の立地する台地の北側には花崗閃緑岩・石英閃緑岩・変質輝緑岩類の隆起による朝倉山が位置している。

本遺跡の立地する地形は湖東地区より大きく延びる台地の末端部に該当する。本遺跡の立地する台地は松原集落下より分岐し始め、大きく三つの台地となる。なお、台地内には侵食によると思われる小規模な入り組み谷が入り込んでいるが、この入り組み谷は畑地造成に伴い埋立てが行われ、旧態を明確に遺存してはいない。

本遺跡と北側に隣接する化蒔遺跡間には割合規模の大きな谷が入り込んでいる。この谷は典型的な長峰状の尾根間に見られるもので、谷内には自然湧水が認められ、現在では水田用として利用されているが、この湧水は生活用水として利用するのにも遜色のないものであり、遺跡内の生活用水として利用されたものであろう。また、谷内は湿地状を呈しているために動物のヌタ場であった可能性も考えられる。本遺跡の立地している台地上と谷部の底面との比高差は約７ｍを測り、谷と接する台地の南側斜面は切り立った崖状となっているが、台地際の遺構が崩落しており谷内の河川により台地際部が侵食されたものと考えられ、縄文時代の景観を考えると、台地南側は緩やかな傾斜を持ち谷部に向かっていたものと考えれる。

本遺跡の立地している台地は現状の表面観察においては、幅が細い台地としか捉えられないような地形であったが、実際に畑地により改変された部分を剥ぎ取ってみると、遺跡周辺の原地形はかなり複雑な地形を呈していたことが把握できた。それによると、台地を横断するように小規模な谷が入り込み、埋もれ谷状の地形を形成している。調査の結果明瞭な二分割の状態ではなかったが谷を挟んで集落が形成された状態であり、南北方向に入り込む浅い谷をかなり意識して展開しているような傾向が窺える。

本遺跡の立地する台地は割合幅の狭い台地に遺構が散在する形で検出されているために、全体の面積は南北方向約100m、東西方向約320m、面積約32,000㎡の広い範囲を想定できるが、遺物の散布状況や遺構の分布状態を考慮すると、遺構の分布密度は過疎の状態の部分と、遺構の過密とが大きく別れる傾向が認められ、台地全体に遺構が疎に散在する形ではなく、ある一定の範囲と空間が限定された規範の中で集落が作られたものと考えられる。



第1図　中ッ原遺跡位置図（1/37,500）

南側に位置する規模の割合大きな入り組み谷に求められる湧水や、台地が南側に緩やかな斜面を形成する点などを考慮すると、本遺跡の立地する範囲は生活条件の整った地域であると捉えられるが、台地の規模から考えると、北側に位置する尾根幅の広い範囲が利用されず、なぜこのような小規模な台地が頻繁に利用されていたのか興味深いものがあり、遺跡の選地には単なる台地規模に依ったものでないことを示している。

（守矢昌文）

第2節　遺跡周辺の歴史的環境

1．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

遺跡の地理的位置　本遺跡に隣接する山口地区は、東西に向かう八ヶ岳火山堆積物により形成された段丘面上に立地している。この段丘に接するように沖積面が発達する。北八ヶ岳西麓は南八ヶ岳南西麓に比べると全体として、火砕流の堆積が複雑となっており、笹原面（広見面）・南大塩面・芹ヶ沢面・上川面などに分かれている。本遺跡の位置する箇所は笹原面の一部に位置し、かなり複雑な火砕流による尾根状の段丘が発達している。遺跡南側の崖面の観察によると、音沢火砕流上に大塩火砕流が認められ、新期テフラが流出してしまった台地頂部においては、大塩火砕流内に含まれる軽石及び石質岩片等が露出している。なお、この火砕流に含まれている軽石は軽石製品の素材として利用されている。

本遺跡周辺に立地する遺跡　本遺跡の立地する北八ヶ岳西麓には、東西方向に走行する分断された台地が形成され、台地上には国特別史跡尖石遺跡等数多くの縄文時代を中心とする遺跡が点在している。

本遺跡周辺は湖東地区においてもある程度のまとまりを有していることが指摘されおり、地形的にも独立した尾根状台地が並列する状態を呈し、谷を挟んだ遺跡群の様相を垣間見ることのできる地域である。

本遺跡周辺には南側より新井下遺跡（59）・松原遺跡（57）・山口遺跡（58）・花蒔遺跡（61）が立地している。これらの遺跡の内で、山口遺跡と花蒔遺跡は谷を隔てて隣接し、このような立地環境は遺跡群の相互関係をつかむために重要な地域としての認識がなされている。新井下遺跡・花蒔遺跡は割合古くより遺跡としての認識がなされており、新井下遺跡では数回にわたる発掘調査も実施され、遺跡の内容が若干ではあるが把握されつつある。本遺跡はこれらの遺跡と谷を隔てて隣接しているものの、個々の遺跡の時期や位置関係等から大きな遺跡群を形成していると想定することができ得る。群を構成している遺跡の概要について記述し、本遺跡から検出されている遺構との関連性についても考えてみたい。

また、湖東遺跡群（中ッ原遺跡・新井下遺跡・山口遺跡・松原遺跡・花蒔遺跡）の周辺に隣接する遺跡群である霧ヶ峰南麓遺跡群の一部（上の平遺跡、よせの台遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡）や、芹ヶ沢遺跡群（下鳥遺跡、下ッ原遺跡、矢倉田遺跡、神ノ木遺跡）等についても遺跡群の相互関係の観点から概略を記述し、本遺跡との関連性を考えてみたい。

湖東遺跡群の概要　湖東遺跡群の特質は中ッ原遺跡や新井下遺跡のような大規模遺跡を中心に小規模な遺跡が点在する形を採るが、群とするとその範囲はあまり広くはなく、同一台地上に複数の遺跡が立地することがないことに特徴を持つ。また、群を構成する遺跡は縄文中期から後期前半と割合存続時期の短いものが主体となっている。

新井下遺跡　新井集落の西側に位置する山口集落を北側に望む尾根状台地に位置する。遺跡の立地する台地は割合複雑な形状を示しており、台地西側先端部は大きく広がり中村集落へ続き、深い谷を挟んで北側に山口集落、南東側に堀集落が広がる。遺跡の立地する台地の南側・北側斜面には、枝状に分岐する小規模な台地が認められる。遺跡は台地頂部の最も平坦な部分の広い範囲に占地している。

新井下遺跡は1958年（昭和33年）北部中学校建設に伴い８月21日から９月１日にかけて発掘調査が行われ、その結果が『涸東村史（上）』[文献1]に南原遺跡として宮坂英弌氏により報告されている。それによると「南原遺跡（中村）新井部落台地の西、堀部落の北、水田の渓を隔てた台地上にて、南北に通ずる大門街道の西一帯の耕地は、濃厚な遺物散布地である。この南斜面から新井区湯田坂善次氏が昭和十年頃、同氏所有の畑を耕作して黒土層下二尺の赤土層に直立のまま埋めてあった完形土器一個を発掘した。それは高さ35cm、口径26cm、底径８cmで沈線文で装飾し、底面に木葉の押型文ある縄文式中期末葉のもので、多分住居址内に埋置してあったものであろう。亦、昭和33年８月、この地域一帯が茅野市北部統合中学校敷地に選定され、ブルトーザで整地した時、土器、石器類の遺物が多数出土したが工事中のこととてこれを学問的に調査することができなかった。漸く下記資料が採集され尖石考古館に保管されている。

１、土器　完形に復原し得たもの三個、破片蜜柑箱三個分（縄文式中期）

２、石器　石棒（有頭完形品、基部断面円形、高サ41cm、底径18cm）

磨石斧（完形定角式一点、乳棒状破片二点）

打石斧（完形二点、破片五点）

球石一点、凹石九点、黒曜石円形石器一点」と記載されている。また、『茅野市史上巻』では「北部中学校の建物により原地形は失われたが、台地幅は200mと広く、かなりの規模の遺跡であったことがうかがわれる。」と紹介されている。

平成5年[文献2]湖東保育園建設工事に伴い本遺跡の実体が明確になった。それによると、縄文前期初頭竪穴住居址１軒、中期初頭竪穴住居址１軒、中期後半竪穴住居址曽利Ⅱ式期３軒、曽利Ⅲ式期14軒、曽利Ⅳ式期３軒、中期後半竪穴住居址７軒、時期不明２軒、中期後半～後期前半竪穴式３基、後期前半堀之内１式期円形柱穴列１基、中期後半曽利Ⅲ～Ⅳ式期方形柱穴列１基、土坑141基、平安時代竪穴住居址４基が検出されている。中期後半～後期前半の遺構は数量的には少ないものの、その分布はある程度の密度を持っており、調査範囲外にも広がる可能性を示している。

この調査に引き続き平成7年[文献3]北部中学校建て替えに伴い遺跡の範囲確認調査が行われた。その結果台地頂部の旧校舎範囲の部分に於いては、旧地形は削平され遺構等の確認はなされなかったが、埋め立てられていた北側緑辺等には旧地形が残っており、遺構の堆蔵が確認された。この調査結果に基づき新校舎の配置等が配慮され、盛り土保存が図られたが、北側の一部が削平されることに伴い平成７年に調査が実施された。調査の結果縄文中期後半竪穴住居址曽利Ⅱ式期３軒、曽利Ⅲ式期２軒、中期後半竪穴住居址４軒、後期前半堀之内１式期竪穴住居址２軒、後期前半竪穴住居址２軒、土坑１基、平安時代竪穴住居址１軒、ピット群が平成５年度の調査区に繋がるように、北側台地緑辺に沿う形で点在している。

台地全面の調査でないために、集落の全体形は判然としないが、平成５・７年の調査結果から推定すると、直径100m前後の環状集落を想定でき、中期後半の拠点的集落であることが判明している。

新井下遺跡の縄文後期後半の遺構に着目すると、柱穴が円形に巡り入り口部と思われる部分に対状柱穴が配される住居址と思われる遺構や、小型の敷石住居址が検出されており、かなりの数の住居址により構成される集落であったことが判明した。

中ッ原遺跡との関連を考えると、縄文中期初頭から後期前半まで継続する拠点的な集落といった点に共通性を持ち、割合近接する範囲に併存するように集落があったことがわかる。出土品に着目すると、軽石を素材とした石製品が新井下遺跡、中ッ原遺跡の両遺跡に見られる。

松原遺跡　湖東山口集落の立地する台地東側に寄った位置の台地基部に近い部分に立地する遺跡で、標高

は980mを測る。内容は不明であるが表面採集により縄文中期前半の土器片や磨製石斧・打製石斧・石皿・石錐・砥石等が採集されている。遺跡の内容は不明な部分が多いが、遺物散布の範囲が狭く量もそれほど多くないことから規模的にはあまり大きな集落ではなく、小規模な遺跡の可能性が高い。

山口遺跡　中ッ原遺跡の南側に位置する谷を隔てた台地のやや上方標高970mの畑地に位置している。調査等は実施されておらずその内容は不明であるが、表面採集の結果縄文中期の土器片や石器が採集されているが、散布の範囲は狭く遺物分布が希薄なことより小規模な遺跡であると考えられる。詳細な内容が不明なために中ッ原遺跡との関連を多くは語れないが、位置関係から考えると中ッ原遺跡に付随する小集落の可能性が強い。

花蒔遺跡　中ッ原遺跡の北側台地に位置しており、黒曜石剥片が若干採集されている。詳細な内容は不明である。『茅野市史上巻』(文献4)によると、付近は南原と呼ばれ『諏訪史第1巻』に記載されている山口南原から出土した石冠が当遺跡よりの出土とし、また、宮坂英弐氏も南原において敷石遺構を調査している。これらの記載が当遺跡に該当するとすれば、かなりの縄文後期から晩期にかけての遺跡の可能性がある。

霧ヶ峰南麓遺跡群の概要　湖東遺跡群と上川の浸食崖・上川沖積地を隔てて霧ヶ峰南麓と接する。霧ヶ峰南麓には小河川が発達し、この河川により扇状地が形成され、扇状地上には旧石器時代から平安時代に亘る遺跡が群となって展開する。湖東遺跡群とは直接的な関連を見出すことは少ないが、隣ムラとして捉えると何らかの関連性を有していたものと考えられる。また、湖東遺跡群とは遺跡の立地や存続時期に異なりが認められ、比較検討することで遺跡群間の特性が抽出できるものと考えられる。なお、霧ヶ峰南麓遺跡群の中でも最も近接する藤原川・前嶋川扇状地に展開する遺跡群に着目してみたい。

上の平遺跡　霧ヶ峰山塊から派生するテラス状の台地に位置し、標高は940mを測る。平成6年度に県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文前期初頭竪穴住居址1軒、中期前半狢沢式期3軒、藤内式期6軒、井戸尻式期7軒、中期後半曽利Ⅰ式期7軒、曽利Ⅱ式期8軒、曽利Ⅲ式期8軒、曽利Ⅳ式期6軒、土坑269基、方形柱穴列4基、ピット群、中世地下式坑7基が検出され、中期全般を通して存続する中核的な集落であることが確認された。また、落し穴群や旧石器時代の彫器・剥片が確認されており、この地が幅広い時期に亘る活動の場であったことが判明した。

瀬神社遺跡　瀬神社は米沢堰沢集落の産土社で、本殿は江戸時代末期に大隅流の矢崎房之助、矢崎善司により建造され、現在茅野市有形文化財に指定されている。この境内に位置する宮の下水源建設の際に資源地内より縄前期前半諸磯b式の土器片が得られている。

丸山遺跡　霧ヶ峰山塊から派生する小規模なテラス状の台地に位置し、標高は920mを測る。その内容は不明であるが、立地等より考えるとよせの台遺跡に付随する小規模遺跡の可能性が高い。

よせの台遺跡　藤原川・前嶋川扇状地末端に位置する残丘状の台地に位置する。昭和51年に工場建設に伴い調査が行われ、縄文前期初頭1軒、前期前半有尾式期1軒、諸磯a式期1軒、前期後半諸磯c式期1軒、中期後半曽利Ⅱ式期3軒、曽利Ⅲ式期2軒、曽利Ⅳ式期3軒、曽利Ⅴ式期1軒と土坑22基が確認されている。遺物は縄文早期前半押し型文土器から後期前半堀之内1式期の遺物が得られており、幅広い時期に亘る中核的な集落であると考えられる。(文献5)

一ノ瀬・芝ノ木遺跡　藤原川・前嶋川扇状地の扇央部に位置し、標高は930mを測る。平成8・9年に県営ほ場整備事業に伴い調査が行われ、縄文早期前半立野式期竪穴住居址7軒、細久保式期1軒、前期前半神ノ木式期13軒、前期後半諸磯c式期5軒、中期前半新道・藤内式期16軒、中期後半曽利Ⅰ式期4軒、曽利Ⅱ式期12軒、曽利Ⅲ式期6軒、曽利Ⅳ式期2軒、曽利Ⅴ式期2軒、中期不明11軒、後期前半堀之内式期9軒、晩期

初頭２軒と、方形柱穴列21基、後期配石群、石棺墓群、平安時代竪穴住居14軒、近世掘立柱建物１棟等が検出され、長期に亘る集落であったことが判明した。特に縄文時代全般を通して集落が存続した拠点的な集落であり、縄文後期から晩期初頭にかけての配石群と石棺墓群は注目され、この時期この地域の中心的な遺跡であったことが窺える。

牛ノ児遺跡　藤原川扇状地の扇頂部に位置する遺物が若干散布するだけの小規模な遺跡である。採集されている遺物は縄文前期末諸磯ｃ式期土器破片、黒曜石剥片、平安時代土師器甕片が少量得られている。

鳥の窪遺跡　藤原川により形成された扇状地の西端に接するように延びる山裾に形成された崖錐地に位置する遺跡で、黒曜石剥片や石槍・石鏃、縄文前期、中期の土器片が採集されている。

芹ヶ沢遺跡群の概要　　中ッ原遺跡の東側上方に位置する山麓台地に遺跡群で、湖東遺跡群と約２km隔てた渋川に臨む台地上に帯状に分布する遺跡群である。遺跡内容が不明確なものが主体を占めるが、中ッ原遺跡と同様な縄文中期集落はないようであるが、遺跡群の動き等の関連を探る上に重要かと考えられる。

下島遺跡　渋川を臨む舌状台地に位置する遺跡で、標高は980mを測る。縄文前期末の土器と弥生時代の竪穴住居址が検出されている。規模等の内容は不明な部分が多いが、調査結果から考えるとあまり規模の大きな遺跡ではないようである。

上ッ原遺跡・下ッ原遺跡　芹ヶ沢集落の南西側台地上縁辺に帯状に位置する遺跡で、標高は990mを測る。詳細な調査が行われていないため、内容については不明な部分が多いが、上ッ原遺跡からは縄文中期前半から後半までの土器片が、下ッ原遺跡からは中期後半の土器片が得られている。これらの採集遺物から考えると、上ッ原遺跡が継続性の高い遺跡と捉えることができよう。

神ノ木遺跡　下島遺跡・下ッ原遺跡・上ッ原遺跡と同一の台地上に立地し、標高は1,000mを測り、同台地内で最も広い遺跡の占地面積を占める。縄文前期前半土器のタイプサイトとして知られており、昭和(文献2)27年に同期の竪穴住居址１軒が検出しており、豊富な前期前半の土器群が出土している。

矢倉田遺跡　神ノ木遺跡の南側に位置する台地に位置している。標高は999mを測り、沖積地面との比高は約３mと割合低い台地である。平成(文献5)5年県営ほ場整備事業により発掘調査が行われ、上坑８基と時期不明の建物址１基が検出されている。出土した遺物類は少なく、黒曜石剥片類と縄文前期末土器片だけである。報告書において遺物の希少性や、遺構が土坑のみで構成される点などより市内の同類型の遺跡を検討しながら、植物質食料獲得の場としての生産域としての性格を与えている。

中ッ原遺跡と周辺の遺跡との関連性　　中ッ原遺跡と周辺に位置する遺跡群との関連を直接窺えるような遺構や遺物は得られてはいないが、中ッ原遺跡の主体となる縄文中期・後期に着目し、遺跡群の在り方について考えると、湖東山口周辺では中ッ原遺跡と、新井下遺跡の遺跡に挟まれるように、松原遺跡、山口遺跡の小規模な遺跡が点在する傾向を看取ることができ、この一つのまとまりを遺跡群として捉えることができよう。この遺跡群の中核をなす中ッ原遺跡と、新井ド遺跡はその存続時期の傾向を見ると、ほぼ同様の縄文前期初頭に竪穴住居址が作られる傾向や、その後前期末を経て中期前半から後期前半まで集落が継続する状況は、同様な傾向として捉えることができ、また、中期後半から後期前半にかけて集落が安定増大化する傾向も類似しており、中ッ原遺跡と新井下遺跡は山口集落の位置する台地（ある一定の距離を隔てて）を隔てて対峙する関係を有する核的な集落と考えられる。

中ッ原遺跡の北側に谷を隔てて対峙する花蔚遺跡との関係には興味深いものがある。花蔚遺跡の内容が不明確なために、詳細について検討ができないが、もし、『諏訪(文献1)史第１巻』に記載されている石鉾が本遺跡からの出土と仮定すると、中ッ原遺跡の集落が断絶後の縄文後期後半から晩期にかけての遺跡の展開を花蔚遺跡

に求めることができよう。また、宮坂英弐氏の調査された敷石状遺構が縄文後期のものと仮定すると、この花蒔遺跡と中ッ原遺跡は、谷を隔てて隣接する位置関係を有するものと捉えられ、上川を隔てて対峙する霧ヶ峰南麓遺跡群と、八ヶ岳西南麓遺跡群との接点上に位置する花蒔遺跡を経て中ッ原遺跡へといった経路を考えることができ、深い関連性で繋がっていたものと考えることができよう。

2．遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査　縄文時代の遺跡が密集している八ヶ岳西南麓の中において、中ッ原遺跡は、旧来より土器や石器の採集地として知られていた遺跡であり、『諏訪史第１巻』『諏訪郡先史時代遺物発見地名表』には石小刀、石錐、メンコ、石鏃、石皿、石錘の記載が見られ、地元において考古遺物採集に努めた小平雪人氏の所蔵品の中にも、中ッ原遺跡よりの採集品が多く含まれている。

中ッ原遺跡に於ける発掘調査を伴う調査は、八ヶ岳山麓に於いて最も古い時期に行われたもので、昭和４年諏訪地方の考古学的な調査に来訪した伏見宮博英氏を中心にトレンチ調査が行われ、土器２、鳥面把手、石斧、石錐、凹石、皮剥等500余点を採集している。

その後昭和11年遺跡中心部を南北に横切る農道開削時に、炉址が２・３カ所と竪穴住居址の断面、粘板岩製両頭石棒・硬玉製珠、黒曜石塊がかたまって出土した。また、昭和29年頃に地元小学校教諭・生徒により調査がなされ、顔面把手が採集されている。

本格的な調査は、昭和48年[文献10]に山口区で遺跡台地中央部を東西方向に縦断するように計画された。この計画に伴い発掘調査が茅野市教育委員会により行われ、縄文中期前半藤内Ⅱ式期１軒、中期後半曽利Ⅰ式期１軒、曽利Ⅱ式期２軒、曽利Ⅲ式１軒、曽利Ⅲ～Ⅳ式期４軒、曽利Ⅳ式期１軒、中期前半狢沢式期独立土器１基が検出され、台地の規模に比較して遺構が密集し、前期前半から後期前半までの長期に亘る集落址であることが確認された。

その後平成４年度県営ほ場整備事業に伴い遺跡範囲の東側の発掘調査が行われた。この調査により遺跡全体の約1/2が調査され、ほぼ遺跡の内容が把握された。それによると、縄文前期初頭１軒、中期初頭～狢沢式期（古）３軒、中期前半狢沢式期２軒、新道式期２軒、藤内Ⅰ式期５軒、藤内Ⅱ式期２軒、井戸尻Ⅰ・Ⅱ式期５軒、中期後半井戸尻Ⅲ式期～曽利Ⅰ式期５軒、曽利Ⅱ式期９軒、曽利Ⅲ式期10軒、曽利Ⅳ式期３軒、曽利Ⅴ式期３軒、後期前半称名寺式期１軒、堀之内２式期３軒が検出され、長期に亘り住居址が存続していたことが確認され、ある程度の集落全体の様相が把握された。それによると台地幅が狭い尾根状台地に於いて、時期により住居址分布に偏りが認められ、前期から中期前半藤内Ⅱ式期までは住居址が点在する傾向が、中期前半井戸尻Ⅰ・Ⅱ式期以降は調査区西側の土坑群を取り囲む形、環状集落へと転換していく傾向を指摘している。

3．遺跡周辺の歴史的事象と史跡

歴史的事象等よりの山口地区　本遺跡に於いて平安時代以降の遺構・遺物の検出はなく、特に現在の山口集落に関わるような近世の資料は得られてはいない。

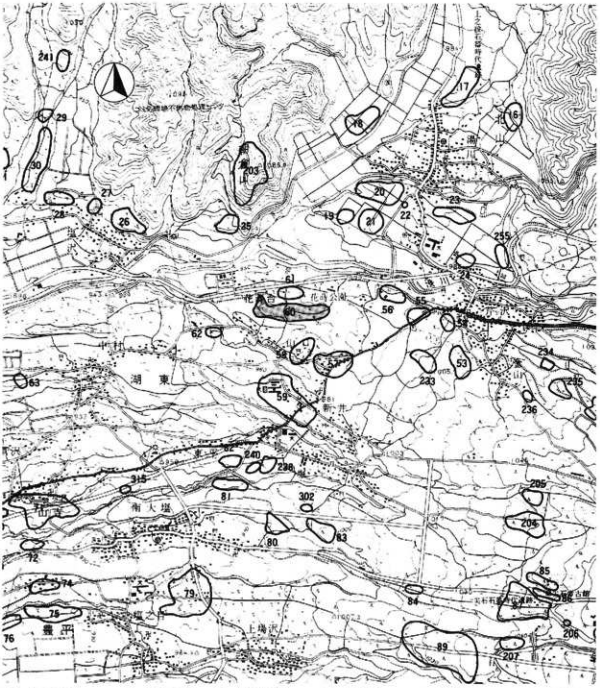
八ヶ岳西南麓における郷村開村の文献記録はそれほど多いとは言い難い。本遺跡に隣接する山口地区における文献資料は特に少なく、山口集落は山口新田として江戸時代前期に開発されたようで、寛文11年（1671）の宗門帳によると、家数６軒、内２軒つぶれ家、人数41人と記載されており、規模の小さな新田であったことがわかる。元禄３年（1690）３月の検地帳には中村分山口新田と記載されているが、この年に中村から独

立して庄屋を立てており、この頃から山口集落が本村の中村から独立したものと考えられている。また、中村・山口は三之丸千野家との関連を窺える記録が多く残されている。

「旧諏訪藩主手元絵図」享保18年（1733）によると「山口新田　一　家数拾六軒　一　御城より三里弐拾五町拾三間五尺　山口新田宿中迄」との記載がなされている。また、絵図には湯川村、塩沢村への道が記載され、ちょうど中ッ原遺跡周辺で交差するように描かれており、この地が集落間をつなぐ交通の要であったことが窺える。（守矢昌文）

（註・参考文献）

文献１．1961	宮坂英弋	「原始時代」『湖東村史』上	湖東公民館
文献２．1994	百瀬 一郎	『新井下遺跡』	茅野市教育委員会
文献３．1996	小林深志	『新井下遺跡』	茅野市教育委員会
文献４．1986	宮坂虎次	「花蒔遺跡」『茅野市史上巻』	茅野市
文献５．1978	宮坂虎次ほか	『よせの台遺跡』	茅野市教育委員会
文献６．2001	守矢昌文ほか	『‥ノ瀬・芝ノ木遺跡』	茅野市教育委員会
文献７．1983	宮坂虎次	「神ノ木遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(3)主要遺跡(中・南信)』	長野県史刊行会
文献8．1994	功刀　司	『矢倉田遺跡』	茅野市教育委員会
文献9．1924	鳥居龍蔵	『諏訪史第１巻』	信濃教育会諏訪部会
文献10．1974	宮坂虎次	『中ッ原・和田遺跡』	茅野市教育委員会
文献11．1993	小池伍史	『中ッ原遺跡』	茅野市教育委員会



16. 矢の口遺跡　17. 上之段遺跡　18. 高風呂遺跡　19. 窪田遺跡　20. 掛形遺跡　21. 上の平遺跡
22. 湯川経塚遺跡　23. イモリ沢遺跡　24. 上ゲ溝遺跡　25. 横山遺跡　26. 上の平遺跡　27. 丸山遺跡
28. よせの台遺跡　29. 芝の木遺跡　30. 一ノ瀬遺跡　53. 神ノ木遺跡　54. 上ッ原遺跡　55. 下ッ原遺跡
56. 下島遺跡　57. 松原遺跡　58. 山口遺跡　59. 新井下遺跡　60. 中ッ原遺跡　61. 花壇遺跡
62. 辻屋遺跡　63. 中村遺跡　70. 八幡社前遺跡　71. 山寺遺跡　72. 経塚遺跡　74. 日向上遺跡
75. 塩ノ目遺跡　76. 中ツルネ遺跡　79. 梨ノ木遺跡　80. 立石遺跡　81. 城遺跡　82. 水屋遺跡
84. 神立林遺跡　85. 与助尾根遺跡　86. 与助尾根両遺跡　87. 尖石遺跡　89. 新水掛A遺跡　203. 朝倉城跡遺跡
204. 葛澄沢A遺跡　205. 葛澄沢B遺跡　206. 竜神平下遺跡　207. 新水林B遺跡　233. 矢倉田遺跡　234. 山ノ神沢遺跡
235. 北山葛蒲沢A遺跡　236. 広井出遺跡　241. 牛ノ児遺跡　255. 上ノ橋遺跡　315. 中尾遺跡

第2図　中ッ原遺跡の位置

第3図　中ッ原遺跡遺構分布図（1/1,000）

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要

第１節　調査区の基本的層序

１．土層の基本的な堆積状況

基本層序の概要　　本遺跡の立地している尾根状台地は、北八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫、火砕流を基盤とし、この上にロームが堆積する。これに有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成している。

調査区全体は畑地造成により、地形が改変されており、特に台地南側斜面部は近代の水田開削時に削り取られて、台地頂部から台地斜面部にかけて土層の堆積状況を調べられる箇所はない。土層観察は調査区の最も土層堆積の深い部分である西側壁で、ちょうど台地南側縁辺から入り込む谷部周部分の土層状態を観察している。発掘調査で縄文中期と後期の遺物が検出されているが、生活面の分層には至ってはいない。

Ⅰ層　耕作土　　色調は黒褐色（10YR2/2）を呈する。粘性の少ない、制合ソフトな土質で、全体的にややポロつく。内部にビニール片や１㎜大の炭化物粒子を１％含有する。現在耕作されている畑の耕土で地表に畝痕が観察される。

Ⅱ層　黒色土　　調査区の頂部には薄く、南側斜面に至るにつれ厚く堆積している土層で、粘性度は高く、締まりを有している。色調は黒色（10YR1.7/1）を呈する。

Ⅲ層　黒褐色土　　調査区の頂部の一部に薄く堆積していた土層で、締まりがよく制合硬質で、内部に縄文土器を若干含む。色調は暗褐色（10YR3/3）を呈する。

Ⅳ層　暗褐色土　　調査区全体に制合厚く堆積する土層で、色調は暗褐色（10YR3/3）を呈し、締まりはよく硬質で１～２㎜大の炭化物を２％、土器片を含有する。本層中より遺構が掘り込まれているものと考えられる。

Ⅴ層　褐色土　　色調は褐色（10YR4/4）を呈する。１～２㎜大のローム粒子を２％含有している。遺構の確認はこの層上面よりなされる。

２．土層の成因と性格について

土層の状態　　土層をⅠ層からⅤ層の５群に分類した。Ⅰ層は現在の畑地耕作に関わる土層群である。Ⅱ層内は農耕機械等による攪乱を受けている状況が観察される。Ⅲ層はプライマリーな土層で、調査区の一部の範囲に認められた。Ⅳ層が遺物の包含層にあたり、遺物が混在する形で認められた。Ⅴ層より遺構の覆土と掘り方の判別が可能となる。覆土とは色調に差があるために、Ⅴ層よりの掘り込みが明瞭となったものと考えられるが、本来はⅣ層が生活面となりこの層より遺構の掘り込みがなされたと考えられる。遺構内の覆土は基本的にはⅣ層に類似する土層である。なお、ローム層を部分的に掘り下げたが、旧石器時代の遺物の包含は確認されなかった。　　（守矢昌文）

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　旧石器時代の遺物

１．検出された旧石器時代の遺物

石器出土状態の概要　　旧石器時代に帰属する、黒耀石製の槍先形尖頭器の先端が１点表採されている。表採のために出土層位等は不明であるが、ローム層内への試掘に於いては旧石器時代の遺物の包含層を認めることはできなかった。検出の状況等から考えると、遺物ブロックを形成せず散発的に遺物が検出されるものと考えられる。

遺跡の特徴　　市域八ヶ岳西南麓に於ける旧石器時代の遺物が検出されている遺跡は、位置や地形的立地より渋川遺跡・十文字平遺跡・城ノ平遺跡（北八ヶ岳山腹遺跡群）、八ヶ岳農場遺跡・御猪岩遺跡（南八ヶ岳山腹遺跡群）、夕立遺跡・上見遺跡・稗田頭Ａ遺跡・稗田頭Ｂ遺跡・馬捨場遺跡（槻木遺跡群）、北山菖蒲沢Ｂ遺跡・広井出遺跡・北尾根遺跡（芹ヶ沢遺跡群）、古田城址・広畑遺跡（古田遺跡群）、林ノ峰遺跡・長峰遺跡・上御前遺跡（玉川遺跡群）の６群18遺跡に分けることが可能であるが、今回確認された中ッ原遺跡は、芹ヶ沢遺跡群の末端に該当しよう。遺物の検出状況が散発的な点からも、段丘面上に位置するこれらの遺跡群と同等な遺跡であると考えられる。

遺物の特徴　　割合透明感のある黒耀石を素材としている。全体の約1/2を欠損し先端部だけが遺存しているために、全体形を詳細に窺い知ることはできないが、木葉型を呈する槍先形尖頭器が想定できる。離面に主要剥離面を残す剥片を素材とし、調整剥離が主要剥離面全体に至ってはおらず、そのために断面形が凸レンズ状を呈する。表面の調整は丹念で押圧剥離がされる。先端部にはファシット剥離がされ、所謂有樋尖頭器の形状を呈する。

２．旧石器時代の中ッ原遺跡

石器出土状態からみた遺跡の特徴　　中ッ原遺跡から得られた槍先形尖頭器と類似する資料の得られている遺跡は、八ヶ岳西南麓だけに限定せず、池ノ平遺跡群、霧ヶ峰南麓遺跡群を含めると、渋川遺跡・夕立遺跡・馬捨場遺跡・広井出遺跡・南岸遺跡・御小屋之久保遺跡・駒形遺跡・一ノ瀬遺跡があるが、出土量よりみると八ヶ岳山腹遺跡群・池ノ平遺跡群の出土量に多出傾向が認められ、八ヶ岳西南麓段丘状の遺跡においては、散発的に出土する例が多いようで、本遺跡もこの傾向と共通している。このような内容の希薄な遺跡は、八ヶ岳西南麓段丘状遺跡の特徴として取り上げることができ、遺跡の性格に結びつくものであろう。

旧来八ヶ岳西南麓に於ける旧石器時代の遺跡の展開が希薄な点について、八ヶ岳西南麓の洪積世台地の環境条件が不安定であった点とする考え方や、当時の狩猟方法と黒耀石原産地に対する執着が遺跡分布に反映したものとの考え方、八ヶ岳西南麓の段丘形成との関連を捉えた考え方がある。立地条件も大きな要因の一つであるが、遺物量・内容より考えると遺跡の内包している性格的な面が遺跡立地に現れていると考えられ、それらを考慮すると小規模な生活址的な遺跡は、八ヶ岳西南麓の段丘面に点在する傾向を指摘でき、本遺跡のあり方もこの…連として捉えることができよう。　　（守矢昌文）

第２節　検出された縄文時代の遺構と遺物の概要

１．検出された縄文時代の遺構

断続や時期により遺構数の過多はあるものの、今回の調査により縄文時代中期から後期に亘る遺構が検出されている。平成４年度調査（第Ⅰ次）に於いては前期初頭の住居址が検出されているが、今回は遺物のみが出土している。

遺構の分布について　　遺跡は南北側を浅い谷に挟まれた所謂長峰状の制台細い尾根状台地に位置し、この制約された狭い範囲に集落が形成されている。そのため遺構は台地の東西方向に広がり、その分布域は長い帯状を呈する。

遺構は台地内に入り組む小規模な谷状地形を隔てて大きく二群構成となり、西側台地先端グループと東側台地中央グループに分けられる。地形の関係より東側台地中央グループの方が規模の大きな展開となり、遺構の把握できた範囲の状況より推定すると東西方向に長い不整形の環状集落を想定できる。なお、南側台地先端グループは台地の先端が若干撥状に広がる関係より、この地形に沿った小規模な環状集落となる。

検出された遺構の概要　　詳細な整理検討がされていないために実数については不確定な部分があるが、今回の調査により竪穴住居址、方形柱穴列、土坑、配石、独立土器が検出されている。この内で中心をなすものは、中期と後期のものである。

特筆すべき遺構は後期前半の住居址と鉢被葬の行われている墓壙、「仮面土偶」が出土した土坑を挙げることができる。また、調査時には明確に把握されなかったが、図面整理時に明確となった巨大長方形配列の柱穴列等さまざまな遺構が構築されている。

２．縄文時代前期の遺構・遺物の概要

検出された遺構の概要　　前期初頭の土器約1/2が中期住居址覆土より検出されている。平成４年度の調査に於いても同時期の竪穴住居址が１軒検出されており、住居址が散在していたものと考えられる。

検出された遺物の概要　　前期初頭の遺物量は少なく、断片的に含繊維縄文施文土器片が若干出土している。第Ⅳ次第78号住居址覆土内から口縁部が肥厚しやや有段となる含繊維縄文施文土器が１点出土し唯一復原されている。

３．縄文時代中期の遺構・遺物の概要

検出された遺構の概要　　中期に帰属する竪穴住居址は113を数え、検出された竪穴住居址全体の約80%を占め主体となる。出土土器からその幅を探ると、中期初頭から途中若干の断続はあるものの中期後半曽利Ⅴ式期までのものが認められ、ほぼ中期全体に亘って住居址が存続していたことがわかる。

中期の住居址の展開は、前期初頭よりの伝統的な東側台地中央グループを中心に、新たに台地先端部にも展開する。東側台地中央グループは尾根状台地の長軸に沿った形で、連環状に住居址群が展開し、台地の最も幅の広い地形を活かし、この範囲に相対するような形で環状に住居址群が展開し、住居址群に囲まれた中央部に土坑群が展開する広場を作り出す。

中期の中でも小期に亘り地点的な動きを有しているようで、中期前半集落の様相と中期後半とには異なる様相が認められるが、伝統的な場である最も広い幅を有する台地中央部が中心となり、この範囲が本遺跡の中心的な核となっている点には変化は見られない。

西側台地先端部と東側台地中央部は、台地の長軸に直行する形で入り組む浅い侵食谷を隔てて対峙する関係にある。中期前半では東側台地中央部に住居址が展開するのに対して、中期後半になると西側台地先端部と東側台地中央部の両者に居住地域の分割がなされる。中期前半では中心的であった東側台地中央部中心から、西側台地先端部へ一部が拡散する傾向が認められるが、その動きは1軒の竪穴住居址の出現にとどまり、中期後半に於いて永続的にこの地域が利用されていたものではない。

集落中央部に展開する土坑群は、東側台地中央部において住居址に囲まれた中央部に展開している。これに対して西側台地先端部においては、このような傾向が認められず中央広場を持たない集落構成である。

北東側谷部を臨む斜面範囲のかなり広範囲の部分より遺物の分布が認められ、台地上は集落域、北東谷部斜面部は遺物の廃棄の場と想定することができよう。なお、廃棄されている遺物は中期前半から中期後半の遺物が混在する傾向を示す。

遺構内の遺物を詳細に検討していないために、遺構間の動き等詳細な部分を述べることはできないが、大雑把に変遷を探ると次のようになる。

今回の調査では中期初頭、中期前半狢沢式期、新道式期、藤内Ⅰ式期、藤内Ⅱ式期、井戸尻Ⅰ式期、井戸尻Ⅱ式期、中期後半曽利Ⅰ式期、曽利Ⅱ式期、曽利Ⅲ式期、曽利Ⅳ式期、曽利Ⅴ式期の竪穴住居址が検出されているが、これらの分布を概観すると、中期前半狢沢式期のものが東側台地中央部に中央広場を有するように集落が作られた後、この形を新道式期、藤内式期、井戸尻式期が踏襲する。中期後半曽利Ⅰ式期には新たなる集落展開が行われ、東側台地中央部に展開する大きな環が形成されるようになり、曽利Ⅲ式期に入ると新たに西側台地先端部に住居址が展開し、その後も小規模であるが継続する傾向が認められる。

検出された住居址の概要　中期の住居址について、特段本遺跡に限られた傾向は認められないが、住居址を概観すると次のような傾向を指摘できる。中期前半では主柱穴配列が6～7本柱となるものが多く、住居中央部に埋甕炉若しくは小型の石囲炉が構築される。石囲いの仕方は扁平な河床礫を立てるような形で掘え、希に第Ⅲ次第22号住居址のように半割された石皿を転用している例もある。炉石は全周を囲わず、焚き口部だけ平坦に掘えるものが認められる。また、住居内に袋状土坑を設けているものも認められる。また、第Ⅲ次第22号住居址の入り口部と思われる南西側壁際に石柱状の安山岩が倒置した状態で遺存し、類例は梨ノ木遺跡等でも確認され中期前半の屋内に於ける石柱として捉えることができようか。

中期後半の住居址は後半初期と、後半終期とでは大きな差異を認めることができる。住居址の平面プランでは曽利Ⅰ・Ⅱ式期では円形や楕円形を基調とするのに対し、曽利Ⅲ式期以降になると方形基調へと変化する。主柱穴は曽利Ⅰ・Ⅱ式期では6本柱を基本とし、それ以降になると5本・6本柱に変化してくる。特異な例としては、第Ⅲ次第13号住居址は3本柱構造で、このような構造は希に見ることができる。炉址は住居中央部よりやや奥まった位置に構築され、曽利Ⅰ・Ⅱ式期では扁平な河床礫を炊き口と思われる部分は平坦に、その他は内側に向くようにやや斜状に石を据えて、平面観が花弁型を呈するように構築するのに対して、曽利Ⅲ式期以降では平面観が方形で石囲い用の礫が巨大化し、切り炬縫状を呈する。特異な例として、第Ⅲ次第13号住居址のように炉址脇隅に小型の方形プラン状の石囲いが付帯するものがある。また、第Ⅲ次第51号住居址炉址脇には有頭石棒が起立する。同様な類例は棚畑遺跡[文献12]・長峯遺跡等[文献13]で検出され、中期後半の炉址に関わる祭式の一環として興味深い。石棒ではないものの柱状安山岩の角に敲打調整を加え、炉址焚き口に枕状に据えるものが第Ⅲ次第7号・29号住居址に認められた。同様な類例は高部遺跡などに認められ、状況は石棒起立の炉址とは異なるものの、自然柱状の安山岩に若干の敲打調整を加え棒状に調整する技法は、無頭石棒の製作法に類似し、このようなものは炉石の形状調整だけの意味合いだけではなく、炉址と石棒の関

係を考えるべき資料であろうか。中期後半住居址で堰裏の認められた住居址は、検出例は多くはなく特徴として挙げることができようか。

検出された遺物の概要　　中期の遺物は土器を中心にかなりの量が得られている。特に中期前半では、住居址覆土内にほぼ完形土器が廃棄されている例が1箇所認められた。一般的には2～6個体程度が炉址周辺に遺存するものや、大型破片を中心に遺存するもの、第Ⅲ次第22号住居址のように約99個体以上の土器が炉址を中心とした範囲に廃棄されるもの等が認められる。また、第Ⅱ次第7号・第Ⅲ次第32号・40号住居址では、覆土上層に住居址より後の中期後半の土器片が廃棄され、土層観察から住居址埋没途上の窪地に、中期後半に再度遺物が廃棄されたものと捉えられる。

上器では中期前半・後半の資料が得られているが、第Ⅲ次22号住居址に一括廃棄されていた土器群は中期前半井戸尻Ⅰ式期の良好な資料である。第Ⅲ次第38号住居址床面直上から出土した阿玉台1b式期の完形個体は注目でき、同様な資料は長峯遺跡で出土しているだけで、交易等に関わる資料として重要なものである。

石器で特徴的なものは少ないが、中期前半・後半を通じて朝倉山産輝緑岩製剥片を用いた剥片石器や礫器が認められ、特徴的である。同様な素材が石器として用いられている遺跡は、高風呂遺跡・上ノ平遺跡・一ノ瀬遺跡・大田苅遺跡等に認められ、朝倉山周辺の小範囲で石材として用いられる特徴的なものである。また、板状安山岩礫の端部に簡単な調整剥離を加えただけの礫器も若干数検出され、簡単な構造の石器も主要な位置を占めていたと考えられる。

土製品では土偶6・土製円盤・土鈴？が得られている。中期後半土偶の接合で興味深い接合例がある。第Ⅰ次第11号住居址覆土出土の土偶胴部破片と第Ⅲ次第16号住居址覆土出土の胴部破片が接合している。直線距離にして約30mと距離があり、土偶の分割と廃棄と集落内での動きに興味深い。

4．縄文時代中期の代表的な遺構

A．竪穴住居址

第Ⅲ次 第38号住居址（第4図、図版18）

位置：　本址は調査区の東側台地中央群北側斜面で確認された。住居址は台地の北側斜面部に占地し、北東側に第Ⅲ次第31号住居址が隣接する。

平面プラン：　住居址の上面は耕作による削平が及んで、また、北側斜面に傾斜するために北側壁が低く不明瞭な部分もあったが、壁が全周する形で検出されたため全容を把握することができた。それによると東西方向に長軸をもつ南北方向につぶれる不整長楕円プランを呈し、南北方向4.04m、東西方向4.65mの規模を呈する。

長軸方向：　住居址長軸は東西方向にあり、方向はN－86°－Eを示す。

内部構造（柱穴・掘り方等）：　最も明瞭に確認された南壁側はしっかりした直に近い立ち上がりを持ち、床面境に斜孔状の小孔を持つ周溝が全周する形で巡る。配列や深さより主柱穴と思われるP1、P2、P3、P4の4本が検出されている。柱穴の掘り方はしっかりしており径は45cm前後と25cm前後と二つのタイプがある。主柱穴の深さはP1 67cm、P2 48cm、P3 82cm、P4 49cmで平均すると約61.5cmである。住居址内南側に上面直径50cm、断面形が巾着型を呈する土坑が構築されている。床面は炉址中央部を中心とした外帯が小さな凹凸を持ち硬化し、炉址に向かって若干傾斜する

炉址：　主柱穴に囲まれた範囲住居中央部に埋甕炉が構築される。平井3A系深鉢胴部を正位に埋設し、外縁部床が焼土化する。埋甕炉内埋土には締まりがよく4㎜大のローム粒子を2％、4～5㎜大の焼土粒子を

5％含む暗褐色土が堆積していた。

遺物出土状況： 炉址南側床面上に阿玉台1b式期深鉢が横倒した状態で検出されている。復原できた土器は2点でその他の土器片は住居址覆土中央部範囲に礫と一緒に廃棄されたような状態で出土している。

遺物の概要： **土器**（図版59）⑧は埋甕炉に用いられた深鉢胴部上半である。器壁は中薄手で平井3A系の要素を有する半裁竹管状工具による平行沈線が施文される。口縁部破片は覆土中の資料が接合している。⑦は炉址南側床上に横倒していた土器である。底部を欠くもののほぼ完形に近い形で、大きな4単位の扇状突起が口縁部に付き、口縁部には隆帯により区画がなされ、区画内には鋸歯状構成の結節沈線が施文される。胴部には蛇行隆帯が施文される。この他に東側周溝寄りに双口土器注口部が出土している。本址は検出された土器片や埋甕炉より中期前半新道式期に帰属しよう。

第Ⅲ次 第22号住居址（第4～6図、図版16）

位置： 本址は調査区の東側台地中央群北側斜面グリッドで確認された。住居址は台地の北側斜面部に占地している。

重複： 南東側に第Ⅲ次第16号住居址が重複し、現象的には本址が第Ⅲ次第16号住居址を切る形を呈していたが、覆土上に貼り床等は検出されなかったものの出土遺物・住居址構造より本址の方が古いことが確認できた。

平面プラン： 斜面部に構築されているために北側壁が低くやや不明瞭であるが、他の部分は明瞭で全体の様相を把握することができ、南北方向に長軸を持つ長楕円形プランであり、その規模は南北方向6m、東西方向5.16mを測る。

長軸方向： P_1、P_3を入り口部に関わるピットとし、これと炉址を通す線を主軸とすると、南北方向に長いプランの住居が想定できる。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 北側壁はやや不鮮明であるが、明確な掘り方を持つ南、西、東壁を概観すると、掘り方は舟状なものの断面形は外反し、床際はやや丸みを帯びる。配列や深さより主柱穴と思われるP_4、P_5、P_8、P_9、P_{10}、P_{12}6本が該当し、6本柱構造を想定できる。南側に位置するP_1、P_3が入り口に関わるものと考えられ、この両者とも2回以上に亘る建て替えが認められ、P_5の西側柱穴は2㎜大の砂利と混ったロームにより埋め戻されていた。柱穴の掘り方はしっかりしており径は40cm前後である。主柱穴の深さはP_4 43cm、P_5 54cm、P_8 40cm、P_9 53cm、P_{10} 78cm、P_{12} 106cmで平均すると約62cmである。床面は中央を中心に硬化し、壁際から炉址に向かって緩やかな傾斜を持つ。

炉址： 主柱穴に囲まれた範囲住居中央部に石囲い炉が構築される。炉石はつぶれた卵状の形状を呈する安山岩の扁平面を斜状に炉掘り方に立てるように並べ、一部に石皿の破片を再利用している割合小形の炉で、炉内埋土には1～2㎜大の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積していた。

遺物出土状況： 炉址を中心とする住居址中央部に多量の中期前半土器が所謂炉上パターンの状態で廃棄されていた。本址は今回の調査された住居址内で最も多量の土器を出土し、復原し得たものだけで25個体、これに個体識別し得たもの74個体を加えると、99個体以上の土器が廃棄されていたことになる。覆土上層内検出の土器片は、住居址が北側斜面に構築されていた関係より、地形傾斜に沿った形で検出されたが、これらの土器片とやや分離し、炉址周辺では床面直上に土器廃棄ブロックが3ブロック捉えられた。このブロック内には胴下半を欠損し逆位で遺存する土器や、同一方向に横倒する土器が観察できた点などから、住居址内に土器をブロック単位に並べて遺棄したものと捉えられる。

遺物の概要： **土器**（第5・6図1～25）図示し得た土器は25点である。1～14は口縁部が無文となり内湾

する口縁部、屈曲し張り出す底部、16～19・23・24は口縁部が大きく開く深鉢、20～22は口縁部が内湾し胴部でくびれ下半部で膨らむキャリパー形深鉢、口縁部が内折する浅鉢の器形が認められる。文様は1～8は半隆起線による区画文を主文様とし、区画内を三叉文、渦巻き文、平行沈線文を充填する。10～17は胴部に縦位方向縄文や撚り糸文が施文され、口縁部に蛇体把手（11～14）やミミズク状把手（10）が貼付。変形隆帯区画（10）横位隆帯区画（15）が付加されるものもある。18・19は刻みのされる変形隆帯区画文で、区画内は平行沈線、渦巻き文、三叉文が充填される。20～22は口縁部文様帯と胴部下半文様帯に分離され、口縁部には隆帯による区画、胴部下半部には所謂クシ状文が施文される。24・25は焼町土器の範疇に捉えられ、低隆帯区画と区画内に棒状工具による沈線を充填する。図示はされてはいないが、密接く字状連続刺突施文が施され、色調がにぶい黄褐色を呈し器厚が6㎜前後で長石粒子を混入する特徴的な土器が混在している。器形は口縁部が内折し胴部で大きくくびれ下半部で膨らむキャリパー形深鉢で、4単位の波状口縁となる。胴部下半にはクシ状文の区画内に密接く字状連続刺突文が充填される。施文・器形・胎土等より北屋敷式に比定されようが、連続刺突に用いられている工具の先端が丸みを帯び、施文があまり密接施文とならない一群もあり新たな群を形成するものと考えられる。本址は検出された土器より中期前半井戸尻Ⅰ式期に帰属しよう。

第Ⅲ次 第13号住居址（第4図、図版14）

位置： 本址は調査区の東側台地中央群北側斜面で確認された。住居址は台地の中央部よりやや北側に寄った位置に占地している。

重複： 南東側に第Ⅲ次第18号住居址が重複し、現象的には本址が第Ⅲ次第18号住居址を切る形を呈する。また、第4号から第7号土坑が重複するが、土坑上に貼り床等は確認されてはいない。

平面プラン： 上面を耕作により削平されているために壁が低くやや不明瞭であるが、壁が全周する形で把握されたために全体の様相を把握することができ、それによるとやや南北方向につぶれる不整隅丸方形プランが想定され、その規模は東西方向3.78m、南北方向4.11mの割合小形の住居址である。

長軸方向： 炉址の位置や柱穴の配置、P_1、P_2間を入り口部に想定すると、南辺これと炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－28°－Wを示し、入口部を南東方向に想定できる。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 上面が削平を受け壁の高さは不明な部分があるが、遺存している部分より推定すると、掘り方は丹念なもので直に立ち上がるか。北壁下より周溝が半周し、これに繋がるよう南側に小孔が検出される。配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_2、P_3の3本が検出され、当初主柱穴が1本未検出の可能性も考えたが、精査の結果3本主柱穴構造であることが判明した。同様な3本柱主柱穴構造の竪穴住居址は市域において立石遺跡、稗田頭A遺跡、塩ノ目尻遺跡の中期後半曽利Ⅲ式期から曽利Ⅳ式期の住居址に認められる。柱穴の掘り方はしっかりしているが、径は38cm前後と割合小形である。主柱穴の深さはP_1 38cm、P_2 71cm、P_3 38cmで平均すると約49cmである。床面は中央を中心に小さな凹凸を持ち硬化する。

炉址： 主柱穴に囲まれた範囲住居中央部よりやや北側に寄った位置に石囲い炉が構築される。炉址は78cm四方の方形石囲い炉で、住居址の規模に比較して炉址の規模は割合大形である。炉石は4辺共に板状の安山岩を用いている。焚き口と思われる南縁には柱状の安山岩が据えられ、その両脇に扁平礫を敷くように、他辺は斜状に立てられ前体形は方形切り炬燵状の石囲い炉である。炉内埋土には黒褐色土が堆積していた。また、炉址北東側隅に16cm四方の小形石囲いが併設されていた。石囲いには朝倉山産出の輝緑岩の板状素材を立てるように用いていた。炉址内には焼土の堆積も認められず、炉石にも被熱痕を認めることはできなかった。このようなやや変則型の複式炉とでも言えそうであるが、被熱痕跡・焼土が認められないこと等より取り敢えず炉に伴う小形石囲いと捉えておきたい。

遺物出土状況： 本址からの遺物は少量で、覆土中より若干の土器片が出土しているだけである。本址は検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅱ式期新段階に帰属しよう。

B．土　坑

第Ⅱ次 第614号土坑（第12図、図版48）

位置： 本址は調査区の東側台地中央部より西側に寄った位置に確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、東側に第605A・B号土坑が重複する。

重複： 土層観察の結果東側に重複関係を持つ第605A・B号土坑は、覆土を第614号土坑が切っていることが判明した。

平面プラン： 平面プランは東側を他の土坑と重複しているために不明な部分もあるが、長軸方向が東西方向N－74°－Wを向く短軸1.04mの長楕円形を想定できる。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりし、壁は垂直に近い形で立ち上がり、深さは確認面より40.3cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪む傾向が認められるが、全体的には平坦で堅緻である。

土層の状況：土坑の覆土は2層に分層でき、土層にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積し、その状況より人為的に埋め戻していると捉えられる。また、坑底に近い部分には鈍い黄褐色土が堆積する。

遺物出土状況： ヒスイ製垂飾は坑底中央部よりやや東側に寄った位置の坑底上から出土している。このヒスイ製垂飾西側に供伴するように滑石製垂飾が検出されている。時期を特定できる資料は得られてはいないが、検出されたヒスイ製垂飾や土坑の重複関係、構築位置よりみて中期に帰属するものと考えたい。

遺物の概要：　ヒスイ製垂飾（第12図1）　長さ9.86cm、幅2.68cm、重量69g、断面形が不整形の部分的に稜を有する不整形な蟹節型を呈する。全体面に研磨は至ってはおらず、加工途中の剥離痕を残す。端部に寄った位置に孔径0.71cmの孔がほぼ直に穿たれ貫通する。

滑石製垂飾（第12図2）　長さ2.16cm、幅0.97cm、重量1.8g、断面形が角の丸い長方形で、平面観が隅丸長方形を呈する。全体面に研磨が行われ、角の丸い直方体を呈する。端部に寄った位置に孔径0.5cmの孔がほぼ直に穿たれ貫通する。

第Ⅱ次 第660号土坑（第12図、図版47）

位置： 本址は調査区の東側台地中央部より西側に寄った位置に確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、東側に第595号土坑、南東側に第572号土坑が切り、本址の残存部は全体の約1/3程度である。ヒスイ製垂飾を出土した第614号土坑から約2mと近接する位置に構築されている。

重複： 上層観察の結果南東側に重複関係を持つ第572号土坑が覆土を切っていることが判明した。なお、第572号土坑坑底中央部より中期終末Ⅴ式期深鉢片が出土していることより、本址はこれよりも古いものと捉えられる。

平面プラン： 平面プランは重複関係が著しく、平面プランの全容を把握し得てはいない。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりしており、検出された西壁は直線的に外反し立ち上がり、深さは確認面より32.9cmを測り、坑底は平坦で堅緻である。

土層の状況：土坑の覆土はローム粒子を多量に含む締まりの良い黄褐色土が堆積し、その状況より人為的に埋め戻しているものと捉えられる。

遺物出土状況： コハク製垂飾は坑底中央部よりやや西側に寄った位置の坑底直上から出土している。時期を特定できる資料は得られてはいないが、検出されたコハク製垂飾や土坑の重複関係、構築位置よりみて中期に帰属するものと考えたい。

遺物の概要： コハク製垂飾（第12図３） 長さ5.67cm、幅3.56cm、断面形が倒卵型を呈し、平面観は不整形な卵型を呈する。全面に研磨は至っており、加工途中の剥離痕を残してはいない。側面中央部よりやや端部に寄った位置に孔径0.95cmの孔がほぼ直に穿たれ貫通する。

5．縄文時代後期の遺構・遺物の概要

検出された後期の遺構の概要 後期の遺構は、住居址が検出されている。住居址は台地中央と西側台地先端範囲に集中する。出土土器より後期前半のものが中心となるが、若干ながら後期初頭の遺構も散見でき、出土遺物から称名寺式期、堀之内１式期、堀之内２式期が確認されている。また、後期前半の同型式期内でも重複している住居址が認められることより、ある程度の時間幅を考えることができる。

住居址は、台地中央部と西側台地先端部に展開し、西側台地先端部範囲、台地中央部には、称名寺式期から堀之内２式期までが継続して認められる。住居址の分布は、台地中央部では台地南側斜面を中心に弧状に展開するのに対して、西側台地先端部に於いては北東側の一部が不明なものの、ほぼ台地縁辺に沿うように住居址が展開し、これに囲まれた範囲は遺構の希薄な範囲となる環状を呈する。

住居址の他にこの時期を特徴付ける遺構として、方形柱穴列や鉢被せの行われた土坑や、ヒスイ製垂飾を出土した土坑を挙げることができる。これらは台地中央部の平坦面から、住居址群が展開する斜面を中心に検出されている。特に台地中央部では中期の遺構と重複しその様相は煩雑である。西側台地先端部に於いて、方形柱穴列は住居址と重複するゾーンに構築されている。時期の確定はなされていないが、小型ヒスイ製垂飾が２個出土した長楕円の土坑は、この土坑と並列する一群の土坑と併せて後期のものとすると、集落構造上興味深いものがある。

検出された後期前半の住居址の概要 後期前半の住居址は大きく敷石住居址と、竪穴住居址、柱穴が円形に配されたものに分けられる。これらは出土遺物から後期前半堀之内１・２式期に帰属すると考えられが、少量ながら第Ⅳ次第59号住居址覆土内より加曽利ＢⅠ式期の土器片が出土しており、該期まで木遺跡が存続していたことが判明した。

敷石住居址は第Ⅲ次第56号住居址である。第Ⅲ次第57号住居址に南側を切り込まれているために、遺構の全容を把握することはできず、北側奥壁部の敷石部を検出したに過ぎない。敷石部分は入り口部と思われる範囲から約2/3程度が切り込まれているために、奥壁周辺が認められただけである。中心範囲には板状施理の安山岩（所謂平石）を平坦に敷き詰めているが、外周縁は小形の安山岩等円礫が敷石外縁を縁取るように配されている。床面全体への敷石ではないが、第Ⅲ次59号・第Ⅳ次90号住居址のように壁際に安山岩が長手積みに外護状に巡るものがある。特に第Ⅳ次第90号住居址は、壁内側に一列巡る石列が検出されている。約40cm大の扁平面を持つ安山岩河原礫を、長手積みに遺存しているだけで２段積み上げている。また、第Ⅳ次104号住居址のように小型礫が壁際よりやや内帯に入った位置に巡るように配されているものもある。なお、壁際に礫が外護状となる住居址は市域に於いて聖石遺跡等で検出され、小型礫が巡るものも一ノ瀬遺跡で確認され、後期の特徴的な住居構造として取り扱うことができよう。

竪穴構造となる住居址は第Ⅲ次第44号・第Ⅳ次第90号・104号・107号住居址等で、入り口部は遺存していないものが中心となるが、全容を把握し得た第Ⅲ次第44号住居址の例より推測すると、不整円形の平面プランを呈し主柱穴配列は壁際に沿って巡る構成を採り、この柱穴配列は後述する主柱穴が円形に巡るものと類似する。炉址は炉内に土器が埋設された小型の方形石囲い炉や、地床炉で住居のほぼ中央部または、中央部より若干寄った位置に設けられる。

掘り方等が検出されず、主柱穴配列だけが検出されたものがある。炉址が検出されなかったものについては、調査当初柱穴の集中と捉え、住居址とはカウントしなかったが、同様な主柱穴配置で埋甕炉を有する第Ⅱ次15号住居址が検出されたことより、図面整理の段階で本タイプも上面が削平された住居址と捉えた。主柱穴配列は円形を基調とし入り口部と思われる部分に、他の柱穴より大振りで深い柱穴が対状に配されている点に特徴を持つ。同様な構造のものは市域において立石遺跡・神田頭A遺跡・一ノ瀬遺跡・阿弥陀堂遺跡・鴨田遺跡・新井下遺跡等で検出され、特徴的なタイプの住居址として捉えることができる。

検出された方形柱穴列の概要　今回の調査により14基に亘る方形柱穴列が検出されている。これらは調査時に検出されたものは少数で、図面整理時にその存在が明確になったものが多い。柱穴の組合せについては、深さや配列、柱穴内に柱痕が認められたもの等の状況を勘案し、柱穴同志の組合せを考えた。遺構内遺物から明確な時期を把握できたものは少なくそのほとんどは時期の不明確のものである。また、方形柱穴列間で重複関係を有しているものもあるために、ある程度の時間幅の中で方形柱穴列が作られたものと考えられる。方形柱穴列の分布は台地中央部と西側台地先端部に位置する。これらの方形柱穴列は、土坑群を囲む範囲の外縁から土坑群と重複する形で分布している。

検出された土坑の概要　Ⅱ次からⅣ次調査にかけて番号が付されている土坑が1,800基以上ある。これらは遺物等が出土した坑を中心に番号が付されたためだが、実際掘り窪められた坑は相当数にのぼる。また、土坑と取り扱った坑の中には、住居址の柱穴等が含まれている。土坑は深さ・平面形態・掘り方等様々なものが含まれているが、特筆すべき一群として鉢被葬の行われる土坑や、平面プランが長楕円で人為的歪め戻しや副葬品と思われるヒスイ製垂飾を出土する土坑が認められる。これらは集落内の一定の位置に群をなす傾向を看取ることができる。また、鉢被せや副葬品と思われるヒスイ製垂飾を出土する土坑は、概して平面プランが長楕円形を呈し、覆土はロームブロックを混入する人為的な堆積状況を示し、分布も一定の範囲に偏向する傾向が窺え、第Ⅱ次第206号・207号、第Ⅲ次第70号・59号・94号、第163号・150号・177号土坑のように一定の範囲に主軸を揃えるような形を採ることから、土坑の占地や構築には一定の規範があったものと推察できる。また、出土遺物から注目すると、第Ⅲ次第70号土坑からの「仮面土偶」の出土には多くの問題を内在している。

検出された遺物の概要　縄文時代後期の遺物は土器を中心に後期初頭から後期中葉初段階までの資料が得られている。中期のように住居址覆土内に一括廃棄されたような例は見られず、覆土内に土器片が散在する形であった。一括性の高いものは住居内埋甕炉用土器、土坑埋設土器が認められた。また、土坑内の鉢被せに用いられた浅鉢等に良好な堀之内２式期のものが検出されている。

後期に帰属する土製品では「仮面土偶」１が得られている。石製品では後期に帰属すると思われる土坑から、小型のヒスイ製垂飾が１対出土し、興味深い資料である。

６．縄文時代後期の代表的な遺構

Ａ．竪穴住居址

第Ⅱ次 第15号住居址（第７図、図版５）

位置：　本址は調査区の東側台地中央部より西側に寄った位置で確認された。住居址は台地の南側斜面部に占地し、西側に第１号円形柱穴列が隣接する。

重複：　南西側に第89号土坑、南東側に第91号土坑と重複し、土坑上に貼り床等がなされていないことより、これらの土坑が本址を切るものと考えられる。

平面プラン： 全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。

長軸方向： 入り口部と思われる近接し並列するP_1-P_2間と炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向はN−27°−Eを示す。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。配列や深さより主柱穴と思われるP_1～P_{13}の13本が検出され、これらの柱穴が巡る形で配される。柱穴の掘り方はしっかりしており入口部と考えられる第698号・第700号土坑は径90cm前後と他の柱穴より大形であるが、他は40cm前後のものである。主柱穴の深さは入口部の第698号・第700号土坑が80cm前後と深いのに対して他の柱穴は平均すると約55cmであり、上面は削平されているため浅くなっている可能性が高い。床面全体は耕作による削平を受けており、硬化した面などは検出されなかった。

炉址： 主柱穴に囲まれた範囲中央部に加熱を受け硬化し、やや赤変しているローム面が検出された。この部分が炉址であると思われ、この中央部に堀之内１式深鉢下半部が埋設されていた。

遺物出土状況： 遺物は埋甕炉に用いられていた土器だけであり、本址は主柱穴配列や検出された埋甕炉よりみて後期前半堀之内１式期に帰属しよう。

第Ⅲ次 第44号住居址（第７・９図）

位置： 本址は調査区の東側台地中央部より西側に寄った位置で確認された。住居址は台地の頂部から南側に向かい傾斜する斜面部肩に占地する。

平面プラン： 竪穴構造を有しているため全体の平面プランを把握することができた。それによると、南北方向に長い不整形な楕円形を呈し、その規模は長軸方向の南北3.84m、短軸方向の東西3.37mを測る。

主軸方向： 壁的に入り口部と思われる近接し並列する柱穴等は検出されてはいないが、位置的関係よりP_1-P_2間の中点と炉址、P_6を通す線を主軸とすると、主軸方向はN−26°−Wを示す。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 住居址の掘り方は南側に傾斜する地形の関係から、南側が低くやや不明瞭な部分もあったが、全周で検出できた。壁の立ち上がりは硬質な台地基盤層を掘り込んでいるため、傾斜はやや緩く外傾し床際はやや丸みをおび立ち上がり、南側は地形の関係より流出しているのか立ち上がりは不明瞭で、床際の立ち上がりは浅い皿状で判然としない。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1～P_{10}の10本が検出され、これらの柱穴が巡る形で配されその様相は第Ⅱ次第15号住居址の柱穴配列を彷彿させる。柱穴の掘り方は台地基盤層の火砕流層まで掘り込んでしっかりし、径は30cm前後である。主柱穴の深さは30cm～50cm前後である。床面は壁際から炉址に向かい緩やかな傾斜を持ち皿状に窪む。台地基盤層を直接床としているために硬質で軽石等が突出している部分も見られる。

炉址： 主柱穴に囲まれた範囲住居址中央部よりやや北側に寄った位置に、土器埋設のなされた小形石囲い炉址が検出された。石囲いは扁平な安山岩の木口部を立て、一辺が40cm前後の方形に炉石が組まれている。炉内中央部には深鉢底部が埋設され、周辺には焼土が薄く堆積していた。

遺物出土状況： 復原し得た土器は炉体土器だけである。その他にP_6覆土中より蛇紋岩製垂飾約1/2が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された炉体土器よりみて後期前半堀之内２式期新段階に帰属しよう。

第Ⅲ次 第59号住居址（第８・９図、図版22・23）

位置： 本址は調査区の東側台地中央部より南側に寄った位置で確認された。住居址は台地の南側斜面部に占地し、南側半分は崖により崩落しており、全体の1/2を調査したに過ぎない。

重複： 北側で第Ⅱ次56号住居址を切り込んでいる。

平面プラン： 全体の約1/2しか検出できなかったために、全容の詳細を把握することはできなかったが、検出し得た北側壁プランより考えるとやや不整形の円形プランを呈するものと考えられる。

長軸方向： 検出し得た北壁と住居址中央部に構築されている石囲い炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向は南北方向を示す。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 住居址の北壁を中心とした約1/2の検出だけであったために、内部構造の全容を把握するまでには至ってはいない。配列や深さより主柱穴と思われる柱穴が検出され、これらの柱穴が内帯を巡る形で配される。柱穴の掘り方はしっかりし径は35cm深さ30cm前後である。この柱穴列内側に若干柱穴に架かるように40cm大の細長い安山岩を主体した礫が内帯を巡るように並べられていた。礫の並べ方は長手方向に揃え列をなすように配されている。礫は床上より10cm前後浮いた位置より検出されている。床面全体は北壁側から中央部に向かい緩やかに傾斜し、中央部が一段皿状に窪む。床面は台地基盤層である火砕流部分に掘り込んでいる。そのため全体的に硬く、部分的に火砕流内に含まれる石質岩片等が露出し凹凸をなす部分が見られる。

炉址： 主柱穴と列石に囲まれた範囲中央部に土器埋設のなされた小形石囲い炉址が検出された。石囲いは扁平な安山岩の木口部を立て、一辺が30cm前後の方形に炉石が組まれている。炉内中央部には深鉢胴部が埋設され、周辺には焼土が薄く堆積していた。

遺物出土状況： 復原できた資料は炉体土器だけである。本址は主柱穴配列や検出された炉体土器よりみて後期前半堀之内２式期新段階に帰属しよう。（守矢昌文）

第Ⅳ次 第90号住居址（第９～11図、図版30・31）

位置： 本址は調査区の南側で確認されていたものである。住居址は台地の南側崖肩上面部に占地し、南側半分は崩落しているため、全体の１/２を調査したに過ぎない。

重複： 北側で第Ⅲ次109号住居址を切り込んでいる。また、東側で第Ⅲ次第108号住居址を切る形で重複関係を持ち、いずれも縄文時代中期後半の住居を切って構築されている。

平面プラン： 全体の約１/２しか検出できなかったために、全容の詳細を把握することはできなかったが、検出し得た北側壁プランより考えるとやや不整形の円形プランを呈するものと考えられる。

長軸方向： 検出し得た北壁と住居址中央部に構築されている石囲い炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向は南北方向を示す。

内部構造（柱穴・掘り方等）： 住居址の北壁を中心とした約１/２の検出だけであったために、内部構造の全容を把握するまでには至ってはいない。配列や深さより主柱穴と思われるP_1～P_{10}の10本が検出され、これらの柱穴が内帯を巡る形で配される。柱穴の掘り方はしっかりしており径は32cm前後である。主柱穴の深さはP_1 47cm、P_2 30cm、P_3 25cm、P_4 22cm、P_5 23cm、P_6 47cm、P_7 27cm、P_8 12cm、P_9 28cm、P_{10} 22cmで平均すると約28cmである。柱穴列の内側は20cm大の細長い安山系の河床礫を主体として２段に積まれた石が内帯を巡るよう外側に開きながら積まれていた。礫は床のほぼ直上より長手方向に揃え列をなすように配されており、平らな板状節理輝石安山岩を敷くか、小礫を並べた上に１段目の河床礫を据えている。２段目は若干柱穴に架かっている。床面は北壁側から中央部に向かい緩やかに傾斜しており、重複している第Ⅲ次109号住居址の床とほぼ同レベルになっているため全体的に硬い。切合っている109号住居址の覆土には本址の壁が明瞭に検出され、石積みと壁との間に60cm前後の黒褐色土層が認められる。

炉址： 主柱穴と石積みの列石に囲まれたほぼ中央に土器埋設炉址が検出された。埋設土器は深鉢の底部を含む胴下部で、炉内に胴部の一部と小礫が押し込まれたように詰まっていた。焼土はと中央部には深鉢胴部

が埋設され、周辺には焼土が薄く堆積していた。

遺物出土状況： 復原できた資料は炉体土器だけである。本址は主柱穴配列や検出された炉体土器よりみて後期前半堀之内２式期中段階に帰属しよう。（百瀬一郎）

B．方形柱穴列

第Ⅲ次 第１号方形柱穴列址（第７図）

位置： 本址は調査区の東側台地中央部で確認されていたものである。本址は台地の頂部に占地し、周辺には土坑・ピットが密集している。遺構検出時には柱穴配列に不明確な部分があったが、図面整理時等にその全容を把握できた。

平面プラン： 本址は南北方向に長軸を持つ長方形の平面プランを呈する。長軸に当たる東辺では10.14m、西辺で9.52m、短辺の北辺3.56m、南辺3.73mを測り大きな誤差はなく、平面形は歪みのない形を呈する。

長軸方向： 長辺方向を主軸とすると主軸方向は南北方向を示す。

内部構造（土坑掘り方等）： 本址は番号を付した土坑第136号・146号・212号・236号・237号土坑の５ヶ所と他３ヶ所、合計８ヶ所の土坑より構成される。深さは63cm～181cmまでのバラつきがあるが、対辺の土坑単位ごとにまとまる傾向にある。上面直径1.1m前後、底面直径80cm前後の口径と底径差の少ない断面形が円筒形に近いもので、壁の掘り方は丹念な造りとなる。

C．土　坑

第Ⅱ次 第207号土坑（第12図、図版45）

位置： 本址は調査区の西側台地先端で確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、東側に第212号土坑、西側に第206号土坑が隣接しその様相は並列する形となる。

重複： 本址と重複関係を有している遺構はない。しかし、第Ⅱ次第206号土坑はほとんど隣接する形を採っている。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向N－65°－Wを向く長軸1.16m、短軸0.66mの長楕円形を呈する。この規模は隣接する第Ⅱ次第206号土坑より小形である。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりしており、壁は直線的に外反する形で立ち上がり、深さは確認面より21.2cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪みやや西側壁側が高まる傾向が認められるが、全体的には平坦で堅緻である。

土層の状況： 土坑の覆土は締まりが強く粘性を有し４～８mm大のローム粒子を３％含む褐色土が堆積し、その状況より人為的に埋め戻しているものと捉えられる。

遺物出土状況： ヒスイ製垂飾は坑底中央部よりやや西側に寄った位置の坑底上4.2cmから１点が検出され、このヒスイ製垂飾北側に並ぶようにもう１点のヒスイ製垂飾が検出された。時期を特定できる資料は得られてはいないが、検出されたヒスイ製垂飾や土坑の構築位置よりみて後期に帰属するものと考えたい。

遺物の概要： **ヒスイ製垂飾**（第12図４） 長さ1.45cm、幅1.15cm、重量1.5ｇ、平面形が不整形な涙形を呈する小形の垂飾である。全体面に研磨が至るが、部分的に風化し約1/2が白色化する。端部に寄った位置に孔径0.48cmの孔がほぼ直に穿たれ貫通する。

ヒスイ製垂飾（第12図５） 長さ1.47cm、幅1.2cm、重量1.49ｇ、平面観が１と同様な涙形を呈する。研磨は部分的で自然面とも思われるような円礫面を残留している。端部に寄った位置に孔径0.43cmの孔がほぼ直に穿たれ貫通する。

第Ⅲ次 第70号土坑（第13～20・25図、図版50・51）

位置： 本址は調査区の東側中央部で確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、北側に第94号土坑、西側に第85号土坑が切り、南側で第59号土坑が隣接する。

重複： 土層観察の結果北側に重複関係を持つ第94号土坑は、覆土を第70号土坑が切っていることが判明した。なお、西側に第85号土坑と重複しているが、第85号土坑覆土中から中期終末深鉢片が出土していることより第70号が第85号を切っているものと考えられる。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く長軸2.01m、短軸1.05mの長楕円形を呈する。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりし、立ち上がりは垂直に近い形で深さは確認面より45cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪む傾向が認められるが、全体的には平坦で堅緻である。

土層の状況： 覆土は3層に分層できた。全て人為的堆積と考えられる褐色土起源の土層である。

遺物出土状況： 遺物は坑底南西隅に土偶が倒臥の状態で埋置されたような状態で出土している。土層状況・出土状態の詳細については後章に於いて検討を加える。本址は検出された土偶や土坑の重複関係より後期前半堀之内２式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **土偶**（第14～20図）検出された土偶は復原の結果完全な形となり、高さ34cm、腕を広げた幅24cm、腰幅18.2cm、重量は2.7kgで、腕を十文字に広げたやや腹部を突きだし大きく足を広げ踏ん張った形の立像形の土偶である。頭部はヘルメット状となり、頭頂部より穿たれる直径５㎜の小孔を中心に、浅い刻みを有する低隆帯で十字に区画され隆帯脇に細い串状工具による刺突と沈線区画がなされる。貼付された逆三角形の平滑な顔面には、Ｖ字状の隆帯により眉表現がなされやや斜め上を向く。眉脇には両端に刺突のなされた沈線で切れ長の目を表現し、Ｖ字状眉の鋭角部に粘土貼付の団子っ鼻の表現がなされ、鼻腔は針先のように細い孔により表現される。口は棒状工具によりやや上向きの円孤状の刺突がなされる。この逆三角形の顔面裏側から後頭部にかけて隆帯が巡り、後頭部に環状の突起で頭部の降帯と連結し、これより逆Ｖ字形の隆帯がブリッジ状となり肩に掛かる。この状況はちょうどヘルメット状の被り物と逆三角形の仮面を結び後頭部へ紐を垂らしたような表現に看取ることができる。頸部に左右から径８㎜の孔が貫通する形でほぼ水平に焼成前穿たれている。体部は胸から腕へかけて、肩部、腹部、側腹部、背部、臀部に施文がされる。乳房突起等の表現はされてはおらず、胸から腕へかけては２本一条を基本とする沈線により横位区画となり、手部の渦巻き文へと繋がる。この区画より体部を右下がりの襷状区画構成が下がり腹部の同心円状区画と連結しながら、右側腹部の渦巻き文に繋がる。大きく張り出した腹部中央には、臍と思われる突起が貼付され、中心には小孔が穿たれこの孔は腹部内側まで貫通する。区画内には縄文が施文され、串状工具による刺突がなされる。肩部は頸部から水平に張り出し肘と思われる小突起から折れ曲がる。肩部にはやや角張った渦巻き文が沈線により描かれ、区画内に縄文と刺突がなされる。背部は後頭部下、腰部に渦巻き文が、右肩から左下がりの襷状区画が施文される。この区画内にも縄文と刺突がなされる。臀部は円形の低隆帯で表現され、これを弧状区画が取り囲む。ド腹部は８字形突起の簡略化されたものが貼付されている。脚部は無文で足裏には焼成前に内側から穿たれた径２㎝前後の小孔と網代痕が観察される。製作法等については後章において検討を加える。

土器片（第25図１・２） １は第85号土坑に遺存していた中期終末の縄文系深鉢の同一個体胴部破片である。縄文が施文された胴部中程から上半にかけての破片である。小破片であり、また、その出土状況から第70号土坑が構築される際に第85号土坑内の遺物が混在したものと考えられる。２は半隆起線による区画施文の中期前半の深鉢胴部小片で混在したものであろう。

軽石製品（第25図３） 若干の敲打痕を有するが、基本的には自然礫の様相を示す。

第Ⅲ次 第94号土坑（第13図）

位置： 本址は調査区の東側中央部で確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、周辺には第70号土坑や第59号土坑等が集中する。

重複： 土層観察の結果南側に重複関係を持つ第70号土坑が、本址の覆土南側を切っていることが判明した。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く長楕円形を呈し、坑底のプランも同様な長楕円形となる。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりしており、上がりは垂直に近い形で立ち上がり、深さは確認面より43cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪む傾向が認められるが、全体的には平坦で堅緻である。

遺物出土状況： 完形の浅鉢形土器（第21図１）が伏せられた状態で土坑西壁より内側に検出された。浅鉢形土器は西側が15.4cm、東側5.9cm坑底から浮き、やや内側に向く形で遺存していた。伏鉢内には３～６mm大のローム粒子を５％含む褐色土が充満し、微量ではあるが１mm以下の赤色塗料粉が検出されており、積極的に解釈するならば被葬者に頭部飾りがなされていたものと考えられる。この状態はあたかも墓壙西側に頭部を向けた被葬者の顔面を浅鉢で覆うような状態である。本址は遺物の出土状況から鉢被葬のなされた墓壙と取り扱うことができよう。なお、浅鉢形土器や重複関係よりみて後期前半堀之内２式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **浅鉢**（第21図１） 口縁部に４単位環状の突起を配している。内口縁部はやや肥厚化し、この部分に平行沈線が施文される。環状突起下には平行沈線を切るように弧状沈線が施文される。

第Ⅲ次 第59号土坑（第13図）

位置： 本址は調査区の東側中央部で確認された。土坑は台地の中央部の頂部に近い範囲に占地し、周辺には第Ⅲ次第70号土坑や第Ⅲ次第第94号土坑等が集中する。

重複： 本址と重複関係を有している遺構は見られないが、近接する位置に第Ⅲ次第70号土坑が構築されている。重複関係を有しないことより時間関係を把握し得る資料を得てはいないが、周辺の土坑から検出された土器・土偶より考えると、第Ⅲ次第94号－第70号－第59号土坑との時間的関係を捉えることができようか。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く長楕円形を呈し、坑底のプランも同様な長楕円形となる。この規模は長軸方向をほぼ揃えて並列する第Ⅲ次第94号・第70号土坑内で規模が最も小さい。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりし、立ち上がりは垂直に近い形で、深さは確認面より54cmを測る。坑底は全体的に平坦で堅緻である。

遺物出土状況： 完形の浅鉢形土器が伏せられた状態で土坑西壁より内側に検出された。浅鉢形土器は西側が３cm、東側3.3cm坑底から浮き、ほぼ水平の状態で遺存していた。伏鉢内には粘性のある褐色土が充満していた。土層内には３～７mm大のローム粒子を若干含有しており、微量ではあるが１mm以下の赤色塗料粉が検出されている。この状態はあたかも墓壙西側に頭部を向けた被葬者の顔面を浅鉢で覆うような状態であり、土層内より赤色塗料粉が検出されていることを積極的に解釈すれば、被葬者に頭部飾りがなされていたものと考えられる。本址は浅鉢形土器の遺存状況等から鉢被葬の行われた墓壙と捉えることができ、後期前半堀之内２式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **浅鉢**（第21図２） 口縁部に２単位の同心円状沈線の施文される突起を相対する位置に配し、これに対応するように球状突起と８字形環状突起が相対辺に付けられている。これらの突起を繋ぐように内口縁部に平行沈線が施文される。なお、球状突起下と８字形環状突起下には弧状沈線による区画がされ、区画内には縦位沈線が充填される。

第Ⅲ次 第163号土坑（第12図、図版53）

位置： 本址は調査区の東側中央部で確認された。土坑は台地の中央部よりやや西側に寄った範囲に占地し、第Ⅲ次第150号・第177号土坑と並列する。

重複： 本址は第122号・180号土坑と、西側にピット、北東側にもピットと重複関係を有している。近接する北西位置に第Ⅲ次第150号土坑が構築されている。第122号・180号土坑・西側ピットはバミス・ロームブロック混入の黄褐色で埋め戻されているが、北東側ピットは本址覆土内に掘り込んでいる。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く長楕円形を呈し、坑底のプランも同様な長楕円形となる。この規模は長軸方向をほぼ揃えて並列する第Ⅲ次第150号土坑内に類似する。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりしているが、立ち上がりは直線的に外反し、深さは確認面より42cmを測る。坑底は全体的に平坦で堅緻である。

遺物出土状況： 完形の浅鉢形土器が伏せられた状態で土坑西壁に接する形でより内側に寄る形で検出された。浅鉢形土器は西側が7.6cm、東側16cm坑底から浮き、やや西側に傾斜する状態で遺存していた。伏鉢内には粘性があり締まりの強い、8～12mm大のローム粒子を7％程度含有する褐色土が堆積し、微量ではあるが赤色塗料粉が検出されている。この状態はあたかも墓壙西側に頭部を向けた被葬者の顔面を浅鉢で覆うような状態である。本址は浅鉢形土器の遺存状況等から鉢被葬の行われた墓壙と捉えることができ、後期前半堀之内2式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **浅鉢**（第22図1） 口縁部に3単位突起が付き、突起間には同心円状沈線の施文される小突起が配される。これらの突起を繋ぐように内口縁部に沈線による楕円区画が施文される。突起下には弧状沈線による区画がされ、区画内には縦位沈線が充填される。なお、突起にはV字形隆帯とU字形沈線により、顔面表現にも見える施文を行っている。

第Ⅲ次 第150号土坑（第12図、図版53）

位置： 本址は調査区の東側中央部で確認された。土坑は台地の中央部よりやや西側に寄った範囲に占地し、第Ⅲ次第163号・第177号土坑に挟まれた形で構築される。

重複： 本址は西側にピット、坑底北東側にもピットと重複関係を有している。これらのピット上に貼り床や掘り戻し等は確認されてはいない。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く長楕円形を呈し、坑底はやや上面プランとは異なった不整形な隅丸長方形となる。この規模は長軸方向をほぼ揃えて並列する第Ⅲ次第163号土坑内に類似する。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりし、立ち上がりは直線的に外反し深さは確認面より38cmを測る。坑底は全体的に平坦で堅緻である。

遺物出土状況： 完形の浅鉢形土器（第21図4）が伏せられた状態で土坑西壁より内側に寄る形で検出された。浅鉢形土器は西側が8cm、東側8cm坑底から浮き、ほぼ水平の状態で遺存していた。伏鉢内には粘性があり割合締まりの強い、8～10mm大のローム粒子を4％程度含有する褐色土が堆積している。この状態はあたかも墓壙西側に頭部を向けた被葬者の顔面を浅鉢で覆うような状態である。本址は浅鉢形土器の遺存状況等から鉢被葬の行われた墓壙と捉えることができ、後期前半堀之内2式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **浅鉢**（第21図4） 口縁部に4単位突起が付き、これらの突起を繋ぐように内口縁部に沈線による楕円区画が施文される。突起下には弧状沈線による区画がされ、区画内には縦位沈線が充填される。なお、突起は球状のものを相対辺に、環状把手状のものを相対位置に貼付している。文様構成・貼付突起の状況は第177号土坑出土の浅鉢に類似している。

第Ⅲ次 第177号土坑（第12図、図版53）

位置： 本址は調査区の東側中央で確認された。土坑は台地の中央部よりやや西側に寄った範囲に占地し、南東側に第Ⅲ次第150号・第163号土坑が並ぶ形で構築される。

重複： 本址は坑底北東側にピットと重複関係を有している。これらのピット上に貼り床や埋め戻し等は確認されてはいない。

平面プラン： 平面プランは長軸方向が東西方向を向く北東方向がやや広がった長楕円形を呈し、坑底プランも同様な長楕円形となる。この規模は長軸方向をほぼ揃えて並列する第Ⅲ次第150号・第163号土坑内に比較して小形の規模である。

内部構造（掘り方等）： 土坑の掘り方はしっかりし、立ち上がりは直線的に外反し、深さは確認面より16cmを測る。坑底は全体的に平坦で堅緻である。

遺物出土状況：完形の浅鉢形土器が伏せられた状態で土坑西壁に接する形で検出された。浅鉢形土器は西側が3cm、東側1.5cm坑底から浮き、若干内傾する状態で遺存していた。伏鉢内には粘性があり胴合締まりの強い、3～5mm大のローム粒子を4％程度含有する褐色土が堆積している。この状態はあたかも墓壙西側に頭部を向けた被葬者の顔面を浅鉢で覆うような状態である。本址は浅鉢形土器の遺存状況等から鉢被葬の行われた墓壙と捉えることができ、後期前半堀之内2式期新段階に帰属しよう。

遺物の概要： **浅鉢**（第21図3） 口縁部に4単位球状の突起が付き、これらの突起を繋ぐように内口縁部に沈線による楕円区画が施文される。突起下には弧状沈線による区画がされ、区画内には縦位沈線が充填される。文様構成・貼付突起の状況は第150号土坑出土の浅鉢に類似している。（守矢昌文）

7. 縄文時代の主な遺物

A．縄文土器の概要

今回の調査により住居址内より得られた土器片は、総重量にして1,059.53kgを測り、復原された土器は203点でその量は多いと言える。この土器について本来ならば資料化を行わなければならないが、時間的な制約や紙面の都合から概要を述べるに止まっている。

縄文土器の時期は縄文前期初頭の花積下層式期から後期中半加曽利Ｂ１式までの遺物が得られているが、前期の土器は希薄で、中期前半猪沢式期から後期前半堀之内２式期までの土器が主体となる。その中でも後期前半の土器群は注視すべきもので、堀之内２式期浅鉢は遺構の重複関係より段階的な時間差を想定し得る資料として貴重なものである。

土器群の構成とその特徴： 中期前半では新道式期の住居址（第Ⅲ次第38号住居址）より阿玉台１ｂ式期の土器が、井戸尻Ⅰ式期住居址（第Ⅲ次第22号住居址）よりは北屋敷式期の土器が得られており、広域からの文物の流入があったことが窺える。中期後半では梨久保Ｂ式系、曽利式系、加曽利Ｅ式系が基本的には認められる。この構成は市域に於ける棚畑遺跡や上ノ平遺跡等と同様な傾向であるが、詳細に検討を加えると中期後半終末の上器群に特徴的な縄文系土器群を見いだすことができる。

後期前半では堀之内２式期に石神類型土器が伴出している。遺構の重複関係から堀之内２式期は少なくとも３段階に細分され、石神類型土器は新段階に伴出するようである。

B．石器の概要

今回の調査により住居址内より得られた石器は、黒曜石製の石器を除くと817点が得られている。これらを詳細に検討していないが、その組成を第１表に示した。

石器の分類と特徴： 石器内で細分をした器種について概観してみる。磨製石斧Ⅰ類－定角式のもので第Ⅲ次第59号・第Ⅳ次第104号住居址等の後期前半の住居址から検出されている。磨製石斧Ⅱ類－棒状の形状を呈し、中期前半に偏在する。礫器Ⅰ類－素材礫の一端に剥離を加え刃部としている。礫器Ⅱ類－平坦な素材礫の周縁に剥離を加え、形状が円盤状となる。礫器Ⅲ類－素材礫の端部に集中的に敲打がなされ潰れ状となる。礫器Ⅳ類－Ⅲ類に剥離が加わる。これらの礫器は中期前半に偏在するようである。凹石Ⅰ類－片面凹み。凹石Ⅱ類－表裏両面凹み。凹石Ⅲ類－表裏、側面に凹み。凹石Ⅳ類－凹石と磨石とを併用するもの。凹石には時期的な偏在性は認められなかったが、両面凹みのⅡ類が主体を占める。

石器の組成： 石器組成には時期等による偏在性等を認めることはでき、特に中期前半では第Ⅲ次第22号住居址に見られるように打製石斧が主体を占める傾向を看取ることができる。これに対し後期前半では第Ⅳ次90号住居址の場合打製石斧は減少し、石器組成が貧弱となる傾向がある。また、時期的に特徴的な石器は中期前半に認められ、礫器とした安山岩等の素材礫に簡易な剥離または、敲打のなされた特徴的な石器がまとまった数量得られている。この傾向は棚畑遺跡でも認められており、中期前半の石器組成内で一定数を占める石器として認識してもよいであろう。 （守矢昌文）

第1表　中ッ原遺跡住居址出土土器・黒曜石・石器等一覧(1)

住居番号	出土土器重量(kg)	黒曜石総重量(g)	黒曜石点数	打斧	磨製石斧		石匙	横刃	磨器				凹石				磨石	石皿	剥片	砕片	原石	石棒	軽石
					Ⅰ類	Ⅱ類			Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類							
Ⅱ第1号住	6.7	39.2	3																				
Ⅱ第2号住																							
Ⅱ第3号住																							
Ⅱ第4号住	1.2	147.7	12																				
Ⅱ第5号住	0.14	21.2	2																				
Ⅱ第6号住	0.04	25.6	1																				
Ⅱ第7号住	34.1	841.1	205	14	1	3		2	2	1			1	3	3			1	2	4	2		18
Ⅱ第8号住	13	626.7	199	1	2		1			2	1			3	1				1	1			1
Ⅱ第9号住	177.45	983.9	264	6	1	3		1				1							10	1	4		14
Ⅱ第10号住	1.5	121.2	70	5		1		2							1	1			1				3
Ⅱ第11号住	6.52	153.5	46	5										3	2				6	2			3
Ⅱ第12号住	8.12	724.3	136	5							1		1	1	1				3		1		4
Ⅱ第13号住	0.12	3.7	4																				
Ⅱ第14号住	1.3	186.6	34	2									4	1			1		1		1		2
Ⅱ第15号住	0.46																						
Ⅱ第16号住	2.07														1			1					
Ⅱ第17号住	0.05																						
Ⅲ第1号住	2.55	222.5	69																				
Ⅲ第2号住	4.02	662.4	182																1				
Ⅲ第3号住	3.72	194.4	110			1					1								1				2
Ⅲ第4号住	18.91	1339.8	296	10		2		2	2				1	5		1	2		14				
Ⅲ第5号住	6.79	380.1	124	3				2			1		1	3			1		3				1
Ⅲ第6号住	17.39	660.8	134											3									
Ⅲ第7号住	8.89	856.9	152	1										2	1						1		
Ⅲ第8号住	16.58	476.6	130	3	1							1		2		1			1				
Ⅲ第9号住	1.28	45.6	12																				
Ⅲ第10号住	0.67	4	2																				
Ⅲ第11号住																							
Ⅲ第12号住	1.15	105.3	14				1																
Ⅲ第13号住	6.54	276.3	73	2						1				1									2
Ⅲ第14号住	2.52	208.6	15	1	1									1									
Ⅲ第15号住	0.15	124	26																2				1
Ⅲ第16号住	29.36	731.3	154	9	2			2	1			1		5		2	1	1	9	2			16
Ⅲ第17号住	16.68	516.8	114	5	1	2		2						1	1	2		1	10	4			13
Ⅲ第18号住	0.2	8.3	2																				

第1表　中ッ原遺跡住居址出土土器・黒曜石・石器等一覧(2)

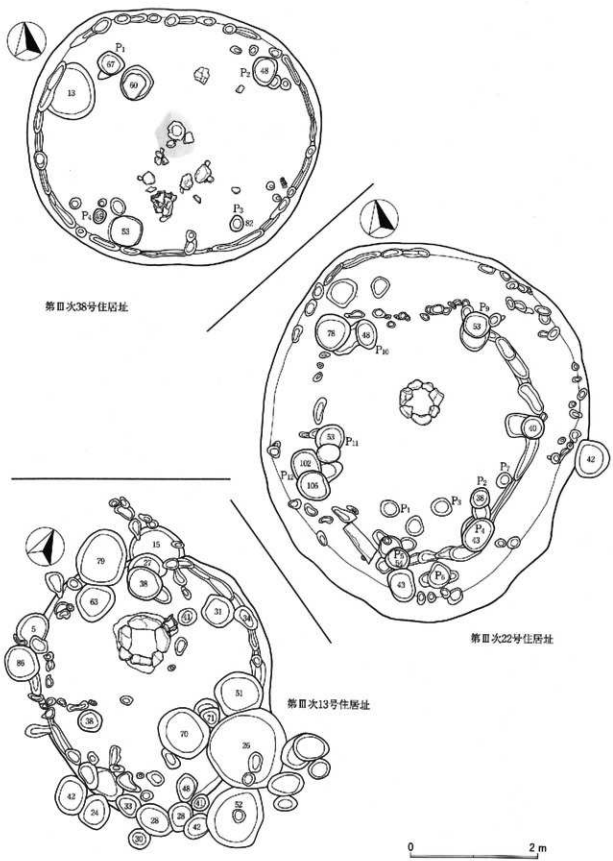
住居番号	出土土器重量(kg)	黒曜石総重量(g)	黒曜石点数	打斧	磨製石斧		石匙	横刃	縄文土器				弥生土器				磨石	石皿	剥片	砕片	原石	石棒	軽石
					Ⅰ類	Ⅱ類			Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類							
Ⅲ第19号住	0.2	6.8	1																				
Ⅲ第20号住	18.56	142.2	37	2														1					
Ⅲ第21号住	1.61	44	9							1									8	3	1		2
Ⅲ第22号住	56.55	1604.19	454	19		3	2	3	5				1	1			2	5	13	7	1		4
Ⅲ第23号住	3.94	85.6	11						1					1									
Ⅲ第24号住	0.2	66	17																1				
Ⅲ第25号住	4.58	708.8	162		1	1													4	1			1
Ⅲ第26号住	1.38				1			1							1								
Ⅲ第27号住	11.1	247.1	37		1			1											1	1			
Ⅲ第28号住	2.3	428	58	1			1	1							2			1	3				1
Ⅲ第29号住	2.92	152.5	26										1		1				2	1	1		
Ⅲ第30号住	0.6	336.4	79	4				1			1												2
Ⅲ第31号住	1.8	152	47																2				
Ⅲ第32号住	65.74	1296.5	210	17	1	3	1		2	4	2		1	7	4	2	1		30	4			14
Ⅲ第33号住	1	60.7	19																3				
Ⅲ第34号住	0.5	15	7	1																			
Ⅲ第35号住	2.12	175.6	30											1					7		1		1
Ⅲ第36号住	1.65	70.4	17													1		1	1				
Ⅲ第37号住								1															
Ⅲ第38号住	6.72	474	90			1				1					1				7				2
Ⅲ第39号住	0.1	225	7																				
Ⅲ第40号住	40.34	1633.8	275	13	3		2	3	1		3			6				2	14	5	1		11
Ⅲ第41号住	7.75	269.1	45	4	1	1							1	1		3			3				
Ⅲ第42号住	2.44	182.2	12	1		1																	
Ⅲ第43号住	1.5	228.4	38			1																	
Ⅲ第44号住	2.04	144.7	31											1					1				
Ⅲ第45号住		3.9	2																1				
Ⅲ第46号住	18.98	1108.8	177	7				1	1					1	1				13			1	
Ⅲ第47号住	0.2	13	1	1																			
Ⅲ第48号住	4.88	35.31	74		1																		1
Ⅲ第49号住		1.1	1																				
Ⅲ第50号住	6.64	232	52	2		1							1	1					2				
Ⅲ第51号住	3.74	486.1	41		1																	1	
Ⅲ第52号住	1.14	58.9	12	1	2									1					1				
Ⅲ第53号住	7.84	300.1	51	3									1	3					2				1

第1表　中ッ原遺跡住居址出土土器・黒曜石・石器等一覧(3)

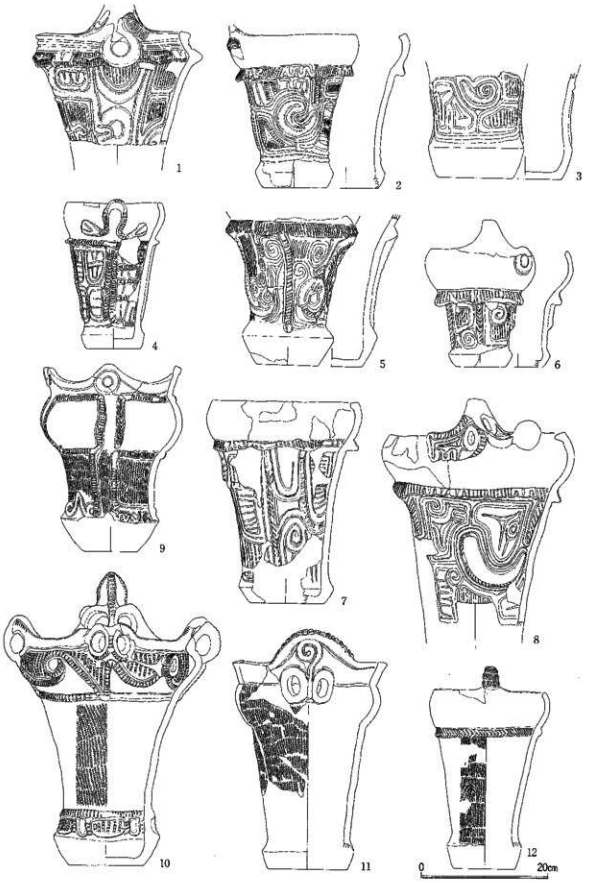
住居番号	出土土器重量(kg)	黒曜石総重量(g)	黒曜石点数	打斧	磨製石斧		石匙	横刃	礫器			凹石				磨石	石皿	剥片	砕片	原石	石錐	軽石
					Ⅰ類	Ⅱ類			Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類						
Ⅲ第54号住	1.2	62.1	8																			
Ⅲ第55号住	0.3			1																		
Ⅲ第56号住	5.16	250.9	58	2							1						1				1	
Ⅲ第57号住	0.1	985.2	194	4		1			1				6	6		1	1	9	1	1		6
Ⅲ第58号住	0.02																					
Ⅲ第59号住	6.24	326.4	56	7	3			1			1			7			1	4				2
Ⅲ第60号住	0.24	47.3	5	2										1								
Ⅲ第61号住	0.45	67.1	6						1				1	1				1				
Ⅲ第62号住	3.7	21.1	3																			1
Ⅲ第63号住																						
Ⅲ第64号住		5.3	3																			
Ⅲ第65号住																						
Ⅲ第66号住																						
Ⅲ第67号住																						
Ⅲ第68号住	0.9	87.1	3	1														1				
Ⅲ第69号住	10.24	200.6	22	1			2								2			1				1
Ⅲ第70号住	0.14																					
Ⅲ第71号住	28	155.6	23	6				1			2					1		1	1			
Ⅲ第72号住	2.42	74.8	12	2							1					1						
Ⅲ第73号住	5.78	98.2	24	4				2	1	1				2				1				
Ⅲ第74号住	7.8			1				1					2	1				3				
Ⅲ第75号住	12.51			8			1	4										9				1
Ⅲ第76号住	24.25	682.3	162	8		1			2		1		1	2	1			7				6
Ⅲ第77号住	7.54	332.1	68	3				1								1		4				1
Ⅲ第78号住	8.58	338	52	12		1							1					1				
Ⅲ第79号住	1.28	1.8	1												1							
Ⅳ第80号住	0.28	1.7	2	1																		
Ⅳ第81号住	37.06	835	190	5	1									3		1		1	3			31
Ⅳ第82号住	9.03	833.3	183	2				1						6	1	2						1
Ⅳ第83号住	3.6	240.3	39	2				1							1							
Ⅳ第84号住	11.85	285.2	71	5	1								2	2		1	1					5
Ⅳ第85号住	16.88	625.5	155					1						3		1	1	1	1			7
Ⅳ第86号住	13.81	1350.5	293	19			1						1		1	1		7	4			1
Ⅳ第87号住	2.64	87	23	2														3				
Ⅳ第88号住	11.9	754.2	172	10	1	2		2					1	3	1			2	4			7

第1表　中ッ原遺跡住居址出土土器・黒曜石・石器等一覧(4)

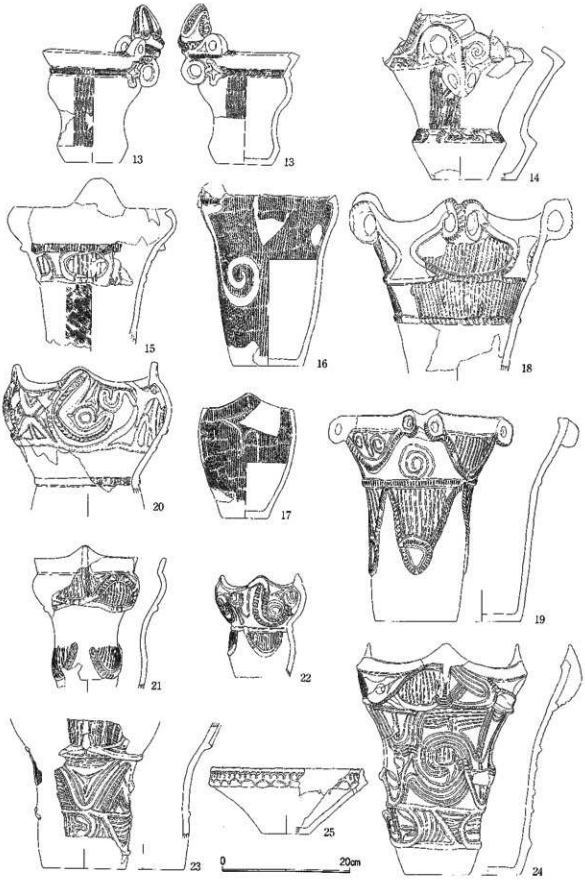
住居番号	出土土器重量(kg)	黒曜石総重量(g)	黒曜石点数	打斧	磨製石斧		石匙	横刃	礫器				凹石				磨石	石皿	剥片	砕片	原石	石棒	軽石
					Ⅰ類	Ⅱ類			Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類							
Ⅳ第89号住	3.58	87.4	17																				1
Ⅳ第90号住	21.22	378.6	55	7				2	1			1	4	2	3	1	1		2	2			2
Ⅳ第91号住	10.28	245.3	24	3	1					1				3					3	1			1
Ⅳ第92号住	10.57	491.4	68	2										3					1				1
Ⅳ第93号住	8.9	471.5	148	1					1					1					3				1
Ⅳ第94号住	23.63	738.2	124	25			4	2	4				2	2	1	1			12	1			7
Ⅳ第95号住	16.44	1951.9	149	9		1	1	1						4					7				2
Ⅳ第96号住	2.4	176.1	30	1		1							1		2			1	1				
Ⅳ第97号住	1	103.7	44																				
Ⅳ第98号住	7.3	259.7	66		1										4	1		1	2				2
Ⅳ第99号住	1.17	77.3	13	2	1														6	1			
Ⅳ第100号住	5.8	188.9	19	2																			
Ⅳ第101号住	10.27	273.4	72	4				1						1	2	1							1
Ⅳ第102号住																							
Ⅳ第103号住	0.95	101.1	20						1				1	1	1								1
Ⅳ第104号住	5.23	161.5	78		3				1		1		1	3	2	1	3						2
Ⅳ第105号住		396.7	69	1	1			2					1	1		2			3	1			2
Ⅳ第106号住				2												1			1	1			
Ⅳ第107号住	1.1	40.9	11	2									1	3	1		2		1				
Ⅳ第108号住	9.52	397.5	104	9			1							4					1				3
Ⅳ第109号住	7.8	247.7	40	4										1									
Ⅳ第110号住																							
Ⅳ第111号住	2.32	33.9	5					1															1
Ⅳ第112号住	13.2	404.5	71	2	1				1				1	2					2				1
Ⅳ第113号住	0.22	45	1																				
Ⅳ第114号住																							
Ⅳ第115号住	0.7	14.7	3																				
Ⅳ第116号住	0.05	23	6											1									
Ⅳ第117号住	0.11	11.6	3											1									3
Ⅳ第118号住	0.77	55.9	10																1				
Ⅳ第119号住	0.4	14.6	1											2		2							
Ⅳ第120号住	0.04	7.5	1																				
Ⅳ第121号住	0.16																						
Ⅳ第122号住	0.12	29.1	2																				



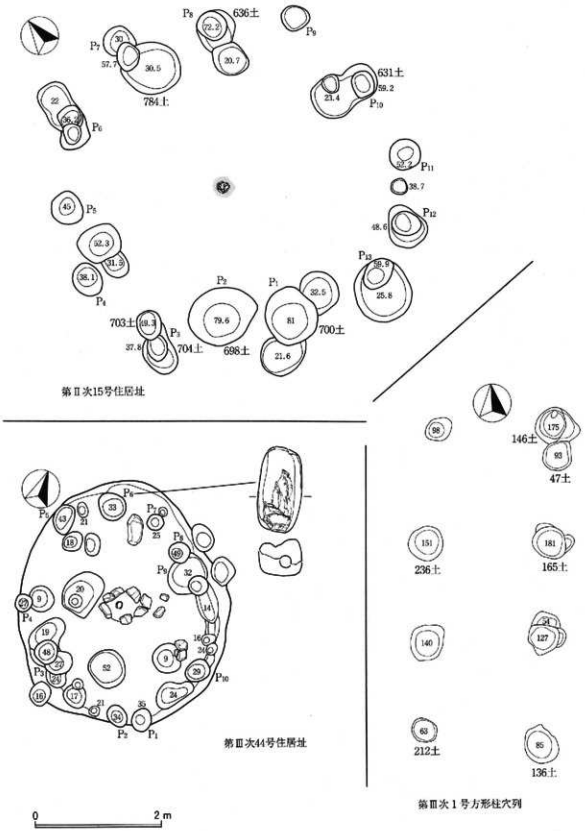
第4図　第Ⅲ次第13・22・38号住居址（1/60）



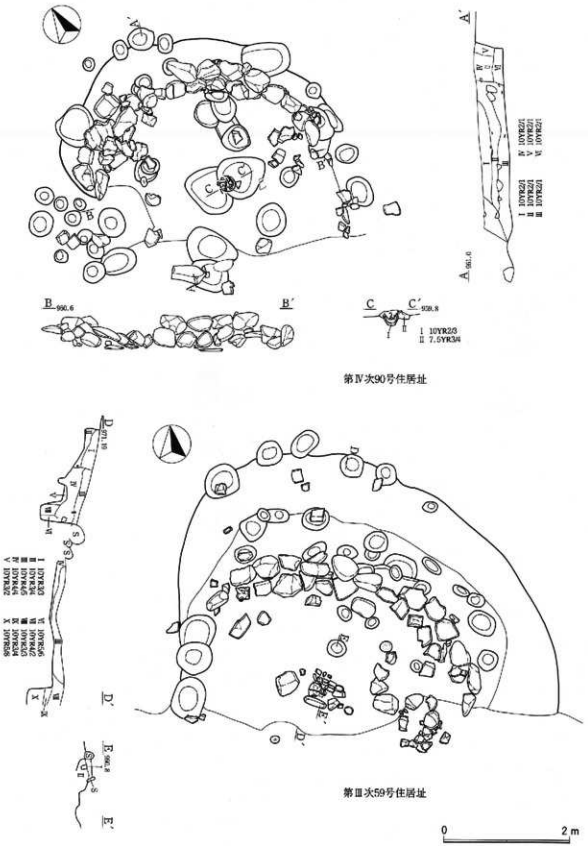
第5図　第Ⅲ次第22号住居址出土土器（1/6）



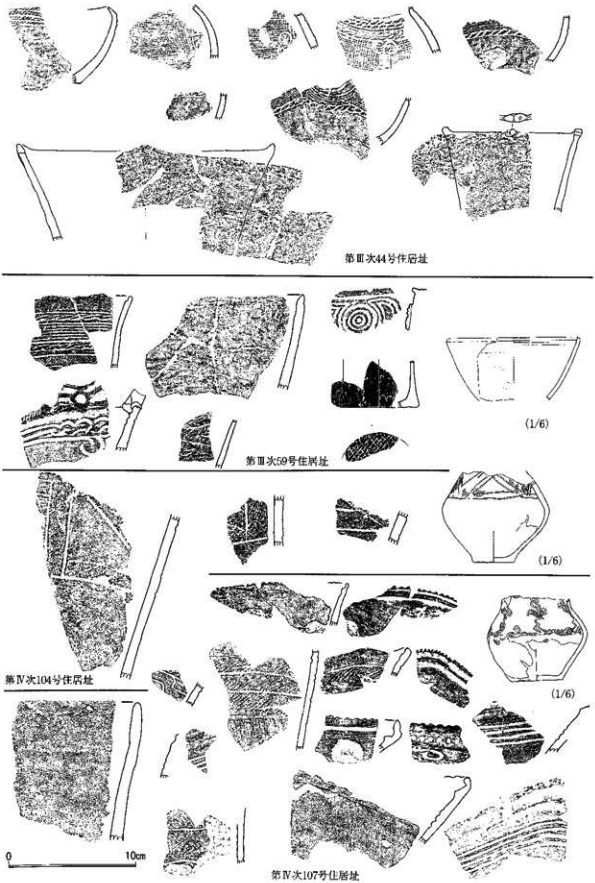
第６図　第Ⅲ次第22号住居址出土土器（1/6）



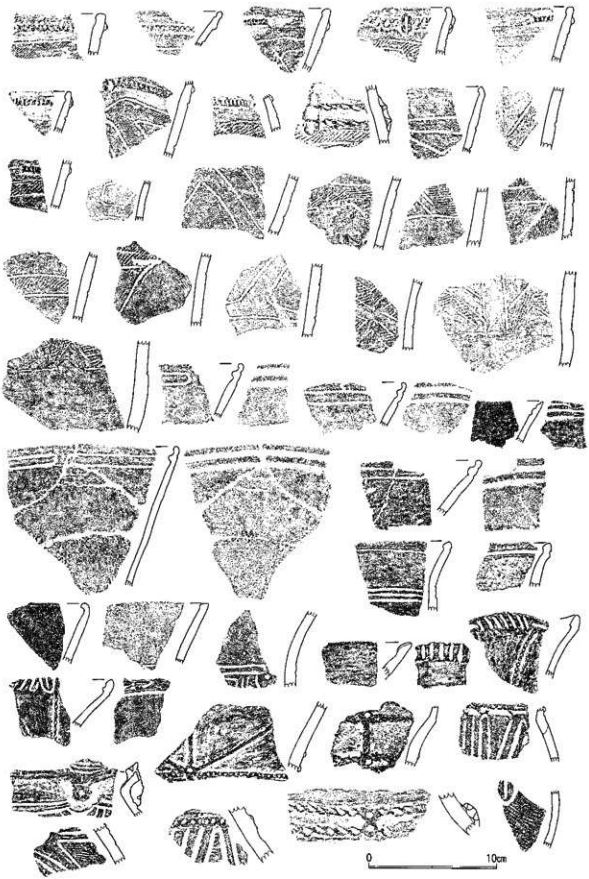
第7図　第Ⅱ次15号住居址、第Ⅲ次44号住居址（1/60）、第1号方形柱穴列（1/120）



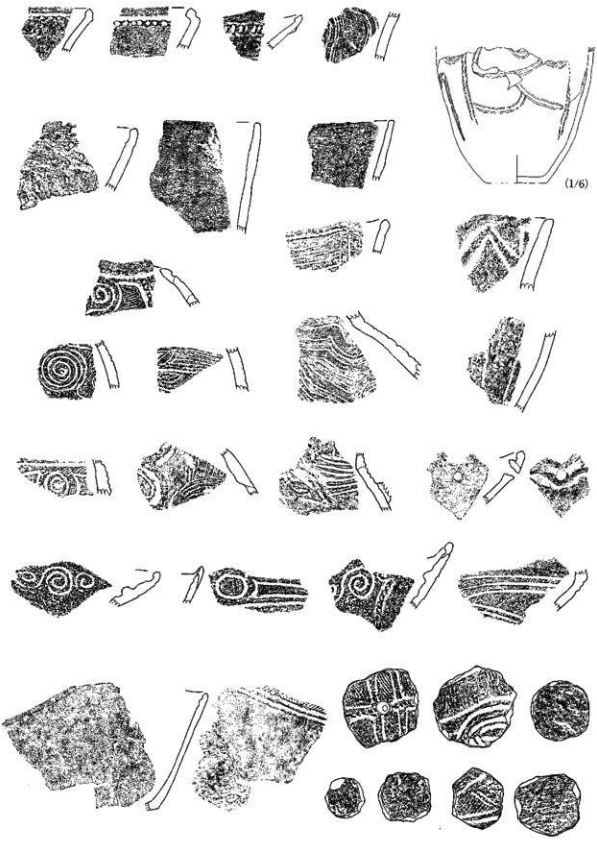
第８図　第Ⅲ次59号住居址、第Ⅳ次90号住居址（1/60）



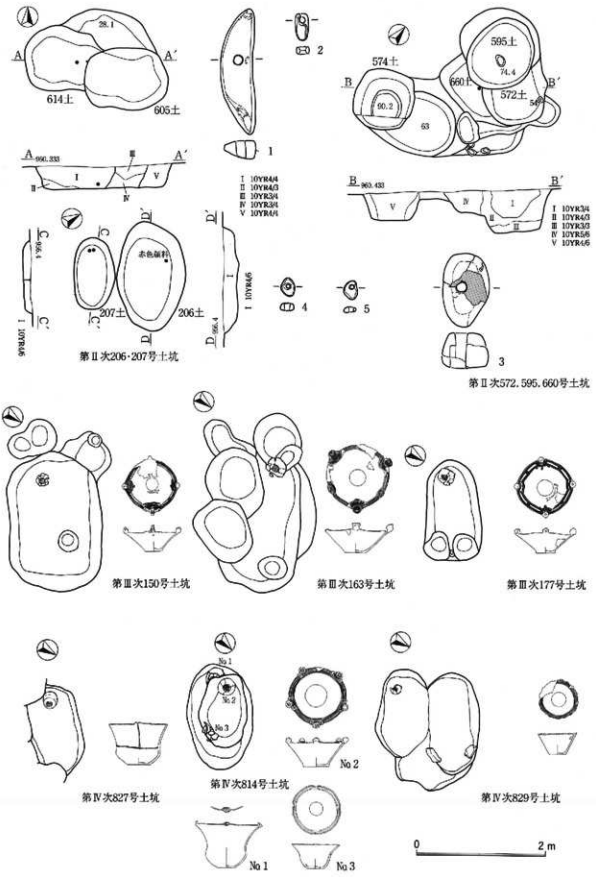
第9図　第Ⅲ次第44・59号住、第Ⅳ次第104号住、第107号住居址出土土器（1/3）



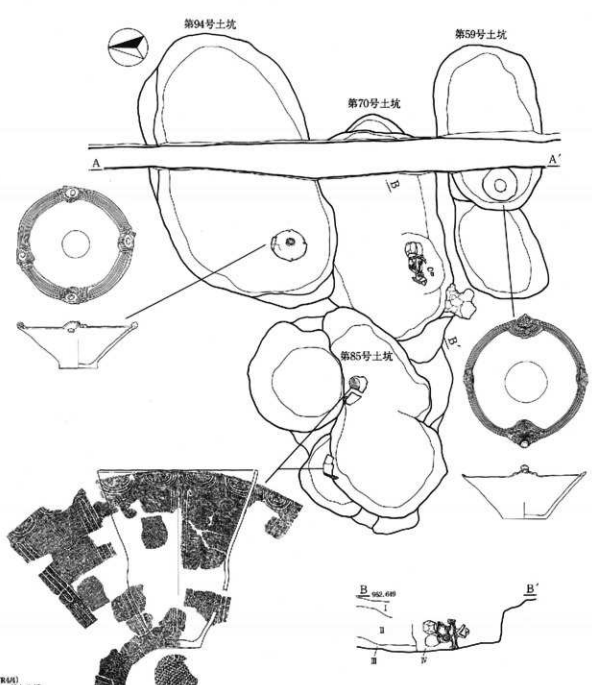
第10図　第Ⅳ次第90号住居址出土土器（1/3）



第11図　第Ⅳ次第90号住居址出土土器（1/3）

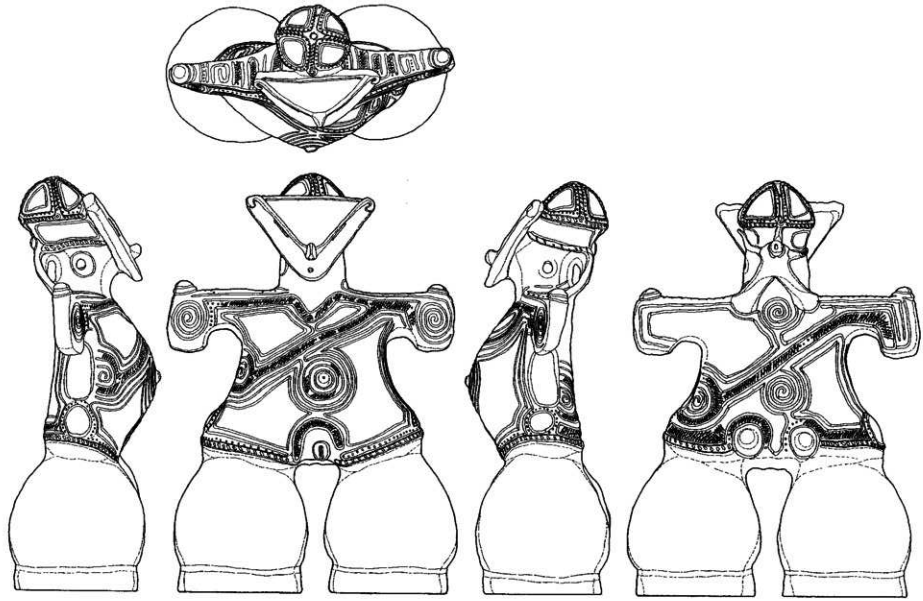


第12図　第Ⅱ次第206·207号土坑、第572·595·660号土坑、第Ⅲ次第150·163·177号土坑、第Ⅳ次第814·827·829号土坑(1/6)

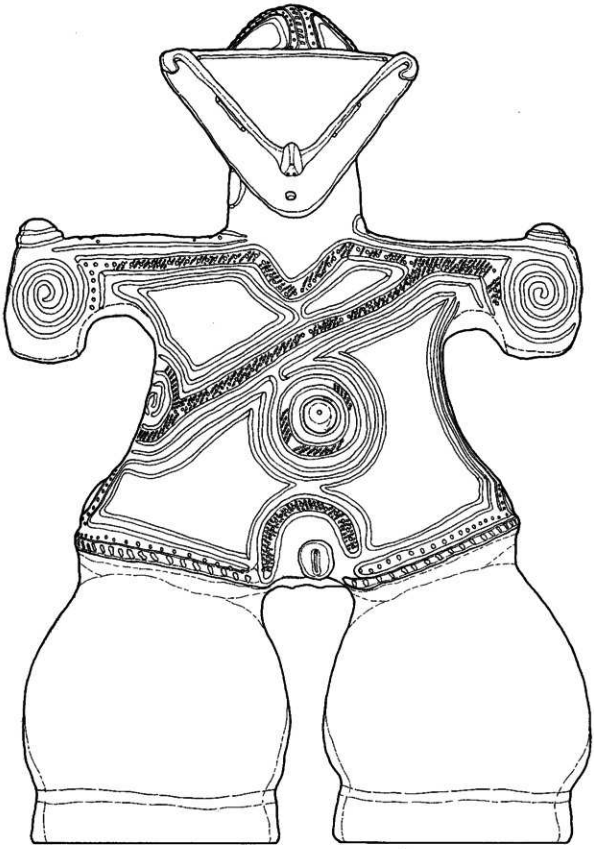


I．暗色土（10YR4/4）
　礫質で粘性有。締り良好
II．褐色土（10YR4/6）
　1層よりも礫質で、締りが強い
　3～25mm大ローム粒10%含有
III．黒色土（10YR4/4）
　1層よりも粘性が強くねばりがある
　3mm大炭化物
IV．にぶい黄褐色土（10YR4/3）
　粘性強I～3層に比較してやや軟質
　3～5mm大ローム5%含有
V．黒褐色土（10YR2/2）
　締性土、粘性有
VI．暗色土（10YR4/4）
　粘性有、割合締りが強い
VII．黄褐色土（10YR5/6）
　締りがとく礫質で、混入物が少ない
VIII．褐色土（10YR4/6）
　7層よりも締りが少ないが、粘性有。内部に
　10～20mm大のロームブロック15%含有
IX．黒色土（10YR2/3）
　締りよく粘性有。1mm以下ローム粒子2%含有
X．黄褐色土（10YR5/6）
　締りが9層より良く、礫質。内部10～20mm大の
　ロームブロック15%含有

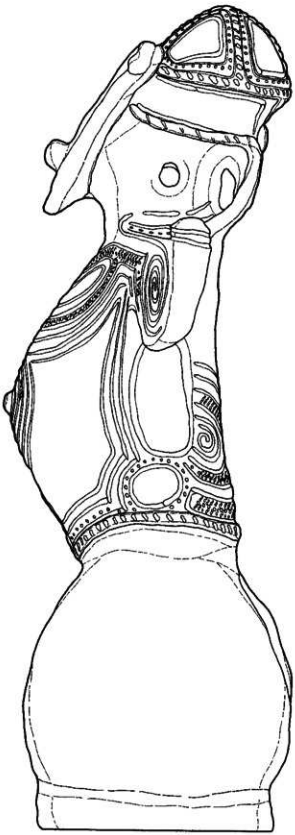
第13図　第Ⅲ次第59・70・85・94号土坑（1/30）



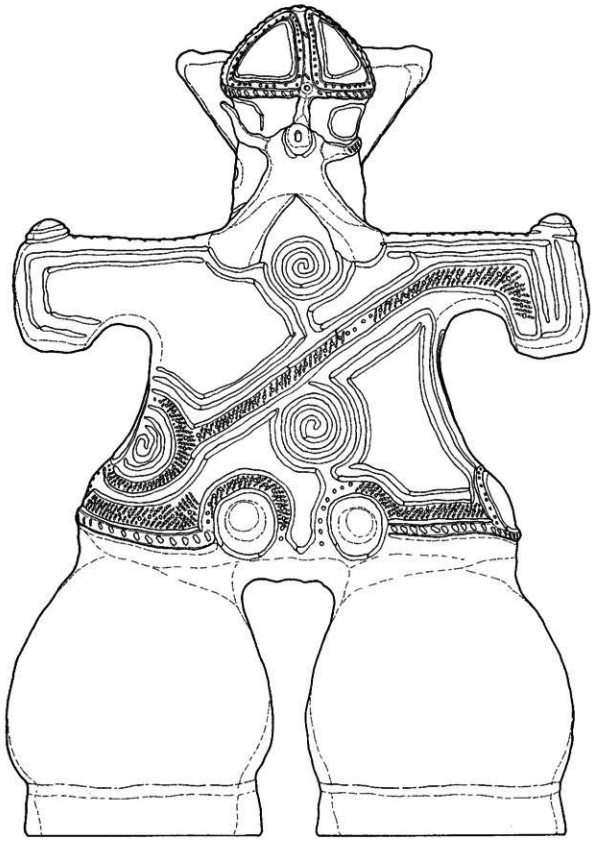
第14図　土　偶



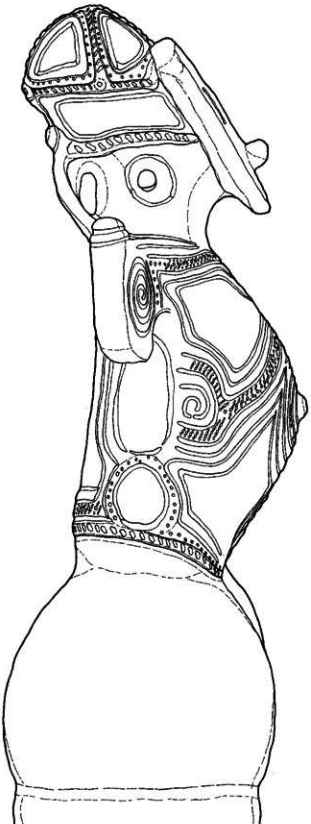
第15図　土偶（正面）(2/3)



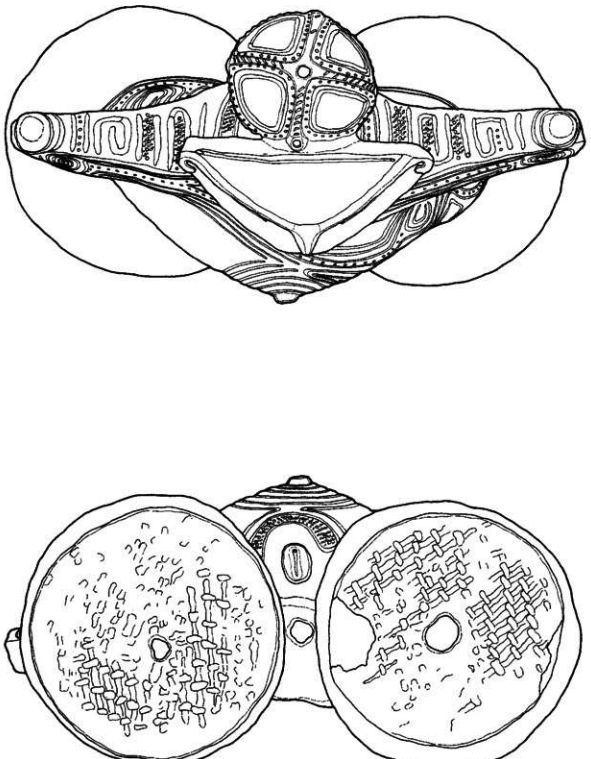
第16図　土偶（側面）(2/3)



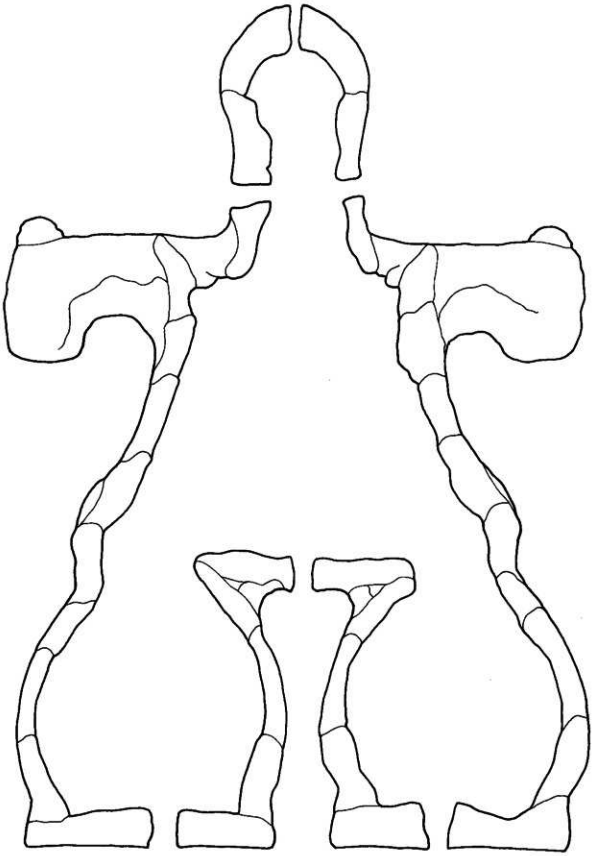
第17図　土偶（背面）(2/3)



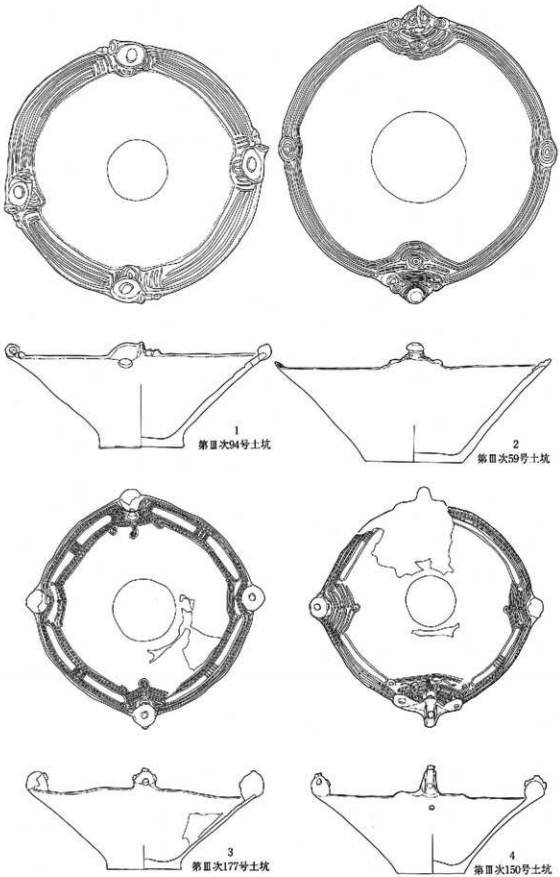
第18図　土偶（側面）(2/3)



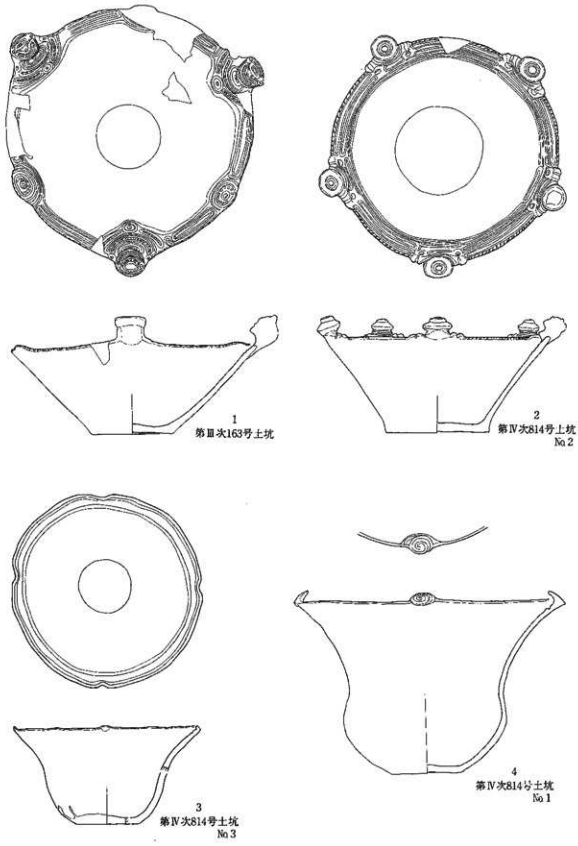
第19図　土偶（頭頂部、足裏部）（2/3）



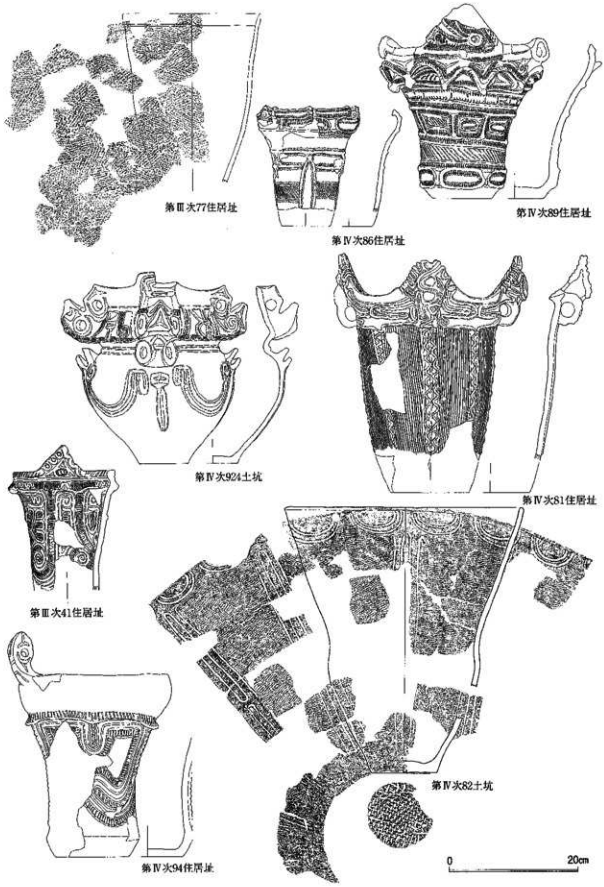
第20図　土偶（断面）(2/3)



第21図　第Ⅲ次第59・94・150・177号土坑出土土器（1/4）

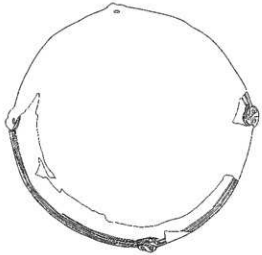


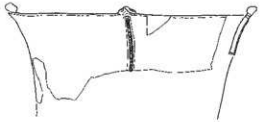
第22図　第Ⅲ次第163号・第Ⅳ次814号土坑出土土器（1/4）



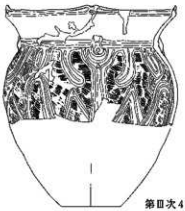
第231図　縄文前期・中期前半～中期後半土器（1/6）

第Ⅳ次独立土器No 7





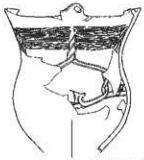
第Ⅳ次875号土坑 1



第Ⅱ次4 住集石下

第Ⅳ次103号住堆

第Ⅲ次454号土坑No 2



第Ⅳ次875号土坑 2

第Ⅳ次103住W

第24図　縄文中期終末～後期前半土器（1/6）

第Ⅴ章　分析調査報告

第１節　茅野市中ツ原遺跡出土中空土偶の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茅野市中ツ原遺跡では、縄文時代中期前半および後半、後期前半の遺構・遺物が検出されている。このうち、縄文時代後期前半では、多くの土坑が検出され、その多くが墓坑と考えられている。このうちの１基からは、中空の大型仮面土偶がほぼ完全な状態で出土しており、土偶そのものが埋納されたか、遺体とともに土偶が埋納されたと考えられる。

今回の分析調査では、土偶内に充填していた土壌について、土壌化学分析と微細遺物の水洗選別・同定を行い、土偶内の内容物などについて検討する。なお、土壌化学分析では、遺体等が入っていた場合に富化すると考えられる、リン酸、カルシウム、腐植の３項目を選択した。

１．試　料

試料は、土偶内の土壌試料１点である。

２．方　法

(1)　水洗選別・同定

100ｇ程度を秤量して、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させたあと、0.5㎜の篩を通して水洗を行い、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な微細遺物を抽出する。

(2)　土壌化学分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解―バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解―原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に各項目の操作工程を示す。

ａ）リン酸、カルシウム

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に、原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5 mg/g）とカルシウム含量（CaO mg/g）を求める。

ｂ）腐植含量

風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100㎖三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10㎖を正確

に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に、0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量（Org−C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて、腐植含量（%）を算出する。

3．結　果

(1) 水洗選別・同定

分析後の残渣は、ほとんどが鉱物粒と泥化できなかった1㎜程度の土塊であり、同定可能な微細遺物は検出されなかった。

(2) 土壌化学分析

分析結果を、表1に示す。試料の土性はシルト分に富む粘質土であり、SiCL（シルト質埴壌土）に区分される。土色については10YR3/2と黒褐色を呈し、腐植物質を比較的多く含む土壌であると判断される。

表1　土壌化学分析結果

試料名	土性	土色		腐植含量(%)	P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)
土偶内土壌	SiCL	10YR3/2	黒褐	4.40	5.16	1.96

1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

分析結果は、腐植含量が4.40%であり、土色との対応関係が認められるが、リン酸含量については5.16 P_2O_5mg/gとやや高い傾向が認められた。一方、カルシウム含量については1.96CaOmg/gであり、特に顕著な濃集は認められない。

4．考　察

土偶内土壌を水洗選別した結果では、種実や微細な炭化材片などは全く検出されず、土偶内に植物遺体などが埋納された痕跡は認められない。しかし、一般に植物遺体は低地などの嫌気的環境下以外では、炭化しなければ土壌中に残存する可能性が低いと考えられるため、今回の結果のみでは断定できない。

一方、おもに動物遺体の埋納については、土壌化学分析を応用して、検証を試みた。なお、土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983；Bolt･Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例がある。カルシウムの天然賦存量は普通1～50CaOmg/g（藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きいことから、ここでは補助的なものとして結果を示した。

今回のリン酸含量は、天然賦存量の上限と考えられる3.0P_2O_5mg/gを超えることから、富化している可能性が指摘できる。しかし、カルシウムについては天然賦存量の範囲内にあった。リン酸は主として生物起源であることを考慮すれば、富化は動植物遺体に由来すると考えられる。仮に動物遺体とした場合リン酸と同時に一般的にはカルシウムの富化も認められる場合が多いこと、および本試料の腐植含量値などから、本来土壌に含まれていた植物遺体の成分などに由来する可能性もある。

なお、リン酸等の富化を把握し遺構・遺物の内容物について検証する場合、一般的な天然賦存量は一概に全ての土壌のバックグランドとすることができない。そのため、現地表面や包含層・遺構覆土などの対比試料についても同様の分析を行い、比較検討する必要がある。今後、上記したような対照試料についても同様の調査を行い、今回の分析結果の評価を行いたい。

引用文献

ペドロジスト懇談会編（1984）土壌調査ハンドブック．156ｐ．，博友社．

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440ｐ．，養賢堂．

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，ｐ．28−36，農林水産省農林水産技術会議事務局．

Bowen, H. J. M.（1983）環境無機化学―元素の循環と生化学―．浅見輝男・茅野充男訳，297ｐ．，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）*Environmental Chemistry of the Elements*］．

Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陸　捷行訳，309ｐ．，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）*SOIL CHEMISTRY*］

川崎　弘・吉田　潔・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149ｐ．，農林水産省農林水産技術会議事務局．

第２節　中ツ原遺跡第70号土坑の土壌化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県茅野市湖東に所在する中ツ原遺跡は、八ヶ岳の火山活動により形成された尾根状台地上に立地している。本遺跡のこれまでの発掘調査では、縄文時代中期や後期に比定される竪穴住居址や土坑などが多数確認されており、鉢被せが見られる墓坑と考えられる遺構や縄文時代後期前半に比定されるほぼ完形の仮面土偶が出土する土坑など、特筆すべき遺構も検出されている。

今回の分析調査は、上記した仮面土偶が出土した土坑（第70号土坑）の用途を推定するため、特に、遺体埋納等の可能性を検証するため、当土坑覆土から採取した土壌を対象に土壌理化学分析および脂肪酸分析を実施する。

１．試　料

試料は、第70号土坑覆土から採取された土壌10点である。以下に、遺構および分析試料採取位置の概要を示す。

第70号土坑は、東西方向に長軸を持つ1.3m以上×1.0mの楕円形を呈し、深さは約45cmを測る。土坑覆土は、１～３層は褐色土、４層はにぶい黄褐色土から成る。なお、発掘調査時の所見では、１～３層は土坑埋め戻し土とされ、４層は土偶埋設時の掘込み埋め戻し土と想定されている。

分析試料は、第70号土坑東側の２地点（A・B地点）および土偶の出土地点付近からそれぞれ採取している。A地点では試料は１・２層の層界より上から５cm毎に土壌３点、３層から土壌１点の計４点、B地点では１・２層の層界より上から土壌２点、３層も同様に２・３層の層界より上から土壌２点の計４点、さらに、土偶出土地点付近からは土偶の背面および土偶の下部にあたる掘り方からそれぞれ土壌１点の計２点を採取している（図１）。

以上の試料について、全点を対象として土壌理化学分析および脂肪酸分析を実施する。

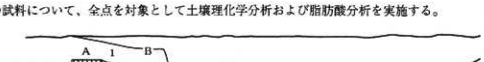


図１　第70号土坑の断面および試料採取位置略図

２．分析方法

(1)　土壌理化学分析

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を行う。リン酸は骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。特に、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定すること可能である。なお、土壌中のリン酸の

供給源として植物体も考えられ、植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。そのため、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸分析は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム分析は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法、腐植含量分析はチューリン法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に、各分析手法の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜ϕのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaO mg/g）を求める。

また、微粉砕試料0.100～0.500ｇを100㎖三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10㎖を正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

(2) 脂肪酸分析

分析は、坂井ほか（1996）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料は100ｇ程度秤量し、試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール（2：1）を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON, HR-SS-10, 内径0.25㎜, 長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（GC－14A, SHIMADZU）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム（J & W SCIENFIC, DB－1, 内径0.36㎜、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

3．結　果

(1) 土壌理化学分析

結果を表1に示す。各成分の測定の結果は次の通りである。腐植含量は3.71～4.70%を示した。リン酸含量は3.21～7.12P_2O_5mg/gを示し、土坑底部の試料で高い含量が得られた。特に、土偶下部の掘り方とB地点の最下層から採取された試料では顕著であった。カルシウム含量は0.27～1.98CaOmg/gを示した。A地点に比べて、B地点や土偶背面や土偶下部の掘り方で僅かに高い傾向にあるが、リン酸との相関は認められない。

(2) 脂肪酸分析

脂肪酸組成では、すべての試料においてパルミチン酸（C16）の割合が高く、次いでオレイン酸（C18：1）が多い。この他に、ミリスチン酸（C14）、パルミトレイン酸（C16：1）、ステアリン酸（C18）、リ

表1　土壌理化学分析結果

遺構名	採取地点	層位	深度(cm)	土性	土色	腐植(%)	P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)
第70号土坑	A	2層	0～5	LiC	10YR3/4 暗褐	4.45	3.71	0.44
			5～10	LiC	10YR4/3 にぶい黄褐	4.14	3.69	0.53
			10～15	LiC	10YR4/3 にぶい黄褐	3.71	3.24	0.70
		3層		LiC	10YR4/3 にぶい黄褐	4.30	4.97	0.27
	B	2層	5～10	LiC	10YR3/4 暗褐	4.13	3.31	1.35
			10～13	LiC	10YR3/3 暗褐	3.87	3.21	1.09
		3層		LiC	10YR3/3 暗褐	4.32	3.60	1.18
		最下層	床面	LiC	10YR3/4 暗褐	4.16	6.48	1.61
	土偶背面土1	掘り方		LiC	10YR3/3 暗褐	4.70	4.67	1.98
	下層	掘り方		LiC	10YR4/3 にぶい黄褐	4.67	7.12	1.41

注1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
注2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
LiC……軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

表2　脂質分析結果

種類	A				B				土偶背面土1掘り方	下層掘り方
	2層			3層	2層		3層	最下層床面		
試料番号	0－5cm	5－10cm	0－15cm		5－10cm	10－13cm	10－13cm			
脂肪酸組成										
ミリスチン酸（C14）	10.93	10.87	10.87	5.42	8.08	6.51	6.21	7.15	6.54	7.36
パルミチン酸（C16）	45.43	40.47	37.92	40.84	39.68	33.73	39.88	37.36	40.71	33.97
パルミトレイン酸（C16：1）	—	—	—	6.66	9.79	18.22	10.80	14.45	9.57	15.44
ステアリン酸（C18）	13.36	11.28	7.19	11.69	8.52	4.87	11.51	7.82	8.98	6.81
オレイン酸（C18：1）	21.40	25.19	27.69	22.25	24.54	22.73	17.85	22.26	22.01	24.74
リノール酸（C18：2）	4.42	12.19	16.33	7.81	9.40	11.80	7.84	9.08	5.18	9.10
γリノレン酸（C18：3）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
αリノレン酸（C18：3）	—	—	—	—	—	0.74	—	—	—	—
アラキジン酸（C20）	—	—	—	—	—	—	—	1.87	3.23	1.23
イコセン酸（C20：1）	—	—	—	—	—	0.75	0.89	—	0.66	0.95
アラキドン酸（C20：4）	—	—	—	—	—	—	0.74	—	—	—
ベヘン酸（C22）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ドコセン酸（C22：1 trans）	1.07	—	—	—	—	0.66	—	—	—	0.40
エルカ酸（C22：1 cis）	1.02	—	—	1.47	—	—	0.98	—	—	—
イコサペンタエン酸（C20：5）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
リグノセリン酸（C24）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
テトラコセン酸（C24：1）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ドコサヘキサエン酸（C22：6）	2.35	—	—	3.86	—	—	3.31	—	3.12	—
ステロール組成										
コプロスタノール	16.80	—	25.08	17.67	23.67	7.70	19.07	20.85	17.17	24.40
コレステロール	29.33	—	46.88	40.99	44.36	19.12	41.84		53.49	47.32
エルゴステロール	13.99	—	—	11.99	31.97	17.39	10.21	43.16	11.14	—
カンペステロール	5.90	—	—	15.06	—	26.37	15.15	—	6.90	—
スティグマステロール	12.20	—	—	7.84	—	11.76	5.57	—	—	—
シトステロール	21.78	—	28.04	6.45	—	17.46	8.16	35.99	11.29	28.28
分析試料の重量（g）	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

＊分析試料の重量は湿重量、"—" は未検出を示す。

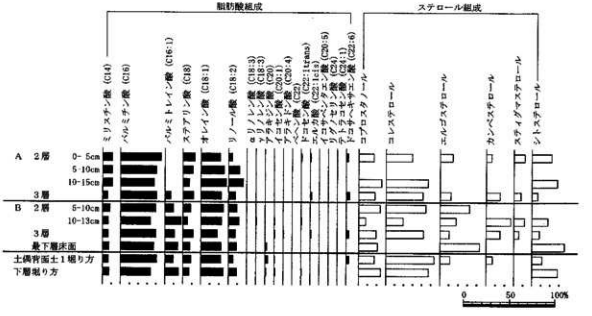


図2　脂肪酸・ステロール組成

ノール酸（C18：2）などが検出されるが、A地点の2層ではパルミトレイン酸（C16：1）が余くみられない。C20以上の脂肪酸はほとんど検出されず、アラキジン酸（C20）、ドコサヘキサエン酸（C22：6）が僅かに認められる程度であった。

ステロール組成では、A地点2層5-10cmを除く試料から検出されており、全体的にコレステロールの割合が高く、土坑底部およびその付近で高い傾向が認められた。この他に、コプロスタノール、エルゴステロール、カンペステロール、スティグマステロール、シトステロールなどが検出され、これらが多い試料では20～30%程度検出された。

4．考　察

分析を実施した各試料の腐植含量の平均測定値は4.25%を示した。各試料間の測定値のばらつきは小さく、また、ほぼ均質であることから、土壌腐植に由来するリン酸含量の富化の影響はほぼないと考えられる。

骨の主成分の一つであるカルシウムは、0.27～1.98CaO mg/gの値を示した。カルシウムが土壌中に普通に含まれる量、すなわち天然賦存量は、天然賦存量（土壌中に普通に含まれる量）が1～50CaO mg/gといわれており（藤貫，1979）、含量幅は大きい傾向にある。これは、カルシウムが土壌中で移動・拡散しやすいことによる。今回の測定値は、いずれの試料も天然賦存量の範囲内にあるが、試料間で測定値を比較すると、B地点最下層や仮面土偶が出土した4層で僅かに高い傾向が認められる。

リン酸含量は、最も低い測定値は3.21P_2O_5 mg/gであった。リン酸の天然賦存量ついては、これまでに多数の調査事例（川崎ほか，1991・天野ほか，1991・、Bowen，1983・、Bolt & Bruggenwert，1980）があり、これらによれば天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5 mg/g程度と推定される（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5 mg/gで統一している）。今回の試料のリン酸含量は、前述したように最低値が3.21P_2O_5 mg/gであり、いずれの試料も上記の天然賦存量の上限を上回る値であった。また、土壌腐植に由来するリン酸含量の富化の影響はほぼないと考えられるが、各試料間でリン酸含量のばらつきが大きく認められる。特に、B地点最下層や土偶下部の下層堀り方から採取した試料で高い測定値が得られていることから、土坑底部付近において外的要因によるリン酸の富化の可能性が示唆される。

脂肪酸組成、特にC18以下の脂肪酸は、全体的にパルミチン酸とオレイン酸が高い。これは長い年月の間にオレイン酸・リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するために、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物に由来すると推定されている（中野ほか，1993）。また、坂井・小林(1995)は、既存の基礎実験結果を検討し、熱や経年変化によりオレイン酸に対するパルミチン酸の割合が増加することなどから、解析の際に脂肪酸組成の経年変化について考慮する必要性を指摘している。これらのことから、今回検出されたC18以下の脂肪酸では、経年変化の中で分解されにくいものが多く残存していると考えられる。なお、オレイン酸とパルチミン酸は、動物油、植物油ともに多く含まれる脂肪酸であるとされるため（島薗，1988）、これだけで内容物の種類を検討することが難しい。

一方、C20以上の高級脂肪酸は、アラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸は動物の脳や神経に多く含まれる脂肪酸とされ（中野，1993）、これが検出されることにより動物の関与が推定できるとされている（中野，1995）。今回の分析結果では、アラキドン酸がわずかに検出される程度であったため、動物遺体等の存在を指摘できない。C18以下の脂肪酸組成では分解されにくいものが多く残存していると想定されることから、仮に動物質が埋納されていたとしても、C20以上の脂肪酸のほとんどは分解されている可能性が高く、脂肪酸の組成から埋納された種類を特定することは難しい。なお、脂肪酸を解析する際には、分析精度を考慮する

必要があり、図2上で右側に近い脂肪酸ほど、検出器に到達するまでに時間がかかる。このためピークの分解能や到達時間の誤差により、同定の信頼度が低くなる。今回の分析で僅かに検出されたドコサヘキサエン酸は、二重結合を多く持つ脂肪酸で分解しやすく不安定な脂肪酸であるため長期間残りにくい（坂井ほか，1996）とされている。そのため、測定誤差やこれと類似する到達時間を持った何らかの（脂肪酸ではない）脂溶性成分に由来する可能性もあり、その由来については今後の検討課題である。

ステロールは生物によって固有であり、コレステロールは動物に、エルゴステロールはキノコなどの菌類に、カンペステロール、スティグマステロール、シトステロールは植物にそれぞれ由来する（春原ほか，1987）。また、コプロスタノールはコレステロールが大腸菌によって分解されて生じるもので、動物の糞便中に多く認められるステロールとされる（中野，1995）。今回の分析結果では、A地点2層5～10cm・B地点最下層を除きコレステロールの割合が高く、コプロスタノールをあわせると70%程度検出される試料（A地点2層10～15cm、B地点5～10cm、上偶背面土1掘り方、下層掘り方）も認められた。化学的に安定である（中野，1993）ステロール組成の結果では、特に覆土下位でコレステロールの相対比が高いことから、土坑覆土下層付近に動物質の関与があったことが考えられる。

以上の結果、第70号土坑のリン酸含量・ステロール組成の産状から、本土坑覆土に動物質に由来する成分の影響を示唆することができる。特に、土坑覆土下部（3層）や土偶出土地点付近（上偶背面土1掘り方・下層掘り方）において顕著な特徴が認められることから、3層および4層堆積時に何らかが意化されたことが推測される。ただし、高いリン酸含量が得られたB地点最下層床面では、コレステロールが未検出であるなど検討課題も残ることから、今後さらに同様な分析調査例の蓄積や土壌理化学成分と脂肪酸・ステロール組成に関する分析調査を実施し、あらためて検証する必要がある。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28－36.

Bowen, H. J. M.（1983）「環境無機化学　－元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）Environmental Chemistry of the Elements］.

Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY］，p.235－236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23－27.

中野益男（1993）脂肪酸分析法．「第四紀試料研究法2　研究対象別分析法」，p.388－403，東京大学出版会.

中野益男（1995）脂肪酸分析の現状と課題．考古学ジャーナル，386，p.2－8

中野益男・福島道広・中野寛子・堀瀬雅子・長田正宏（1993）西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析「奈良国立文化財研究所学報52　西隆寺発掘調査報告書」，p.94－100，奈良国立文化財研究所.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」．156p.，博友社.

坂井良輔・小林正史（1995）脂肪酸分析の方法と問題点．考古学ジャーナル，386，p.9－16

坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1996）灯明皿の脂質分析．富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集

「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」，p.24－37，財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所．
島薗順雄（1988）標準栄養化学・生化学．205p.，医歯薬出版株式会社．
菅原龍幸・福沢美喜男・青柳康夫・大川博徳・小泉典子（1987）食品学総論．233p.，建帛社．

第VI章　調査の成果と課題

第１節　第70号土坑出土の大形土偶の出土状態について

はじめに

第70号土坑より出土した「仮面土偶」は、その出土遺構が集落内でどのような位置を占め、また、その出土状態が明確に把握された点に大きな資料的価値がある。そこで遺跡内での位置、土坑の構造、土偶の出土状況を再度確認し、土坑の性格と、「仮面土偶」について考えてみたい。

１．「仮面土偶」の出土した遺構の概要

第70号土坑の位置　第70号土坑は東側台地中央集落のほぼ中央部に位置している。この範囲は集落中央部の広場と見られる区域で、土坑が密集しこの中でも第70号土坑は、最も台地頂部に近い位置に占地する。第70号土坑周辺には軸線を同じくして同様な平面プランをもつ土坑が集中し、特に第94号土坑・第70号土坑・第59号土坑の３基が並列し、この並び方は特徴的である。また、この他の地点にも鉢被せの行われた楕円形土坑が３基並列している箇所もあり、土坑が主軸方向を同一にして限定された範囲に重複する様相は、土坑の構築位置の選定に一定の規範があったことを示すものと考えられる。

第70号土坑の構造　第70号土坑は東西方向に長軸を持つ長楕円形で、長さ2.01m、推定幅1.05mを測り、底面形も上面プランと同様で東西方向に長軸を持つ長楕円形で、長軸1.59m、幅0.77mを測る。この大きさは重複・隣接する第94号土坑（長軸2.34m、幅1.26m）、第59号土坑（長軸1.38m、幅0.84m）とほぼ同規模で、第70号土坑が突出して大きいといった傾向は窺えない。土坑の掘り方は北・東・西壁際が割合垂直に近い立ち上がりを有し、断面形は台形状を呈する。確認面よりの深さは45cmで、底面は緻密に底中央部が窪むが、全体的には平坦で堅緻な構造であり、この構造も重複・隣接する土坑と大きな差異が認められない。

この土坑の規模や構造は隣接する第94号土坑に類似し、長軸方向も南西－北東に揃い、一定の規範の中でこれらが作られた可能性が高い。また、集落中央土坑群の西寄りの位置にも後期前半同時期の３基の鉢被せ土坑が軸線を揃えて並列し、この状況も第70号土坑周辺の状況と類似し、墓域に於ける埋葬位置やその方法に一定の規範があったものと考える格好な材料となろう。

第70号土坑の土層状況と重複関係　第70号土坑の覆土は三層に分層され、全てが人為的に埋め戻した状態の褐色土である。特に坑底の第２層・３層はロームブロックを大量に含有する上層で、瞬時に埋め戻されたことが窺える。また、第94号土坑、第59号土坑も人為的に埋め戻された状態の褐色土であったが、これら土坑覆土のロームブロックの方が大粒でその含有量も多い。

重複・隣接する土坑の重複関係を整理すると、第70号土坑が第94号土坑の覆土を切って構築されている。第70号土坑と南側に接する第59号土坑との重複関係を直接探る手がかりはないが、第59号土坑の鉢被せに用いられていた堀之内２式期の浅鉢の文様構成が、やや第94号土坑より新しいと考えられる。以上を整理すると、古第94号土坑→新第70号土坑→第59号土坑と新旧関係を整理でき、堀之内２式期の間に第94号土坑、第70号土坑、第59号土坑と随時南側へ移動する形で構築されたと捉えることができる。

また、この並ぶように重複する状態に窮った見方をすれば、第94号土坑の南側脇覆土を第70号土坑が切り込んで重複するのに対し、第59号土坑が第70号土坑と重複せず隣接することを考えると、そのあり方に時間

差等を看取ることができ、第1段階の第94号土坑の構築と埋め戻しから若干の時間が経過し、その埋めた状況が曖昧となった時点に於いて第70号土坑が構築されたため、第1段階に構築された第94号土坑への第70号土坑の重複が生じたと捉えられる。これに対し第2段階の第70号土坑と隣接する第59号土坑の構築は、第70号土坑が構築された記憶が残っていた段階に、第59号土坑が前段階構築の土坑を壊さないように配慮の結果として隣接状況が生まれたものと仮定することができ、このことは、土坑構築の時間差が均一的に経過したものでなかったことを示し、若干の時間的なずれを持ってこの地が土坑構築の適地として認識され利用された結果として捉えることができよう。

第70号土坑の性格　第70号土坑の性格を直接窺えるような痕跡は得られてはいないが、土坑の構造や土層状況・遺物の出土状態、重複・隣接する鉢被葬のなされた土坑との比較より、第70号土坑は墓壙的な色彩が強いものと言える。また、土坑内の土壌分析の結果に於いても、坑底部最下層、土偶埋置坑下層からリン酸含有の富化や、コレステロールの検出がなされていることを積極的に評価すると、本土坑が墓壙としての性格を有していたものと捉えてもよいであろう。

2.「仮面土偶」の出土状況の概要

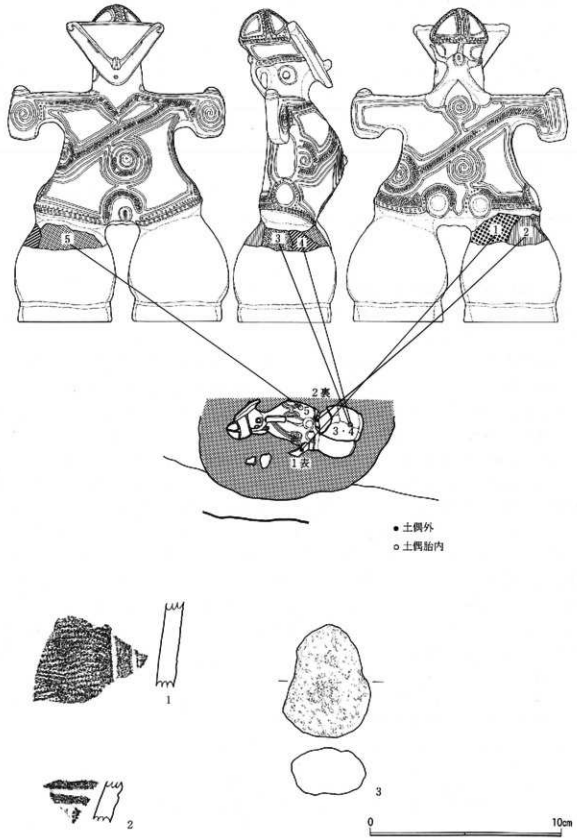
「仮面土偶」の埋置状態　土坑南西側壁際隅に寄った位置に、第2層より穿たれた径50cmの平面形が円形の掘り方内に、頭部を西に脚部を東、顔面を北側に向けた側臥の状態で発見された。頭部は坑底から18cm、左脚が3cm浮いた頭部が高いやや斜状状態で横たえられており、ちょうど土偶仮面部が土坑内側を向く形となる。このような状態は自然埋没とは考えられず、小坑内の覆土（第4層）の状態からも人為的に「仮面土偶」を側臥状に埋置したものと捉えられる。

また、「仮面土偶」を埋置した小坑上に第70号土坑を完全に埋め戻した土層（第1層）が覆っていた点を考えると、「仮面土偶」を埋置した小坑は第70号土坑埋め戻しと同時に埋められたものと考えられ、第70号土坑覆土内に後から「仮面土偶」を埋め込んだものではない。

「仮面土偶」と供伴した遺物　「仮面土偶」以外第70号土坑内に伴うような遺物の出土は認められず、唯一「仮面土偶」の埋められていた小坑内より、「仮面土偶」脚部上半破片①が土偶臀部上、軽石、中期終末土器片が土偶背面側より検出されている。また、微量ではあるが小坑内覆土の下半身周辺から1mm以下の赤色塗料微粉が確認されている。この土器片は重複する第85号土坑覆土内の土器と同一個体であり、第85号土坑に掘り込む際混入したものであろう。これらの遺物は、土偶埋置小坑内に埋土と一緒に埋められたと考えられるが、脚部上半破片は臀部付近に置かれていることより、完全な姿をかなり意識して、当該箇所へ破片を置いたものと考えられる。背面側の軽石についても、成形の痕跡は認められないが手頃な大きさで、形状も楕円形で整っていることから、単に周辺の軽石が埋土に混在したと考えるよりもある意図的に軽石が埋められた可能性が高く、ある意味に於いて軽石は、仮器としての性格が付されている可能性もある。

3.「仮面土偶」の破片接合関係からみた「仮面土偶」の壊され方と埋め方

「仮面土偶」の破損状況　発見当初右脚だけが本体から離れた形で検出された。そのために当初は土圧等による脚部の脱離を考えたが、右脚部付け根部と右脚部の完全な接合には破片が不足し、単純に破損したものでないことがわかった。また、右脚脚部付け根部分の破損状況を観察すると、右脚の破損面は製作時の輪積み痕跡を残し、脚部付け根部分の破損は一方向からの力により折り取ったような痕跡と剥離的な痕跡が認められ、これらの痕跡からも自然破損ではなく、人為的に壊されたものと考えられる。



第25図 「仮面土偶」の出土状況と伴出遺物

「仮面土偶」右脚部破片の出土状況　「仮面土偶」右脚部破片出土位置を確認すると、右脚部を取り外した際に外れた土偶脚部付け根部分の破片①は、土偶臀部に浮いたような形で出土している。右脚部付け根の内部には、脚部付け根部分破片①と接合する脚部上半破片②が、裏向きに蓋をしたような状態で検出された。また、修理接合時に土偶胎内右腹部より脚部上半破片⑤、外れていた右脚内より脚部破片③・④が検出され、これら5点の破片全てが接合し右脚部が完全な形に復原できた。

このような接合関係や、はずれていた右脚部の出土時の遺存状況が、ただ脱離して原位置より検出されたというような単純な状態ではなく、右脚部の遺存状態が約90度回転していた点を考慮すると、次のような手順をもって土偶が埋置されたものと想定することができる。まず、埋置時に土偶は人為的に壊され、破片①から⑤ができる。脚部の付け根破片③・④は右脚内に、破片⑤は土偶胎内に詰め、内容物が出ないように破片②を蓋として用い穴を塞いでいる。破片①は小坑埋め戻しの際に、臀部の範囲に埋め土と共に埋められたことが想定できよう。

4.「仮面土偶」の埋置方法の復原

埋置方法の復原　「仮面土偶」の破片の出土状況を手がかりに、「仮面土偶」の埋置方法の手順を復原すると、次のように考えられる。

①両脚で立っている大形土偶（脚裏の擦痕）＜当初は完形で立たせてあった＞→②第70号土坑の構築＜墓壙と同様な構造＞→③土坑内の一部埋め戻し（Ⅱ・Ⅲ層の人為的な埋め戻し）→④土偶埋置用の小坑を穿つ＜土坑内南西隅＞→⑤土偶の右脚を取り外す（人為的な破損状況）＜土偶への所作Ⅰ＞→⑥破片の…部を胎内・右脚内部に詰め込み、その後胎内の開口部へ破片を用い蓋とする（破片の出土状況）＜土偶への所作Ⅱ＞→⑦体部を倒臥状態で埋置し、一部埋め戻しながら足下には赤色塗彩物、臀部に付け根部破片、背部に軽石等を置く（下半身範囲から赤色塗料残滓、臀部から付け根部破片、背部から軽石等の検出）＜土偶への所作Ⅲ＞→⑧埋置された体部に添える形で右脚を置き完全に埋め戻す（右脚が90度回転）＜土偶への所作Ⅳ＞→⑨土坑の完全な埋め戻し（Ⅰ層の人為的な埋め戻し）＜土坑全体の埋め戻し＞

以上のように「仮面土偶」を埋置する手順を所作Ⅰから所作Ⅳにまとめたが、完全な姿のものを人為的に破損し、この胎内に何かを詰め込み、再び旧状に復す一連を「仮面土偶」に対する祭式と捉えることができ、一般的な土偶の人為的に壊すだけの祭式とはやや異なり、破壊から再生までの一連性を持つ点に特徴を見いだすことができよう。また、第70号土坑全体からの観点から考えると、所作Ⅰから所作Ⅳまでの「仮面土偶」埋置祭式の所作は、第70号土坑祭式全体の一部として捉えることができ、葬制と「仮面土偶」埋置祭式が密接な関連性を有していたと考えることができ、下記のように一連の流れを整理できる。

完形土偶→（破壊）――→（副葬準備）――→（副葬）
・脚部取り外し　・胎内への有機物詰　・銅臥、脚部復旧
・副葬孔掘り　・赤色塗布物供伴

墓壙構築→（死者埋葬）――――→（墓壙完全埋め戻し）

5．中ツ原遺跡出土「仮面土偶」の提起するもの

発見の意義と課題　出土状況と遺構に伴っていることが的確に把握され、なおかつ集落内での位置が

明確になっている土偶は数少ない。今回検出された「仮面土偶」はそういった意味に於いても超一級の資料といえ、また、土偶出土状態を細かに観察し得た貴重な類例と言える。上記した各項目からのキーワードの内「仮面土偶」の提起する問題について考えてみたい。

集落内中央部の墓域からの出土、鉢被葬のなされる土坑との並列、埋められていた土坑の構造が墓用のものと同様な点などから、「仮面土偶」を墓の副葬品と考えることができるが、直接的な資料を得ることはできなかった。しかし、間接的な事象として、①土坑の人為的埋め戻しと同時に土偶が埋められている点。②土偶の埋置位置が土坑中央部ではなく、隅に寄って土坑中央部を向いた側臥で埋置され、あえて土坑中央部を避けて土偶を埋置している点に着目すると、土坑中央部に埋葬された者に添えたものと捉えられ、墓壙への副葬と捉えることができよう。また、土偶が埋置時に右脚の取り外し、胎内への内容物の詰め込み、赤色塗彩物の添え物を行う等の所作、土偶埋置祭式を経ている点に重要な意味を有し、単に完形品を副葬品として添えただけの意味とは異なった、何らかの思惟の過程を経て埋置されたものと捉えることができ、土偶の製作－安置－破壊－埋置・再生と土偶の一連祭式と、死者埋葬の再生観の間の何らかの関連性や、供儀的な意味も含めて「仮面土偶」の埋置について理解すべきであろう。

土偶への所作に意味を持たせると、墓壙内被葬者の性格や、当時の埋葬習俗を考える上に興味深いものがあり、死者の埋葬と土偶への一連の所作に何らかの関連性を考えることができよう。また、周囲に造られている鉢被葬のなされた墓壙との差異と関連性を、どのように捉えるかに問題がある。墓壙への土偶の副葬といった観点を考えると、第70号土坑と鉢被葬の墓壙と同列同意として捉えることはできず、多様な葬制の存在や、被葬者の性格等を考えるべきであろう。

墓に副葬される土偶　中部地方に於ける後期土偶の出土状態で、明確な遺構に伴う資料は皆無に等しく、今回の中ッ原遺跡の例と、茅野市大桜遺跡第1688号土坑の例に限定される。大桜遺跡の場合は、中央広場を囲む外縁帯の土坑群内に位置する長軸104cm、短軸86cm、深さ37cmの割合小振りの土坑覆土内より頭部・腕部欠損の遺存高13cmの「仮面土偶」体型の土偶が出土している。この土坑を直接墓壙と示す要件はないが、構築位置・土坑形状や土層状態等を考えると、この例も土坑に人為的に埋められたもの捉えることができ、類例は少ないもののこの時期に、土坑に人為的に埋められる土偶が存在することがわかる。

墓壙に副葬される土偶については、北海道千歳市美々４遺跡、恵庭市柏木Ｂ遺跡、根室市初田牛20遺跡等北海道南部に於いて後期後半から晩期にかけて土偶が副葬される類例が指摘(文献14)されている。今回の例も時期や地域こそ異なるものの同様な類例として取り扱え、共通点を見いだすと、概して墓壙に副葬される土偶は、大形でほぼ完形である点に共通性を見いだすことができる。

このような所謂上位土偶の副葬について「副葬される土偶」を集成分析した設楽氏(文献15)は、他界観が明確化していく中で、再生観を背景に始まったものと想定され、土偶を副葬する土坑墓が他の副葬品をもつ土坑墓より少ない点について「上位土偶を扱うシャーマンのような、集団的儀礼の限られた執行者個人の墓に入れられたことがその理由として考えられる。」としている。中ッ原遺跡の例から即このような見解を導き出すことは、遺跡内に点在する他の土坑との関係や集落内での詳細な分析が至っていないため難しい面を有するが、数段階の所作を経て土偶が埋置されている点などや、出土例の希少性、構築位置等を考えると、やはり特定の目的をもって副葬され、また、土偶副葬の希少性を考えると、被葬者も鉢被葬のなされた墓壙の被葬者とその性格が異なっていたものと考えられ、葬制差に被葬者の階層性を認めることができようか。

集落内での「仮面土偶」出土土坑の位置　「仮面土偶」の出土した土坑は、環状集落の中央部に展開する土坑群の中央部に占地している。「仮面土偶」の時期後期前半堀之内２式期の集落は、大きく西側台地先端

部と台地中央部の二群に分かれるが、台地中央部を詳細に分析すると、いくつかの小環の重なりから大きな群が構成されていることがわかる。これらの配置は完全な環状を呈してはいないが、中期からの住居範囲を逸脱せず伝統的な範囲に占地している。住居址に囲まれた中央広場は、中期からの集落の観点で考えると、伝統的な中央広場、言い換えれば伝統的な墓域と言え、この範囲が特別な意味を有していたものと考えることができ、なおかつ中期よりの伝統的な場を後期前半に継続して使われていた点から、中期の伝統な場の規範が解体していなかったものと考えることができ、後期になり新たなる発想の基に集落の空間構成が展開したものではないことが理解できる。

「仮面土偶」出土土坑を考える上で、鉢被せの行われた土坑の存在は重要であろう。後期前半堀之内２式期内で鉢被葬の行われている土坑は８基が検出されている。これらをそのまとまりより分布を概観すると、Ａグループ－第94号・70号・59号土坑、Ｂグループ－第177号・150号・163号土坑、Ｃグループ－第814号・823号・827号土坑が認められる。これらは一定の範囲に並列するように検出されている点や、長軸線が東西方向に、頭部（鉢被せ）の位置も西側に揃っていることより、構築の場や埋葬方向にある種の規範に沿って構築されたものと考えられる。並列する土坑が大きく重複せず接するような状況で構築されている点を時間的な視点から考えると、以前に構築されていた墓壙の位置が完全に忘れ去られない時点に於いて旧墓壙位置を若干外し、近辺に新たに墓壙が構築された結果、隣接した重複状況が生まれたものと考えられ、一定の占有グループごとに墓域を形成していたものと捉えることができ、その規範が厳格に守られていたものと捉えられる。また、土坑のグルーピングより堀之内２式期にこの地が最低でも３集団により利用されていたことわかる。しかし、このような鉢被せのなされた土坑は、普遍的に認められるわけではなく、限定された場に一定の規範を持って構築されていることから、集団内において一定の場の選択がなされていたと考えることができよう。中でも「仮面土偶」を埋置した群はその位置から考えると、中心的な位置を占めていたものと考えられる。また、Ａグループ、Ｂグループの重複関係からみると、堀之内２式期新段階の小期内で３回にわたる構築が行われており、このような短期間での構築をどのように捉えることができようか。　（守矢昌文）

第２節　第70号土坑出土大形土偶の製作法について

１.「仮面土偶」の製作法について

「仮面土偶」の製作法の調査　　土偶は全長34㎝で腕を大きく横に広げ、脚を踏ん張り大きく腹を突き出した形の立像形である。脚部・胴部・首部・頭部が中空構造となる構造である。ほぼ完形に近い形で検出されたために、破損部等の観察から内部等の製作法を窺い知ることはできなかったために、復原時にＸ線ＣＴ写真やＣＲ写真撮影、胎内小形カメラ撮影による情報を基に行った。放射線写真を用いて土偶の製作法復原の情報とする方法の有効性が指摘され、今回の実施においても有効性が確認され、特に中空構造の製作法を探る手だてとして、必要不可欠な調査法であると言える。

「仮面土偶」の外的観察　　焼成は良好堅緻で、丹念なヘラ磨き整形がなされ独特の光沢を放ち、浅鉢や注口土器の焼成・整形と類似している。特に光沢を持つほどに研磨されている黒色研磨の技法は後期前半堀之内２式期以降に多用され、注意したい整形技法である。また、胎土の肉眼観察では、１㎜以下の石英粒子、１㎜大長石粒を均一に含む上質な粘土を用い、この胎土も一般的な土器よりも上質な傾向を示し、浅鉢や注口土器に用いられている胎土に類似し、これらの製作集団等との関連性を窺うことができよう。

施文は先端が丸みを帯びる棒状工具による割合浅めの沈線区画と渦巻文、区画内には撚りの強い割合細いLR単節縄文が施文され、その構成は細い帯状縄文構成となる。この上に串状工具による細い刺突がなされ

ている。詳細に施文順序を観察すると、沈線区画内に縄文施文後、無文部は研磨処理がなされる。

脚裏には網代痕が施文され、この両脚裏の側縁部にはスレによる擦痕や、脚底側辺に小剥落が認められ、土偶が立てられていた際等にこのような痕跡が付いたものと推測できる。また、左脚裏左右端には相対する位置に人為的と考えられる剥離痕が認められ、この剥離痕がなぜ付いたか理置以前の「仮面土偶」の祭式を窺い知る痕跡と考えることができよう。

「仮面土偶」の時期について　本土偶と同類の「仮面土偶」について中部高地の後期土偶を集成した結果を持って宮下氏(文献16)は、新町タイプと一括したグループを加曽利Ｂ１式期に帰属させているが、その根拠は示されてはおらず、明確とはなってはいない。ハート形土偶を類型化し新町タイプを提唱した樋木氏(文献17)によると、同タイプは磨消縄文を用いた区画等のモチーフより堀之内２式の新しい段階、あるいは加曽利Ｂ式初頭に位置付けられている。山梨県内の土偶集成に基づき各時期の土偶について概観した小野氏(文献18)は、後田遺跡の土偶について体部への施文状況から堀之内２式期と位置付け、この形態の土偶は本地域の堀之内２式段階の定型的な土偶であると思われるとしている。このように各人により微妙にその帰属時期が異なっているが、後期前半堀之内２式期内に帰属するものであろう。

中ッ原遺跡の土偶の施文から時期を探ると、胴部施文の縄文施文のなされた幅の狭い帯状縄文や櫛状沈線構成、沈線区画構成や、端部に刺突をなす沈線、若干幅があり浅めで先端が丸みを帯びる棒状工具により施文される２本単位沈線等より後期前半堀之内２式期新段階に比定できる。重複する第94号土坑の浅鉢との関係から検討すると、第94号土坑出土の浅鉢は、体部が直線上に大きく開く浅鉢器形で体部が無文化し、割合幅広の段状肥厚化する内口縁部に、浅い沈線が数条巡り、口縁部に貼付される４単位の環状突起やその下部に施文される弧状沈線から堀之内２式期新段階に帰属できる。また、隣接する第54号土坑出土の浅鉢も、内面への沈線区画や口縁部への２単位の重円文状小突起、２単位の小突起から堀之内２式新段階に属し、これらの点からも本土偶は堀之内２式期の新しい段階に帰属させることが可能である。

Ｘ線ＣＴ写真・ＣＲ写真、胎内小形カメラ観察による製作法の復原　放射線写真を用い「仮面土偶」の製作法を探ると、中空構造を基本的な構造としている。大きく頭部・首部・腕部・体部・脚部の五つのパーツより構成されている。脚部裏は円盤状の粘土板を用い、中央部に穿孔されている径1.2cmの小孔は焼成前に内側から棒状工具により開けられ、この基盤上に幅４cmの粘土帯が３段輪積みがされる。この手法は小形土器の製作法を彷彿させる。内部の整形は割合丹念な横位ナデ整形がなされ、脚底と輪積み部との接合部は凝位ナデオサエ整形が施されている。脚部と体部下半（臀部）との接合部は、指頭による押さえ整形がなされているが、押さえた部分のナデ整形は脚部内部ほど行われてはおらず、接合痕を残す部分も認められる。体部の製作は放射線写真や小形カメラ観察によると、幅3.5cm前後の粘土帯が５段輪積みされ、その技法は脚部と同様な製作法となっている。内部の整形は輪積み接合部を押さえた後、雑な横位ナデ整形を施すが、胎内小形カメラ観察によるとそのナデ整形は割合雑である。腕部は粘土紐をＵ字形に束ね体部に接合する。首部は体部から肩にかけて窄まる部分に円筒状のパーツをソケットし、首部を形作る。首部の接合部はあまり丹念な整形はなされてはいない。なお、この首部のパーツは完全な円筒状ではなく、顔面部分が開口しこの部分に平扣な逆三角形の粘土板が貼付される。頭部はこの首部パーツの上端部をやや丸みを持たせ広げ、これに半球状の頭頂部を接合し中央部に穿孔する。このような製作技法は一般的な袋物構造の土器と大きな差異がなく、土偶独自の製作法とは言い難い。

本土偶と同類型の新町(文献19)泉水遺跡、後田(文献20)遺跡土偶の製作法についての考察がなされ、その製作法も脚部・体部は輪積み成形により製作され、頸部・頭部は粘土塊を芯とし、この点に相違を観ることができる。しかし、

頭頂部からの穿孔や首部への横位貫通孔等には共通性が認められ、この構造は必要最低限の具備事項であったものと捉えることができよう。

「仮面土偶」の中空構造について　中空構造を持つ土偶は中期前半から中部高地を中心に認められ、山梨県櫛形町鋳物師屋遺跡出土の土偶に代表されるような円錐構造のものに取り入れられる。また、長野県飯山市深沢遺跡、新潟県津南町上野遺跡等（以上中期前半）、糸魚川市長者ヶ原遺跡、中ッ原遺跡（以上中期後半）等に類例を見ることができ、円錐形のものを除くと、中空構造を有する土偶は概して大形土偶に用いられる傾向が認められるが、一般的な土偶製作法とは成りえていない。これらの土偶と後期前半製作の「仮面土偶」と直接的なつながりを認めることはできないが、製作技法からみると一般的な中実粘土ブロック構造で製作され、壊されることを前提に製作されていた土偶とは異なった観点から製作されたものと捉えることができ、中空構造も注目すべき点である。

後期前半に於いて中空構造の土偶は、関東地方に見られる円筒形土偶の他に「仮面土偶」の一群や長野県富士見町大花遺跡、山口村川原田Ｂ遺跡、棚畑遺跡等が認められ、中部地方の後期前半の土偶の一隅に中空構造を採る土偶群が占めていることがわかる。また、後期前半の中実土偶内には大桜遺跡や上ノ原遺跡等の類例に見られるように、体部から臀部にかけての貫通孔、足裏への貫通孔が設けられている上偶も認められ、その貫通状況やその位置から、中空構造を模倣して製作されたものと捉えられる。

中空構造の製作理由として後期前半に製作される中部地方の一部から関東地方にみられる筒形土偶との関連性も考慮すべきであろう。大形規格と中空構造は製作の観点からは難しい技術と考えられるが、あえてこのような方法を採った背景について、焼成時の破裂等の防止にかかる中空化）の他に、人体構造を背景とした発想（胎内イメージ等）があったものと考えられ、本遺跡と同様な類型の山梨県韮崎市後田遺跡の土偶について山下氏（文献20）は、中空構造を採り腹部を膨らませ下腹部を具備している点などから、女性のみがもつ妊娠・出産という神秘的な能力を表現しているのではないかと考えている。また、胎内への内容物の詰め込みなども中空構造を意識し、内蔵物を詰めることを目的化した結果とも考えることができよう。

「仮面土偶」の類例とその分布　北関東地方から南東北にかけて後期前半ハート形土偶と総称される土偶が出現し、その代表として群馬県郷原遺跡の土偶が挙げられている。本遺跡の土偶もその姿は一見すると顔面の突出する状態、Ｏ脚状の表現、十字形に広げる腕等の造形はこれらの群に類似するが、大きな差異として体部等の製作法が中空でふくよかに作られている点が挙げられる。腹部の誇張した張り出し表現は本土偶の特徴といえ、体部が面構成となる郷原遺跡等のハート形土偶とは異なる。「仮面土偶」と同類型の土偶は、植木氏（文献17）によりハート形土偶の一類型として長野県辰野町新町泉水遺跡を標式とした新町タイプが設定されている。

「仮面土偶」と同類の新町タイプの土偶は、長野県辰野町新町泉水遺跡、山梨県韮崎市後田遺跡より出土している。また、全体像は把握しがたいが、同類型と思われる土偶は、長野県明科町北村遺跡、戸倉町円光寺坊遺跡、山梨県須玉町上ノ原遺跡、明野町清水端遺跡等に認められ、中部地方に分布する特徴的な土偶と言え、北関東から南東北に分布するハート形土偶とは一線を画する一群と捉えることができよう。

仮面表現の差異や全体のプロポーション、体部の文様構成、脚部への施文の有無等から、新町タイプ土偶は若干の時間幅の中で形態の変遷があったものと考えることができ、諸要素を検討すると新町泉水遺跡の資料から後田遺跡を経て中ッ原遺跡の「仮面土偶」への変遷を考えることができよう。　（守矢昌文）

第３節　縄文時代後期前半の中ッ原遺跡の様相

１．中ッ原遺跡の縄文時代後期前半の住居址の概要

住居址の構造　　中ッ原遺跡で平成４年度（第Ⅰ次）、平成11年度（第Ⅱ次）、平成12年度（第Ⅲ次）、平成13年度（第Ⅳ次）の４回に亘る調査に於いて縄文時代後期の住居址は23ヶ所を数えるが、ほとんどが重複関係を有し、単独で検出されたものは希で７ヶ所を数えるに過ぎないが、遺構の遺存状況が悪く完全にその様相を把握し得たものは少ない。これらの住居から住居構造の諸属性（平面形・規模・主柱穴配置・主軸方向・炉址）について検討を加えてみたい。

住居址の平面プラン　　検出された住居址で平面プランの全容が検出された住居址は、第Ⅲ次第44号住居址だけであり、この類例より推定すると不整円形を基調とすると考えられる。また、主柱穴が円形に配列するものもその柱穴配列から推定すると、入り口部がややつぶれ気味の不整円形となる傾向が窺える。

周礫・敷石　　壁際よりやや内側範囲に巡る主柱穴を繋ぐように礫が巡る（周礫）住居址が４、床面に敷石がなされている住居址が１検出されている。周礫が巡る住居址は特徴的で、第Ⅲ次第59号・第Ⅳ次第90号のように楕円形礫を選択し、主柱穴よりやや内部に長手に並べ数段積む構造が認められた。また、第Ⅳ次104号・118号住居址のように６cm大の割合小形の礫を配しているものがあるが、構成される礫が小粒である点などを加味すると、前者の周礫とは区別すべきであろう。なお、第Ⅲ次第59号・第Ⅳ次第90号住居址のような周礫については石井氏（文献21）の述べるところの周堤礫とは構築位置や構造等に於いて異なるものであるが、石を用い垣根状に積み上げるその様子には共通するものがある。

敷石が認められている住居址は１であるが、全容の把握されている住居址はない。中でも遺存状況の良好な第Ⅲ次第56号住居址の例から見ると平石を全面に敷き詰める構造となるものであろう。なお、第Ⅲ次第56号住居址は規模的に他の住居址より小形で、同様な小形円形敷石住居址として新井下遺跡・神田原Ａ遺跡等でも認められている。

主柱穴配列　　主柱穴配列が的確に把握されている住居址は、８ヶ所でこれらの事例からみると、複数本の主柱穴が壁際に沿った形で巡る構造が基本となり、入り口部と考えられる位置に規模的に大きい柱穴を対に配する。この柱穴間の中点から炉址を通して奥まった位置に棟持ち柱に関わると思われる柱穴が作られ、柱穴間を結ぶと７角形を呈する構造が主体となる。この柱穴配列より上屋構造を類推すると、入口―奥壁間が長い不整楕円形プランを想定することができる。柱の建て替えに伴う柱穴の重複が認められるが、炉址を中心に同心円状に拡張するものは少なく、同位置若しくは近接位置に於いて重複するものがほとんどで、面積的に大きな拡張とまでは至ってはいない。

市域に於ける後期前半の住居址とその主柱穴配列について比較すると、主柱穴配列が６角形構造のもの－Ａ群と、６角形の変形的な10角形のもの－Ｂ群が認められ、Ｂ群が主体を占める。時期的な分析を踏まえていないため詳細なことは述べられないが、堀之内式期の普遍的な主柱穴配列類型としてＢ類を捉えることができよう。

主軸方向と入口部　　入口部と思われる対柱穴の検出から主軸方向が明確に捉えられた住居址は８ヶ所で、それによると南－北方向を基本とする群が主体を占める。これを西側台地先端グループの集落形で概観すると、南側斜面に位置する住居址は南－北方向を主軸とし入口部を南側に配する住居址が主体を占め、住居址が孤状に配される場合中央広場を意識して、集落外側を向けた入口配置を採る集落景観が窺える。

入口部に特異な施設を設けるものは見受けられないが、特徴的な施設として対柱穴を挙げることができる。

主柱穴より規模が大きく深い柱穴が並列している。この対柱穴は第Ⅱ次第８号・第15号住居址のように楕円形プランの柱穴が縦位に並び垂れ下がる類型と、第Ⅲ次49号住居址のように楕円形プランの柱穴が横並びとなる類型が認められる。第Ⅲ次49号住居址の場合対柱穴に連結する形で周溝状の溝が外側に検出され別の対柱穴と連結する形を呈し、この部分が入口部の張り出し施設となる。また、第Ⅲ次49号住居址の対柱穴を構成する第296号土坑の東側には無文深鉢を正位に埋設した埋甕状の遺構が検出されている。埋設されていた土器の時期から本址に伴うと考えられるが、埋設位置が輪線から外れる点や時期的な問題を考えると通例の埋甕とは考えられず、特異な遺構と取り扱うこともできようか。

炉址の構造　縄文時代後期前半に帰属する住居址で、炉址の構造が把握されているものは12ヶ所を数える。この数には石囲いや埋設土器等が取り除かれ焼土しか検出できなかったものも含まれている。炉址の構造が明確となった住居址は10ヶ所でそれによると、石囲い構造を一般的なものとする。石囲いは小形の方形プランに組まれている。各辺に１、２個の扁平な安山岩礫を立てるように箱状に組み、石組の上辺をほぼ水平に揃えるために炉石素材礫を半割するなどの調整を加えている。なお、石組間に詰め石などのなされているものは見受けられない。この石囲い内全てに土器が埋設され、埋設土器は深鉢を正位に炉址中央部に埋設し、底部の遺存するものが主体を占める。また、複数の個体を入れ子状にしているものも数例認められる。炉址の構築されている住居址内での位置は、ほぼ中央に構築されている。中期後半曽利Ⅲ式期以降の炉址が住居址奥壁側に寄り住居址空間割の画期があったことが指摘されているが、後期前半に入り再度住居址構造に変化が生じたことによる変化と捉えられる。

２．中ッ原遺跡の縄文時代後期前半の集落構成

縄文後期後半の住居址分布　後期後半の住居址は調査区内と昭和61年市道拡幅工事時調査、平成４年度の第Ⅰ次調査も含めて検討すると、大きく西側台地先端を取り囲むように環状に展開するＡ群、東側台地中央部の群に大別できるが、東側台地中央部の群は遺構の重複が著しく、特に北側斜面部の整理・分析はなされていないが、容易に把握された住居址の分布より推測すると、大きく３群（Ｂ～Ｄ群）より構成されている。一見住居址の分布は南側斜面を中心に分布するが、北側斜面から昭和61年市道拡幅工事時調査に、堀之内２式期新段階の竪穴住居址が検出されていることを踏まえると、南北辺斜面に住居址が分布しているように見えるが、第Ⅰ次調査時に検出された調査区西側に分布する住居址群や、第Ⅲ次第49号・67号住居址の位置から考えると、台地頂部の中央広場を囲むように環状に住居址が分布するものと捉えられ、Ｂ～Ｄ群は連環状を呈すると考えられ、その分布は中期の住居址分布と大きな変化は認められない。

住居址分布内で住居址類型による大きな偏在性は認められず、各類型の住居址が混在する形で住居址群を構成しているようにも見えるが、強いて傾向を見れば西側台地先端部では敷石・周礫構造を有する住居址は見られず、柱穴が周囲を巡る住居址が主体を占める。また、台地中央部に於いては周礫構造を有する住居址が、台地南縁辺斜面部で最も弛みがあり、谷部から台地上への経路となり得る地形上に集中する傾向が窺える。このような周礫構造を持つ住居址が南側斜面に偏在し構築される例は聖石遺跡でも見られる。

このような周礫構造の住居址に類似する構造を持つ周堤礫を有する住居址について石井氏は、「長」的なリーダーの居住を想定している。限定された位置に構築されている点、他の住居址よりも石積み等に労力がかかり特異な構造である点などを考慮すると、周礫構造の住居址もやや通常的な住居址とは性格が異なるものと考えることができ、やはり周堤礫構造の住居址と同様な性格のものとして捉えることができようか。このような特定の住居址が集落内に偏在する傾向は中期後半では認められなかった現象で、後期前半の新たな

現象として捉えることができる。

3．八ヶ岳西南麓の縄文時代後期前半の遺跡

縄文時代後期前半の遺跡の分布　八ヶ岳西南麓に立地する多くの遺跡は縄文時代中期に帰属するものであり、縄文時代後期になると遺跡数は減少する傾向が指摘されている。近年大規模な開発事業により多くの遺跡が調査され、その様相も徐々に変化しつつある。特に後期前半の遺跡数やその内容は、従来考えられた傾向とは若干異なり、かなり複雑で多岐に亘ることが判明し、特に今回の「仮面土偶」の発見は、八ヶ岳西南麓の縄文時代後期前半の様相を再考する原点となろう。

現在市域で登録されている縄文時代の遺跡数は208ヶ所を数え、この内の約80%、168ヶ所が中期に帰属する遺跡である。後期の遺跡は約28%の58ヶ所で、そのほとんどは中期の遺跡と重複する傾向で、後期だけの遺跡は見られない。遺跡の分布域も中期と大きな差異は認められないが、中期が八ヶ岳西南麓全体に拡散的に分布するのに対して、後期では遺跡がある程度のまとまりを持ち点在するが、その密度は中期に比較して疎の状態を示している。

縄文時代後期前半の遺跡の様相　市域に於ける後期前半の遺跡の様相を第1表に示した。これによると後期前半の遺跡には、住居址や土坑等により構成される集落址と、遺物の散布が認められるだけの遺跡が認められる。

後期前半集落址の場合中期集落のように数十軒単位の大規模なものは見られず、数軒単位の割合コンパクトにまとまり、住居址の他に方形柱穴列・土坑・集石・配石のある程度様々な遺構より構成されている例が一般的であるが、周礫構造を有する住居址の認められる遺跡は中ッ原遺跡・聖石遺跡の2ヶ所で、これらは後期前半の集落の中では割合規模の大きな長期継続の遺跡として捉えられ、遺跡の求心的な力とこのような特異な住居址の存在、遺跡規模・遺跡の継続性等の間には何らかの関連性があったもの推測できる。

時期的な継続性をみると、称名寺式期から加曽利B1式期以降までのように4型式以上の長期継続－Aグループが8ヶ所、称名寺式期から堀之内2式期までを中心とし、若干の加曽利B1式期が混在する中期継続－Bグループ3ヶ所、称名寺式期から堀之内2式期までの継続－Cグループ7ヶ所、称名寺式期から堀之内1式期までしか継続しない－Dグループ10ヶ所、短期しか認められない－Eグループ25ヶ所が認められる。地理的立地よりAグループは蓼ヶ峰南麓、守屋山麓に偏在する傾向が認められ、八ヶ岳西南麓に立地するものは堀之内2式期までは継続するが、その後消滅する。また、遺物だけで遺構の検出されない散布地的な遺跡は堀之内1式期に多出する傾向にある。

このような中で中ッ原遺跡のあり方は、八ヶ岳西南麓に位置する後期の遺跡の様相と異なる点を看取することができる。第1として継続時期の問題で、通常八ヶ岳西南麓に於ける後期の遺跡の継続パターンはC・D・Eグループが主体を占めるのに対して中ッ原遺跡の場合中期継続のBグループとなる点に特徴がある。本遺跡と同様な傾向の遺跡は、聖石遺跡・茅野和田遺跡のみで市域の八ヶ岳西南麓に於いては希な例である。中期に八ヶ岳西南麓に拡散増大した集落分布は、後期前半で徐々に減少し堀之内2式期を境に凋落の一途をたどる傾向が認められる中、希薄ではあるが後期中葉加曽利B1式期まで生活の痕跡が残る現象が、如何なる要因に起因するかは不明確であるが、中ッ原遺跡の後期前半の集落規模等を勘案すると、八ヶ岳西南麓の核的な集落への集約化とその求心的な力を中ッ原遺跡が保有していたことが大きな要因のひとつと考えられる。なぜなら、八ヶ岳西南麓のC・D・Eグループ後期後半の集落形が中期集落の崩壊した姿である住居址がまとまった形を呈さず、中央広場を中心とした集落構造とならず、台地斜面に住居址が散在する形であるのに

第２表　茅野市内縄文後期遺跡の様相(1)

	遺跡名	地区名	時期					集落	散布地	住居址		方形柱穴列	土坑		集石・配石	遺跡継続型	その他
			称名寺	堀之内1	堀之内2	加曽利B1	加曽利B2			竪穴住居	敷石住居			鉢被土坑			
1	御座岩岩陰	北山白樺湖	■	■	■	■	■									A	
2	楢窪岩陰	北山蛇原	□	■	■	■	■									A	
3	上之段	北山湯川	■	■	■	■	■	●		4		5	▨			A	
4	上の平	米沢塩沢	□	■	□	□	□		●							E	
5	よせの台	米沢塩沢	■	■	□	□	□	●					▨			D	
6	一ノ瀬	米沢塩沢	■	■	■	■	■	●		6	2	19	▨	7	▨	A	中実土偶破片
7	大六殿	米沢北大塩	■	■	□	□	□	●		3	1		▨			D	
8	駒形	米沢北大塩	■	■	■	■	□	●			■		▨	3	▨	A	
9	大出苅	米沢北大塩	■	■	□	□	□	●			1		▨			E	
10	人桜	米沢北大塩	■	■	■	■	■	●		■	■		▨	▨	▨	A	中実土偶破片１
11	八幡坂	米沢北大塩	■	■	■	□	□	●		1			▨			C	
12	中ノ平	米沢鋳物師屋	□	■	■	□	□		●				▨			E	
13	棚畑	米沢鋳物師屋	■	■	■	■	■	●			1	9	▨	4	▨	A	中実１中空土偶破片１
14	棚畑山	ちの城山	□	■	□	□	□									E	
15	光明寺	ちの上原	□	■	□	□	□									E	
16	原地	ちの塚原	□	■	□	□	□									E	
17	阿弥陀堂	ちの塚原	■	■	□	□	□	●			1					D	
18	大蔵社	ちの茅野	□	■	□	□	□		●							E	
19	笹原上勝１	湖東笹原	□	■	□	□	□		●							E	
20	下尾根	湖東笹原	□	■	□	□	□		●							E	
21	長峯	湖東須栗平	■	■	■	■	□	●		■	■		▨	▨		C	
22	聖石	湖東須栗平	■	■	■	■	□	●		■	■		▨	▨	▨	B	
23	別田沢	湖東須栗平	□	■	□	□	□		●							E	
24	山口	湖東山口	□	■	□	□	□		●							E	
25	新井下	湖東新井	□	■	■	■	□	●		3	1		▨			D	
26	中ッ原	湖東山口	■	■	■	■	□	●		10	3		▨	9	▨	B	中空土偶完形１
27	花蒔	湖東花蒔	□	□	□	□	□										
28	中原	豊平福沢	□	■	□	□	□	●			1					E	
29	宮の上	豊平福沢	□	■	□	□	□									E	
30	日向上	豊平日向	■	■	□	□	□									D	

第２表　茅野市内縄文後期遺跡の様相(2)

	遺跡名	地区名	時期					集落	散布地	住居址		方形柱穴列	土坑		集石・配石	遺跡継続型	その他
			称名寺	堀之内1	堀之内2	加曽利B1	加曽利B2			竪穴住居	敷石住居			袋状土坑			
31	塩之目尻	豊平塩之目						●								D	
32	中ツルネ	豊平塩之目						●		2	3					D	
33	立石	豊平南大塩						●		7		7				C	
34	中ッ原A	豊平南大塩						●		1	1	3				D	
35	葛蒲沢A	湖東堀							●							E	
36	尖石	豊平南大塩						●			1					D	
37	与助尾根南	豊平南大塩							●							E	
38	新水掛A	豊平上場沢						●			1					E	
39	鴨田	豊平上場沢						●		2	1					C	
40	金堀場	豊平上場沢						●								C	
41	稗田弧A	泉野下棚木						●		3	3	4		1		C	
42	長峰	玉川長峰						●								D	
43	下ノ原	玉川荒神						●			2	6		1		C	中実土偶破片１
44	中御前	玉川荒神														E	
45	茅野和田	玉川累沢						●		3						B	
46	藤塚	玉川神之原															
47	日鴨寺	泉野中道						●								E	
48	鹿尾根	泉野小屋場						●		1						E	
49	神垣外	宮川田沢							●							E	
50	大悦	宮川丸山							●							E	
51	竹ノ木山西	金沢御狩野														E	
52	竹ノ木山東	金沢御狩野														E	
53	頭殿沢	金沢御狩野															
54	御社宮司	宮川茅野							●								
55	勝山	宮川堅窯						●		9	4			6			
56	高部	宮川高部						●								A	
57	小祠通	宮川安国寺						●									
58	山の神	宮川西茅野														E	
59	蟹畑	宮川西茅野							●							E	

対して、中ッ原遺跡では中央広場の土坑群を囲むように住居址が展開する規範を有する姿は、旧来からの集落の規範が継承されていた結果と考えられ、規範を維持できる統率的な力が中ッ原遺跡に存在したと捉えることができ、他の集落では崩壊した集落構造の規範が、中ッ原遺跡では保たれていた点に本遺跡の特徴を見ることができ、このような背景を「仮面土偶」副葬祭式が執り行われた背景として考えることができないか。

4．出土遺物からみた後期前半の遺跡

後期前半の土偶の出土傾向　市域に於ける後期前半の土偶の出土傾向を概観すると、5遺跡から数にして6点の土偶が出土しており、その量は中期の土偶に比較して希少と言える。今回中ッ原遺跡で出土したような全身が把握されるものは少なく、その大半が脚部・腕部といった部位破片が主体を占める。構造的には中実土偶と中空土偶の両者が認められ、中実土偶が主体を占める。また、全身像を窺える資料は本遺跡と棚畑遺跡、大桜遺跡だけである。

後期前半土偶の出土数の傾向は、中期土偶のように大量保有の傾向等の偏在性は窺えないが、出土遺跡の傾向を概観すると、遺跡の継続パターンがA・Bグループの遺跡に土偶が保有されている傾向が認められる。

長期継続形の集落での土偶の保有傾向は、後期前半だけに限った現象ではなく中期に顕著に認められる傾向であるが、長期継続形集落では土偶祭式の頻度が高かったものと捉えられる。これを中期からの伝統を継続するものと考えるべきか、後期前半に新たに展開したものと考えるべきか判断する材料がなく現時点に於いては判然としないが、いずれにせよ中ッ原遺跡での土偶祭祀は他の遺跡では見ることができず、中ッ原遺跡がこの八ヶ岳西南麓内で、埋葬と関わりを持つような新たなる土偶祭式が執り行われるような何らかの特性的要因を持った集落であると捉えることができよう。

鉢被せの行われる土坑　本遺跡のもう一つの特徴的な遺構として鉢被土坑を挙げることができる。鉢被土坑は今回の調査により8基が確認され、その数は市域の後期の遺跡内で最も多い。時期的にみると堀之内2式期に限定され、複数が一定の範囲に単位をもって構築される傾向を捉えることができた。

市域に於ける後期前半の遺跡での類例では、下ノ原遺跡の堀之内1式期の例が最も古く、幅広い時期に亘る類例の認められた一ノ瀬遺跡の例から鉢被せの存続時期を探ると、堀之内2式期から加曽利B2式期までの類例が認められている。本遺跡の例では、堀之内2式期中段階から堀之内2式期新段階までの概ね限定された時間内の数回に亘る小期内で鉢被せが行われる点に特徴を持つ。同様な傾向の認められる遺跡はないが、棚畑遺跡・駒形遺跡・勝山遺跡に於いては堀之内2式期中段階から加曽利B1式期まで類例が認められ、市域に於いて堀之内2式期中段階から加曽利B1式期にかけ、鉢被せが多く行われる傾向を看取ることができる。

鉢被せに用いられている土器は、堀之内1式期から堀之内2式中段階では朝顔形浅鉢で、堀之内2式新段階から加曽利B1式期にかけては体部が直線的に大きく開く鉢へと移行する。また、堀之内2式期新段階で鉢被せに用いられている鉢は、中ッ原遺跡第Ⅲ次第177号・第150号土坑等に用いられていた鉢と、棚畑遺跡第446号土坑、勝山遺跡第399号土坑に同類型を認めることができるように、鉢被せに用いられている鉢は、一定の選択の上に用いられている可能性がある。

鉢被せの行われた土坑はどのような遺跡から検出されるのであろうか。市域に於いて鉢被せの行われていた土坑が検出された遺跡は9遺跡を数える。これらの遺跡の時期の継続形をみると、A・B・Cグループ、特にA・Bグループを中心に認められる傾向が窺え、言い換えれば規模が大きく継続時期の長い集落に偏在する傾向を指摘できる。

複数鉢被せの行われた土坑が検出されている遺跡で、これらの土坑分布を概観すると、一定の範囲に偏在する傾向が窺え、棚畑遺跡や駒形遺跡に於いても複数基が並列する状況が認められるが、中ッ原遺跡のように複数のグループより構成されるような傾向は見られない。

このように鉢被せの行われた土坑は、八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓等に於いては、堀之内１式期から加曽利Ｂ２式期までの存続が認められ、特に堀之内２式中段階から加曽利Ｂ１式期を最盛期とするようで、堀之内２式期新段階では同類型の鉢が多く用いられている点などから、被せるための鉢が選択されていた可能性も指摘でき、また、全ての遺跡に認められるものではなく、長期継続の大集落に限定され、集落内の一定の範囲に集中して構築される傾向があり、ある種の選択性を持って鉢被せが行われていた可能性が考えられる。希少性・選択性等から鉢被せが行われて埋葬されている者の優位性等も考えることができよう。

上記の点を踏まえて中ッ原遺跡の類例に立ち返ると、鉢被せ土坑が市域に於いて最も多く検出され、また、鉢被せ土坑が限定された範囲に重複関係を有して構築されたグループが、集落内に複数構成されている点などを考慮すると、本遺跡は複数の集団構成を有する集落の可能性を指摘することができる。　（守矢昌文）

第４節　調査の成果と今後の課題

１．調査の成果

はじめに　　平成11年度から平成13年度まで基盤整備事業に伴い行われた中ッ原遺跡の発掘調査は、縄文時代中期から後期前半にかけての大集落であることが確認され、136軒にも及ぶ竪穴住居址や数えられないくらいの土坑が密集して検出されている。これら全ての遺構についてその性格・時期等を整理報告すべきであるが、平成14年度１年間だけの短期の整理期間しか事業終了期間との関係よりとることができず、全遺構について検討を加えることができなかった。そのために詳細な遺物の分析を通して集落分析を行うことはできず、集落の変遷等や集落構造を明解に現すことができなかった。

今回は遺跡全体の概要報告に留め、特に「仮面土偶」の時代後期前半を中心に整理を進めてきた。そのために概要が述べられた遺構は全体の微々たる部分だけで、中ッ原集落の全体像を述べるまでには至ってはいない。

調査の結果　　今回「仮面土偶」の出土状態について重点を置き、土偶の土坑内からの出土状態を中心として分析を加えてきた。その結果「仮面土偶」は人為的に脚部をはずされ、胎内に有機物が詰め込まれて墓壙内に副葬されるという一連の行為を経たことが想定できた。また、「仮面土偶」についても後期前半堀之内２式期新段階に帰属し、中部地方を中心に分布域を持つ新町タイプ土偶の範疇に帰属し、この群の中でもずば抜けた大きさと優れた製作技法により作られていることが確認できた。

また、鉢被土坑の被葬者について、その希少性や選択性より優位者への行為と捉え、「仮面土偶」の副葬も優位者への行為と捉えられた。複雑な所作を経た副葬儀式、鉢被せよりもより希少性が高い点などを考慮すると、「仮面土偶」の副葬を最も上位に位置付けることができそうである。

中期からの伝統的な環状集落構成が崩れ、中期的な規範の凋落していく後期前半の八ヶ岳西南麓の遺跡群の中にあって、中期からの集落構成を踏襲し環状構成を採り、ある程度の規模を保持し存続する中ッ原遺跡の在り方や、墓壙への大形土偶副葬祭式の実施や、鉢被墓壙の集団単位が複数である点などは他の後期前半の集落には見られないことであり、そこには何らかの救心的な力を想定できる。

後期後半に焦点をあてて遺物の整理を行ってきた。その結果堀之内２式期に帰属する遺構同士に重複関係が認められることより、堀之内２式期が細分できることが確認され、また、鉢被葬のなされた土坑の重複関

係より、堀之内２式期新段階に於いて小段階変遷があることが判明した。中期終末から後期初頭の資料が得られているが、今回は「仮面土偶」の時期に焦点をあて整理を進めた関係上未整理の部分がある。改めて整理を行い検討を加えたい。

２．調査の課題

今後の課題　平成11年度から平成13年度の三次に亘る発掘調査により膨大な資料が得られている。本来ならばこれらの資料を分析し、中ッ原遺跡の様相について述べなければならないが、諸々の事情により今回は、後期を中心とした大まかな概略報告にとどまっている。今後以下の点を課題としたい。

中ッ原遺跡は中期前半狢沢式期から集落が営まれ、後期前半堀之内２式期に終焉を迎える、市域の八ヶ岳西南麓集落の中でも割合長期継続の集落として捉えることができる。また、絶え間なく存続する状況は、八ヶ岳西南麓の集落の変遷を窺う上に重要な資料と言える。そのため各時期の住居址の動きと構成等について詳細に分析を行い、中ッ原集落の変遷を明らかにする必要がある。

今回の調査に於いて後期前半に焦点をあてて整理を行ってきたが、中期から後期へと大きく変換していく八ヶ岳山麓の集落にあって、本遺跡が持つ内容はこの変換期を探る重要な要素を多く含んでいると考えられる。特に住居址と土坑の関係については、整理を進め帰属時期と遺構構成について把握する必要がある。

今後再度、全体の遺物整理を行い各遺構の帰属時期を確認する基礎的な検討を経て、集落全体の様相について再検討する必要がある。

最後に「仮面土偶」の調査取り上げ・復原まで、戸沢充則先生、樋口昇一先生には、終始にわたり御指導を賜った。ここに記して感謝のことばに変えたい。

（守矢昌文）

（註・参考文献）

文献12. 1990　鵜飼幸雄　「第123号住居址」『棚畑』　茅野市教育委員会

文献13. 1964　宮坂英弋　「長野県茅野市長峯遺跡」『日本考古学年報』12　日本考古学会

文献14. 19ma　長沼　孝　「北海道の土偶」『季刊　考古学』第30号　雄山閣出版

文献15. 1996　設楽博己　「副葬される土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集　国立歴史民俗資料館

文献16. 1992　宮下健司　「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集　国立歴史民俗資料館

文献17. 1990　植木　弘　「土偶の形式と系統について」『埼玉考古』第27号　埼玉考古学会

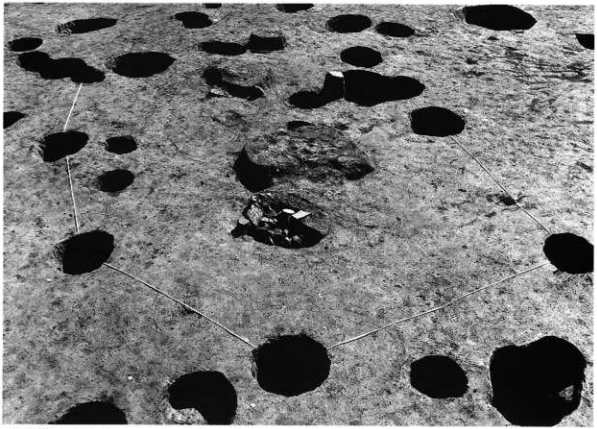
文献18. 1992　小野正文　「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集　国立歴史民俗資料館

文献19. 1979　赤羽　篤・赤羽義洋「長野県上伊那郡辰野町出土の土偶」『信濃』第31巻第４号　信濃史学会

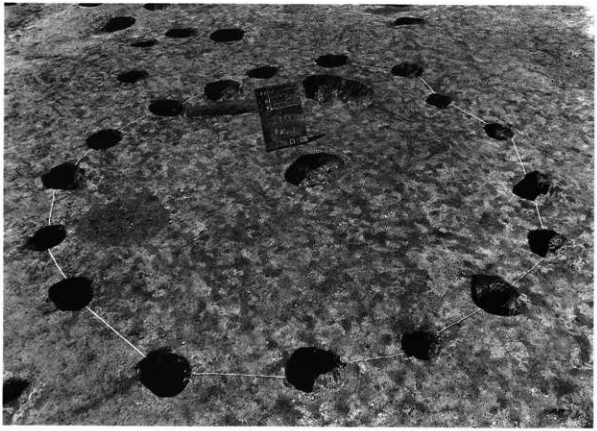
文献20. 1989　山下孝司　「山梨県韮崎市後田遺跡出土の中空土偶」『考古学雑誌』75－１　日本考古学会

文献21. 1994　石井　寛　「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』５　縄文時代文化研究会

図　　版



①Ⅱ次第1号住居址



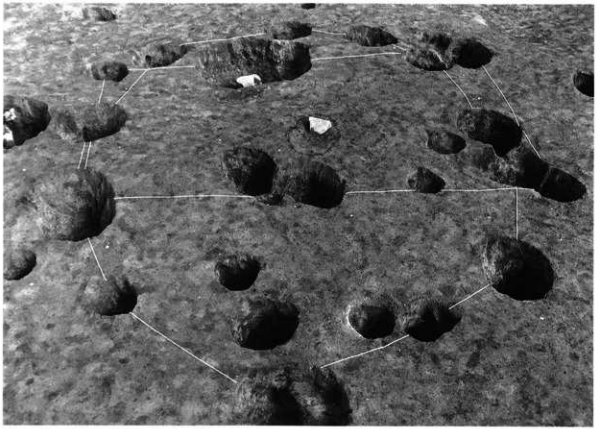
②Ⅱ次第2号住居址検出状況

図版2

①Ⅱ次第3号住居址

②Ⅱ次第5号住居址

①Ⅱ次第7号住居址検出状況



②Ⅱ次第8号住居址・方形柱穴列検出状況

図版4

①Ⅱ次第8号A・B住居址検出状況

②Ⅱ次第9号住居址検出状況

①Ⅱ次第9号住居址土器出土状態

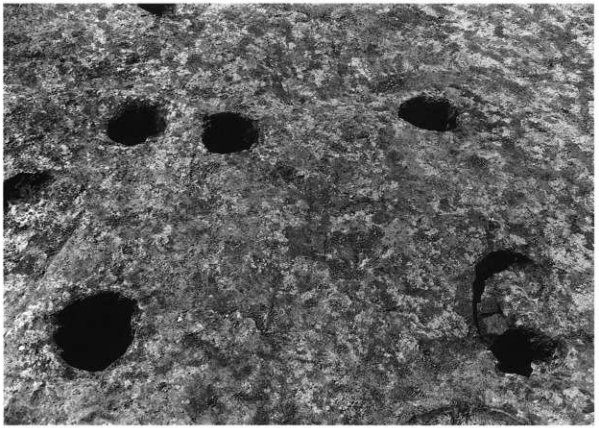
②Ⅱ次第9号住居址遺物出土状態

③Ⅱ次第15号住居址検出状況

図版 6

①Ⅱ次方形柱穴列検出状況

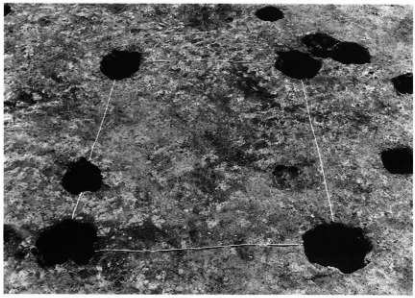
②Ⅱ次方形柱穴列群検出状況



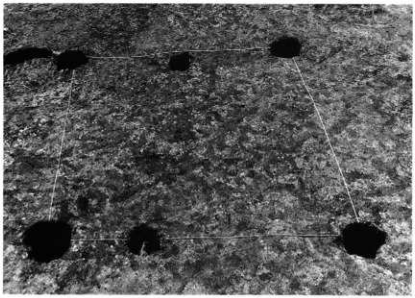
①Ⅱ次方形柱穴列検出状況

②Ⅱ次方形・円形柱穴列検出状況

図版 8

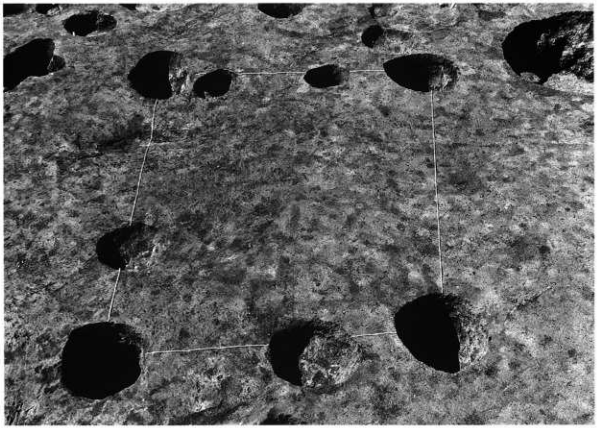


①Ⅱ次方形柱穴列検出状況



②Ⅱ次方形柱穴列検出状況

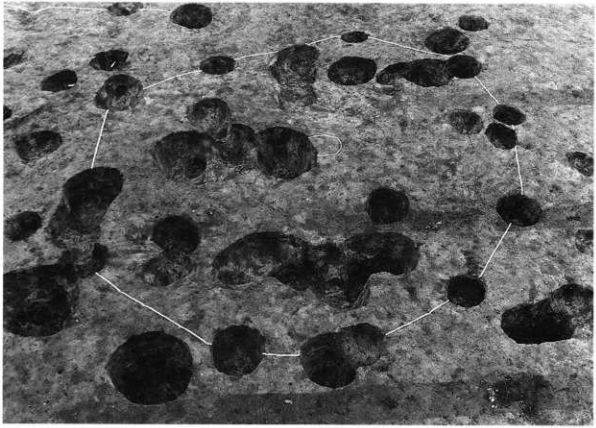
③Ⅱ次方形柱穴列検出状況



①Ⅱ次方形柱穴列検出状況

②Ⅱ次方形柱穴列群検出状況

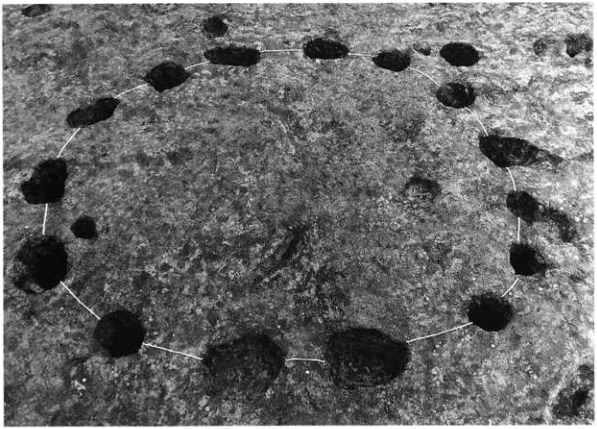
図版10



①Ⅱ次円形柱穴列検出状況

②Ⅱ次円形柱穴列検出状況

①Ⅱ次円形柱穴列検出状況



②Ⅱ次円形柱穴列検出状況

図版12

①Ⅲ次第２号住居址遺物出土状況

②Ⅲ次第４号住居址土器出土状態

①Ⅲ次第4号住居址土偶出土状態

②Ⅲ次第4号住居址遺物出土状況

図版14

①Ⅲ次第6号住居址遺物出土状態

②Ⅲ次第13号住居址炉と脇の小形炉

①Ⅲ次第14号住居址土製品出土状態

②Ⅲ次第16号住居址土器出土状態

図版16

①Ⅲ次第22号住居址遺物出土状況

②Ⅲ次第22号住居址遺物集中出土部

①Ⅲ次第22号住居址土器集中部

②Ⅲ次第25号住居址土器出土状態

図版18

①Ⅲ次第38号住居址土器出土状態

②Ⅲ次同住居址土器出土状態

③Ⅲ次第40・41号住居址遺物出土状態

①Ⅲ次第40・41号住居址遺物出土状況

②Ⅳ次同住居址小形土器出土状態

③Ⅳ次同住居址柱穴内土器出土状況

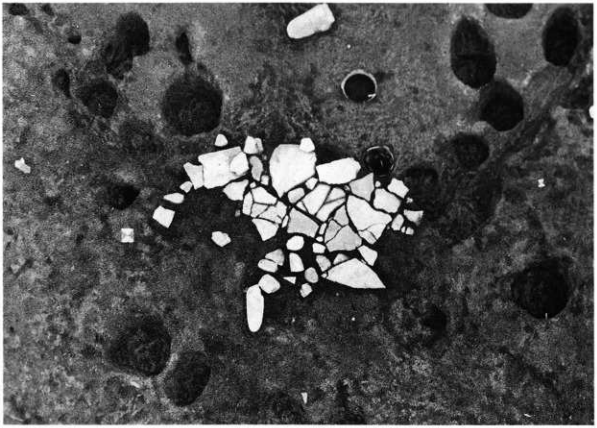
④Ⅳ次同住居址土器出土状態

⑤Ⅳ次同住居址台付土器出土状態

図版20

①Ⅲ次第51号住居址検出状況

②Ⅲ次第51号住居址石棒が組み込まれている炉



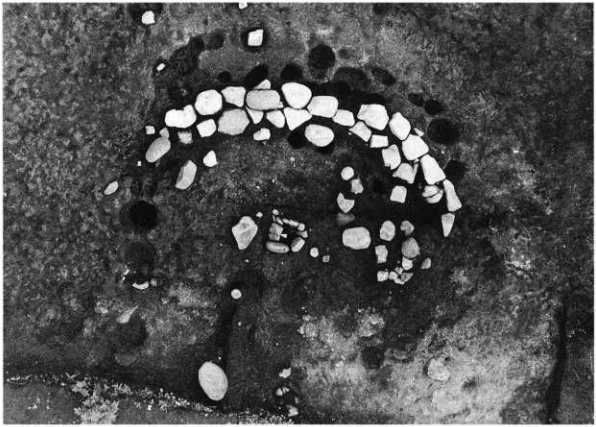
①Ⅳ次第56号住居址全景（航空測量）

②Ⅳ次第56号住居址炉内土器出土状況

図版22

①Ⅲ次第57・56号住居址遺物出土状況

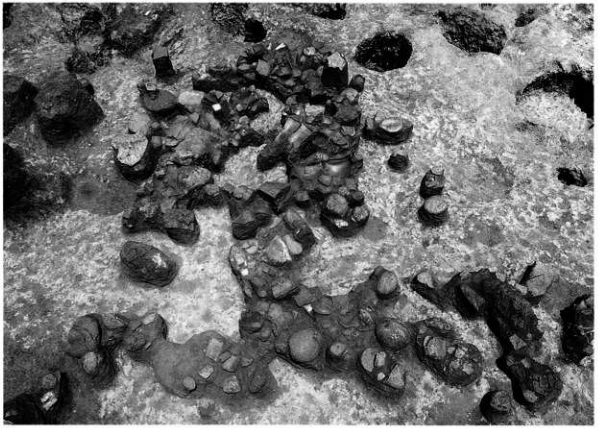
②Ⅳ次第59号住居址航空写真



①Ⅳ次第59号住居址航空測量

②Ⅳ次第59号住居址炉内土器出土状況

図版24



①Ⅳ次第81号住居址遺物出土状況

②Ⅳ次第82号住居址土器出土状態

③Ⅳ次第83号住居址土器・石囲炉検出状況

④Ⅳ次第84号住居址土器出土状態

⑤Ⅳ次第84号住居址土器出土状態

①Ⅳ次第73号住居址南土器出土状態

②Ⅳ次第74号住居址炉周辺出土状況

③Ⅳ次第74号住居址土器出土状態

④Ⅳ次第75号住居址南土器出土状態

⑤Ⅳ次第75号住居址南黒耀石出土状態

⑥Ⅳ次第76号住居址土器出土状態

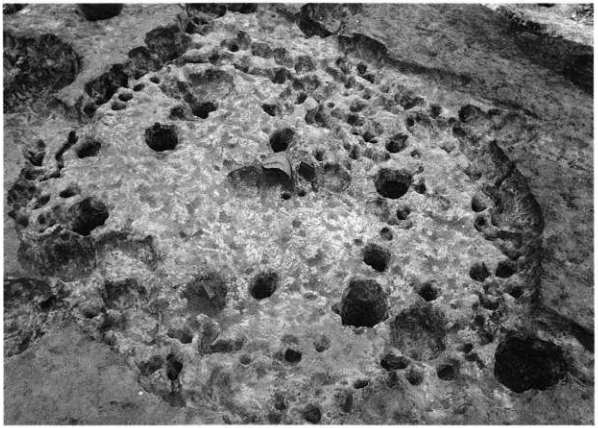
⑦Ⅳ次第77号住居址土器埋設炉

図版26

①Ⅳ次第76号住居址土器出土状態

②Ⅳ次第81号住居址土器出土状態

③Ⅳ次第81号住居址内出土埋甕



①Ⅳ次第87号住居址遺物出土状況

②Ⅳ次第89号住居址甕上器出土状況

図版28

①Ⅳ次第85号住居址竈内礫検出状態

②Ⅳ次第86号住居址内埋甕出土状況

③Ⅳ次第86号住居址遺物出土状況

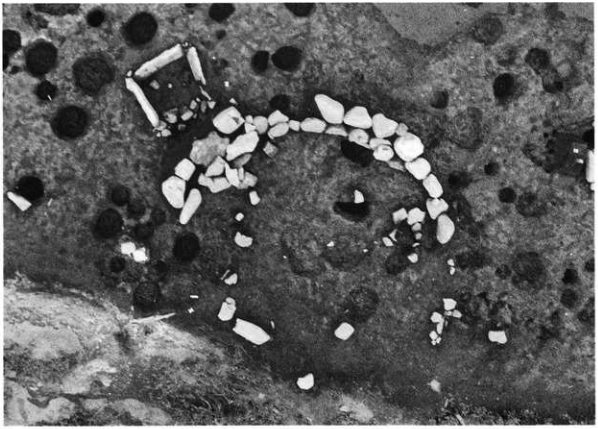
①Ⅳ次第86号住居址土器出土状態

②Ⅳ次第86号住居址土器出土状態

③Ⅳ次第86号住居址土器出土状態

図版30

①Ⅳ次第90号住居址航空写真



②Ⅳ次第90号住居址航空測量写真

①Ⅳ次第90号住居址土器埋設炉

②Ⅳ次第90号住居址土器埋設炉内土器検出状態

③Ⅳ次第90号住居址内柱状礫出土状態

図版32

①Ⅳ次第92号住居址遺物出土状態

②Ⅳ次第96号住居址遺物出土状態

③Ⅳ次第94号住居址遺物出土状態

④Ⅳ次第94号住居址炉検出状況

⑤Ⅳ次第94号住居址炉内土器出土状態

①Ⅳ次第94号住居址土器出土状態

②Ⅳ次同住居址土器出土状態

図版34

①Ⅳ次第95号住居址土器出土状態

②Ⅳ次第95号住居址土器出土状態

③Ⅳ次第96号住居址炉と石棒検出状況

④Ⅳ次第96号住居址土器出土状態

⑤Ⅳ次第101号住居址有孔鍔付土器出土状態

①Ⅳ次第101号住居址柱穴内土器出土状況

②Ⅳ次第104・103・107号住居址検出状況

図版36

①Ⅳ次第103・104・107号住居址航空測量写真

②Ⅳ次第103号住居址検出状況

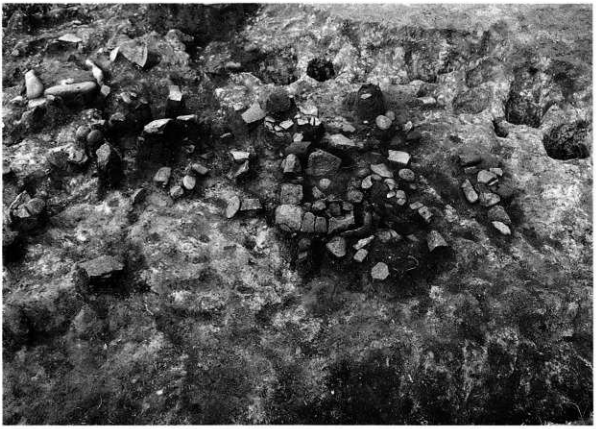
③Ⅳ次第103号住居址炉内土器出土状態

①Ⅳ次第3号住居址焼土検出状況

②Ⅳ次第3号住居址遺物出土状況

③Ⅳ次第3号住居址炉内土器出土状況

図版38



①Ⅳ次第107号住居址遺物出土状況

②Ⅳ次第107号住居址炉周辺遺物出土状況

①Ⅳ次第107号住居址土器出土状態

②Ⅳ次第104・103・107号住居址掘上げ

図版40

①Ⅳ次第105号住居址埋甕

②Ⅳ次第105号住居址埋甕

③Ⅳ次第105号住居址土器出土状態

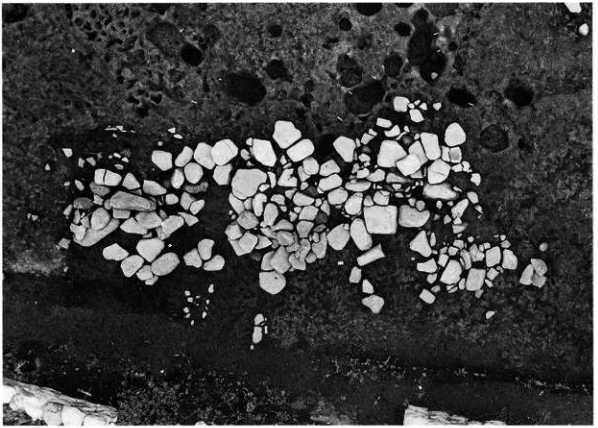
④Ⅳ次第108号住居址埋甕

⑤Ⅳ次第109号住居址土器出土状況

⑥Ⅳ次第112号住居址土器出土状況

⑦Ⅳ次第113号住居址土器出土状況

①Ⅳ次第117・118・119号住居址周辺



②Ⅳ次第117・118・119号住居址航空測量写真

図版42

①Ⅳ次第117号住居址全景

②Ⅳ次第117号住居址敷石部

①Ⅳ次第117号住居址検出状況

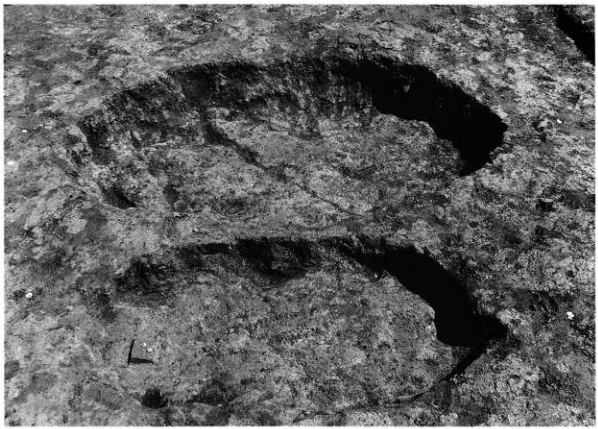
②Ⅳ次第117号住居址炉検出状況

③Ⅳ次第118号住居址検出状況

図版44

①Ⅳ次道路敷部掘上げ

②Ⅳ次第122号住居址内埋甕



①Ⅱ次第206・207号土坑遺物出土状況

②Ⅱ次第207号土坑遺物出土状況

③Ⅱ次第207号土坑ヒスイ玉出土状態

図版46

①Ⅲ次第451号土坑遺物出土状況

②Ⅲ次第569号土坑遺物出土状況

①Ⅱ次第572・660・595号土坑遺物出土状況

②Ⅱ次第660号土坑コハク出土状態

図版48

①Ⅱ次第614号土坑遺物出土状況

②Ⅱ次第614号土坑ヒスイ垂飾り出土状態

①Ⅲ次第1号独立土器出土状況

②Ⅲ次第3号独立土器出土状況

図版50

①Ⅲ次第70号土坑周辺

②Ⅲ次第70号土坑周辺セクション面

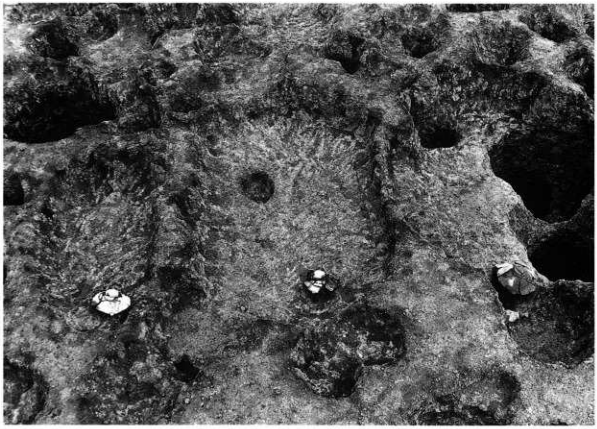
①Ⅲ次第70号土坑仮面土偶出土状況（北側から）

②Ⅲ次第70号土坑仮面土偶出土状況（上方から）

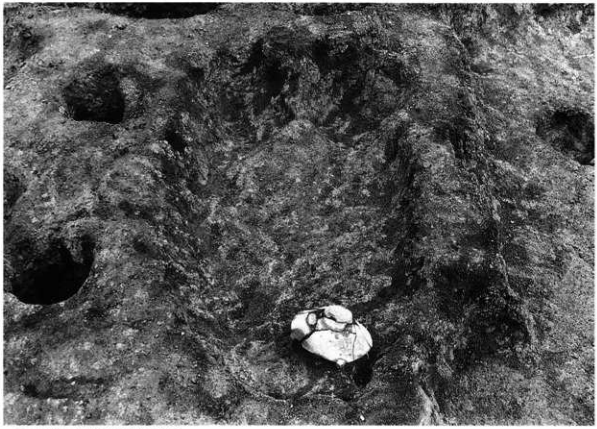
図版52

①Ⅲ次第74号土坑遺物出土状況

②Ⅲ次第122・114・115号土坑検出状況

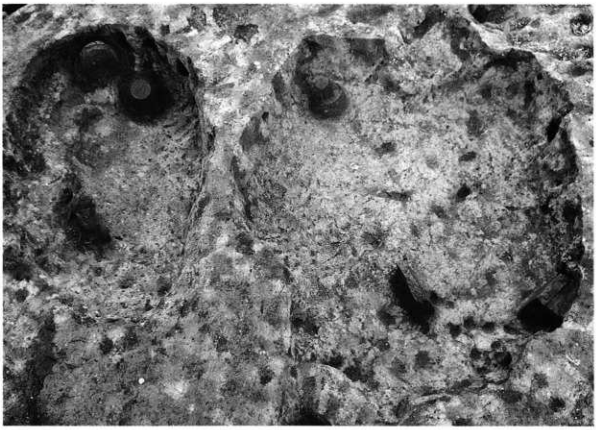


①Ⅲ次第177・150・163号土坑遺物出土状況

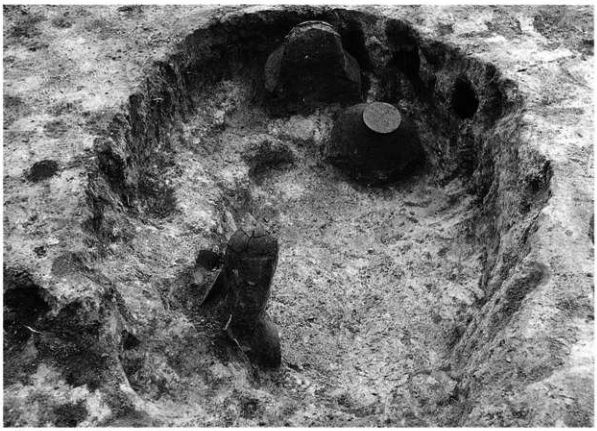


②Ⅲ次第177号土坑遺物出土状況

図版54



①Ⅳ次第814号土坑、第823・821・829号土坑遺物出土状況



②Ⅳ次第814号土坑内土器出土状況

①Ⅳ次第81号土坑遺物出土状況

②Ⅳ次第84号土坑内南側切合い状況

③Ⅳ次第84号土坑内北側切合い状況

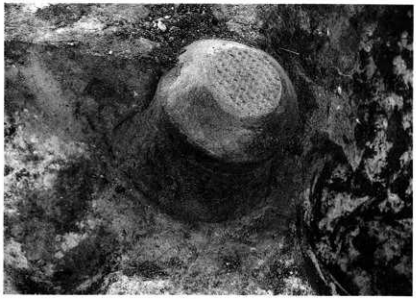
図版56

①Ⅳ次第23・29号土坑遺物出土状況

②Ⅳ次第23号土坑浅鉢出土状況

③Ⅳ次第23号土坑浅鉢出土状況

①Ⅳ次第29号土坑鉢出土状況（北側から）



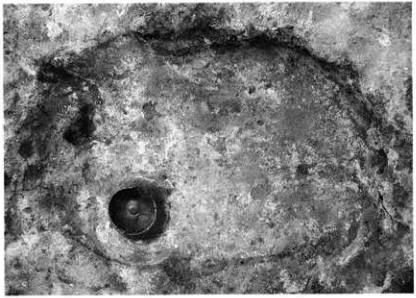
②Ⅳ次第29号土坑鉢出土状態

③Ⅳ次第29号土坑鉢出土状況（南側から）

図版58

①Ⅳ次第758号土坑遺物出土状況

②Ⅳ次第875号土坑遺物出土状況



③Ⅳ次第954号土坑遺物出土状況

①Ⅲ次4号住居址

②Ⅲ次6号住居址

③Ⅲ次16号住居址

④Ⅲ次17号住居址

⑤Ⅲ次25号住居址

⑥Ⅲ次32号住居址

⑦Ⅲ次38号住居址

⑧Ⅲ次38号住居址

⑨Ⅲ次40号住居址

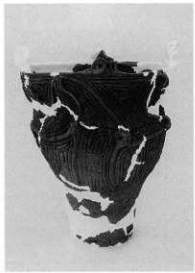
図版60

⑩Ⅲ次40号住居址

⑪Ⅲ次40号住居址

⑫Ⅲ次40号住居址

⑬Ⅲ次40号住居址



⑭Ⅲ次41号住居址

⑮Ⅲ次41号住居址

⑯Ⅲ次48号住居址

⑰Ⅲ次57号住居址

⑱Ⅲ次57号住居址

⑲Ⅲ次57号住居址

⑳Ⅲ次68号住居址

㉑Ⅲ次74号住居址

㉒Ⅲ次76号住居址

㉓Ⅳ次81号住居址

㉔Ⅳ次81号住居址

㉕Ⅳ次81号住居址

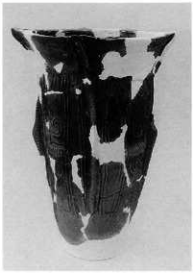
㉖Ⅳ次81号住居址

図版62

㉗Ⅳ次81号住居址

㉘Ⅳ次81号住居址

㉙Ⅳ次81号住居址



㉚Ⅳ次81号住居址

㉛Ⅳ次82号住居址

㉜Ⅳ次84号住居址

㉝Ⅳ次86号住居址

㉞Ⅳ次86号住居址

㉟Ⅳ次111号住居址

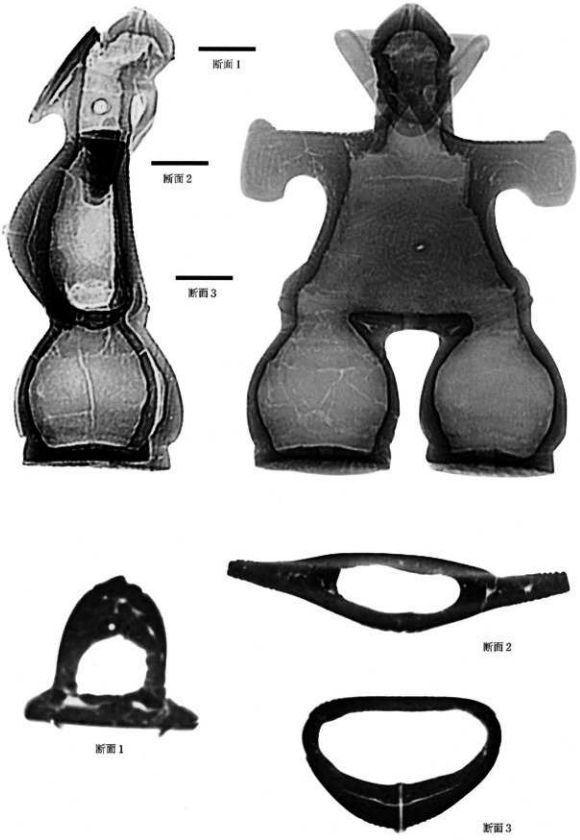
㊱Ⅳ次112号住居址

㊲Ⅳ次113号住居址

㊳Ⅱ次独立土器No.3

㊴Ⅲ次454号土坑

図版64



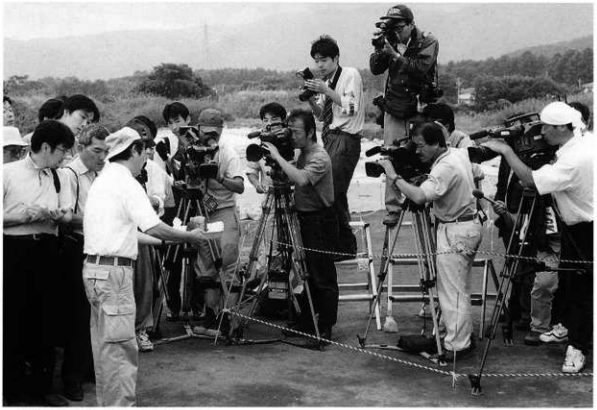
Ⅲ次第70号土坑出土土偶のX線写真（CT）

土偶脚部から取り上げ

土偶取り上げ風景

図版66

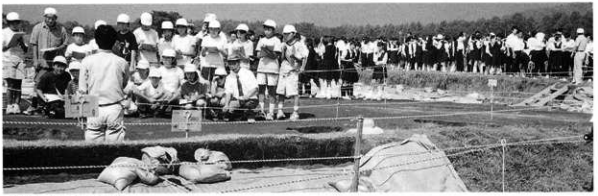
取り上げられた仮面土偶



土偶の取り上げに集まった報道関係者

見学会に押し寄せる人々

見学会に訪れた人々



見学に訪れた生徒たち

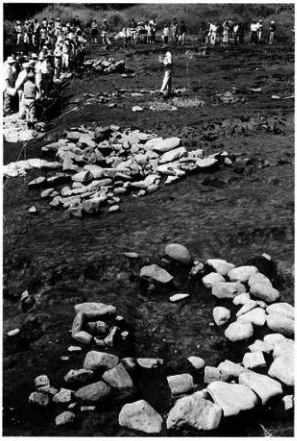
図版68

①重機による表剥ぎ

②発掘作業

③実測作業

④埴土による保護措置についての協議



⑤3年目の見学会

⑥信濃教育会による見学

⑦発掘調査に参加した皆さん

中ッ原縄文公園での建御柱

完成した中ッ原縄文公園全景

報告書抄録

ふりがな	なかっぱらいせき
書名	中ッ原遺跡
副書名	平成11・12・13年度基盤整備事業(土地総)中村地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	百瀬　一郎・守矢　昌文
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391－8501　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL0266－72－2101
発行年月日	西暦2003年3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
中ッ原遺跡 (なかっぱらいせき)	長野県 (ながのけん) 茅野市 (ちの)し 湖東 (こひがし) 中ッ原 (なかっぱら)	20214	60	36° 1′ 38″	138° 12′ 57″	1999.6.4～ 2000.1.31 2000.4.21～ 2001.1.30 2001.5.1～ 2001.10.16	11,590m²	基盤整備事業 中村地区に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ッ原遺跡 (なかっぱらいせき)	集落址	縄文 近世	竪穴住居址 136 方形柱穴列 14 土坑 約2,800	前期初頭・中期初頭 ～ 後期前半土器片 土偶 剥片・砕片 石鏃・スクレパー ヒスイ垂飾 コハク垂飾 本業灰釉碗片 本業鉄釉碗片	縄文時代中期初頭から後期前半まで継続する拠点的な環状集落で、集落中央には土坑群が密集しており、その中の一つから後期「仮面土偶」が出土している。

中ッ原遺跡

――平成11・12・13年度基盤整備事業(上地総)中村地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書――

平成15年3月6日　印刷
平成15年3月12日　発行

編集
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目6番地1号
TEL (0266) 72−2101

印刷　永明社印刷所
長野県茅野市塚原二丁目12番30号